
六連星の王座

シトラチネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六連星の王座

【Nコード】

N0995V

【作者名】

シトラチネ

【あらすじ】

少女新兵マリスは特殊部隊に配属され、極秘プロジェクトの遂行を命じられる。

それは、裏密教呪術を操る王子を別人にすり替えるという任務だった。（以前、別サイトにて掲載していたものをサイト閉鎖により移植）

「今宵が満願の夜」

墨染めの僧衣を纏うと、男は闇と融合してしまいそうだった。だが憎悪と執念が燦る蒼い目は、墓地に漂う人魂のように幻怪な光を放っている。

昼間は色彩の宝庫たる南国の砂浜も、夜になれば深黒に沈んで空と海の区別もつかない。人払いされたこの私有地では虫までもが息を潜め、風までもが避けて通り、星までもが瞬きを止めているようだった。

「導師をお助け出来ず、申し訳ございません」

僧の向かいに立つ青年が呟いた。墨染めでなく臙脂色の僧衣だが、闇夜の中では大差無い。

「大祇師一人でも修法は執り行える。お前が贅になり、血脈が絶えることだけは避けねばならん。戻るが良い」

「やはり、導師が御自ら贅に？」

男はぐつと顎を引いて肯定を示した。

「調伏に贅を供犠せねばならんのは、お前も承知の筈だ。我が一族の長きにわたる悲願のためならば、私は喜んで人身御供ともなるう」
漆黒に瑠璃が重ねられた青年の瞳は、所在無げに足許をうろつく。
「父上が御供になられたら、私は一人でどうすれば……」

「まだ死ねん。あの星が天の中心となるまでは」

力強くそう言っつて、男は星空を見上げた。彼らの間であのと称される星は一つしかない。天上で十三番目に明るい恒星。牡牛座の中央に位置する赤い星は、牡牛の目とも、心臓とも呼ばれる。

「アルデバランは王家の星。必ずやまた輝きを取り戻すだろう。我々の手で」

黒衣の僧は青年に背を向け、白布で大きく囲われた幕の中へと姿を消した。そこには青年が昼間のうちに調べた儀式用具がある。炉

に入火されたのであろう、ぱちぱちと音が立ち、白煙が夜空へ昇り始める。やがて読経が始まった。

「オンシユチリキヤラロハウケンソワカ……」

今夜は一週間を費やした祈祷の最終日である。明日にでも彼らの祈願は成就するだろう。そして青年の父も遠からず命を落とすことになるのだ。

青年は牡牛座を見上げる。赤く輝くアルデバランの隣には、散開星団ヒアデスが控えている。つと、その星団を断ち切るように星が流れた。同じ牡牛座にある星団プレアデス、すばるの方角からだ。

「……嫌な兆候だ」

火の粉が闇空に舞い上がる。風に乗れば星になれると勘違いしているかのようだ。願いが届かず失速し、熱を消されながら朽ちて行くその姿を、青年はじつと見ていた。

蜂蜜が塗られたようにてろりと光るダークオークの扉の前で、マリスは丹田へ息を引き込んだ。

権威が形を得たような扉の向こうには、権威が人になった者がマリスを待っている筈だった。高まりすぎて肺を圧迫していた緊張を呼気と共にゆっくり吐いていく。

アメリカ連邦ノースカロライナ州 Fayetteville、Fort Bragg 陸軍基地。三年前にアメリカ連邦籍を得て移住して以来、マリスはここを訪れることになるなど想像したこともなかった。

一年前にアメリカ連邦軍は志願制から男女共に徴兵制となり、マリスはハイスクール卒業早々に入隊した。軍籍に入りそれでもなお、この基地に足を踏み入れる可能性は欠片も感じていなかった。

何しろ Fort Bragg 陸軍基地と言えば、陸軍特殊部隊の代名詞とも、聖地とも呼ばれている。レンジャー連隊、グリーンベレー、デルタフォースを擁する特殊作戦軍の中核だ。八週間のブートキャンプ、すなわち新兵訓練を昨日修了したばかりの少女新兵マリスどころか、一般兵卒には一生縁が無い場所と言っても過言でない。

新兵訓練修了式直後に教官からこの基地への召喚を告げられたマリスは、ここへ来てもなお何かの手違いではないかと疑っていた。ゲートの守衛もすれ違う者達も軍人特有の無表情を装ってはいたが、明らかにマリスの階級章へ視線を走らせていた。

山形一つの階級章が表示するのはプライベート、つまり二等兵。初等兵から元帥まで二十五以上にわたる階級の中で下から二番目、特殊部隊とは無縁の最下層である。

しかもマリスは生粋の大和日本人種だ。大和日本では落ち着いた所作によって年上と思われがちだったが、白人が過半数を占めるアメリカ連邦において、マリスは実年齢以上に見られたことがない。

陸軍の制服であるグリーンギャリソンキャップにドレスジャケ

ツトで固めてはいいたものの、学生が基地に紛れ込んでいると誤解されても不思議でなかった。

階級と年齢に対する密やかな視線を差し向けられても、マリスは毅然と顔を上げて、このホワイト大佐の執務室へとたどり着いた。深呼吸をし、革靴の踵を今一度きつちりと揃えて、マリスは扉をノックする。

氏名と所属を告げると、相手はホワイト大佐の副官だと名乗った。集合まで、このまま執務控室にて待機。そう言われて初めて、召集されたのが自分だけでないことを知る。

手違いだと追いつ返されるのを予想し半ば期待もしていたマリスは、倍になって襲い来る緊迫を感知しないよう、自らを騙しながら控室の壁際に立った。

幸い召集メンバーの中では一番乗りだったようで、マリスは後続が副官に名乗るのを余すことなく聞くことが出来た。

最初は陸軍看護師団、カイリ・ハナサキ。
ラストネームからして日系と思われたが、亜麻色の髪に栗色の瞳は、クォーターよりももっと大和日本人種の血は薄そうだった。白人系の年齢を推量するにはまだ慣れないマリスだが、二十五にはなっていないだろうと踏む。

看護婦だけにいわゆる軍人とは少し雰囲気の違い、その動きは無駄が排除されていて柔らかさを残している。カイリはマリスと目が合うとほんの微かに目尻を緩め、年上女性の優しさを滲ませた。

続いて中央軍第三軍団第四歩兵師団上等兵、リク・イノウエ。
彼は耳が痛くなりそうな気合の入った大声で名乗った。この時点でマリスは彼を体育会系と認識する。

マリスと同様、純粹の大和日本人種に見えた。歩兵に相応しく短髪で日焼けし、ジャケットの上からでも明らかかな筋骨隆々の体軀を

している。黒目からは武闘派に特有のぎらぎら強い光を振り撒いていた。

上等兵という階級で考えると、年齢は二十か二十一と推測出来た。そして三番目は軍服ではなく、スーツ姿の三十に近そうな男性だった。中央情報局アジア宗教分析官、テイト・カジワラ。

マリスは現実に出会う事を想定したこともなかったその肩書きだけでなく、カジワラという名字を持ちながら彼が金髪青眼であることに驚きを覚えた。恐らく大和日本人種の血は受け継がれていない。カジワラを名乗るにあたって何らかの事情があったのかもしれない、とマリスは考えた。

マリスが隣で見上げれば首が痛くなりそうな長身で、肌は学者にありがちで不健康に白い。だらしなく伸びた金髪を後ろで束ねて眼鏡をかけ、張り詰めた空気を居心地悪そうにしている。彼の曲がり気味のネクタイにケチャップと思しき染みがあるのには、気付かない振りをすることにした。

所属も階級もばらばらな四人が並び、何の理由で、どんな目的でここに呼ばれたのか更に訳が分からない。

だがマリスは感情を表に出さずにいる点で、新兵訓練センターの教官を感心させていた。不可解な召集に戸惑いを深めつつも、きちりと冷静な表情を貫き通す。父親の長年にわたる指導によるものであり、この点に関しては父に感謝しなければいけない、とマリスは苦々しさと共に認めた。

ここで予定の人物が揃ったらしい。副官は大股に部屋を横切ると、ホワイト大佐の執務室へ続くと思われるドアを開けた。

重くはないのだろうか、というのがホワイト大佐に対するマリスの第一にして率直な感想だった。所属、階級、戦歴、それらを示す刺繍あるいはメタル製の徽章で大佐のジャケットは埋め尽くされて

いる。

中でもマリスの目を引いたのはやはり、陸軍特殊部隊のパッチ。矢尻を象ったブルー地に、イエローの剣と三本の稲妻が鮮やかだ。それらの色の洪水は雲の上、あるいは画面の向こうの存在でしかなかった特殊部隊、その司令部の一翼と対面していることをマリスに生々しく実感させた。

四十代であろう長身瘦躯の大佐からは、感情さえ余分なものとして削ぎ落とされているようだった。鷹を想起させるアイスブルーの鋭い瞳は、冷徹な一瞥で自分の何を読み取られたのだろうか、誰しもを不安にさせるに違いない。

敬礼の仕方ひとつでそんな自分の思考も虚勢も筒抜けな気がして、マリスは逃げ出したい気分になった。

大佐は平坦な口調で遠路の足労をねぎらう。ピリオドの度に置く僅かな間が威圧感となつて、ずしずしとマリスの肩へのしかかった。「本日の用件を伝える」

一通りの名乗りが済むと、大佐は革張りの椅子に体を沈めて顎を引く。マリスは冤罪で有罪判決を受ける被告人の気分になった。ホワイト大佐の凍て付いた視線が自分を忘れてくれるよう、思わず祈る。

「陸軍特殊作戦軍民事／心理作戦軍団第二心理作戦部隊への転属を命ずる。梶原分析官を准尉に任官、隊長とする。隊の任務はグアヌ準州におけるプレアデス計画遂行である」

特殊作戦部隊へ配属。新兵マリスの脳は青天の霹靂、あまりに長い師団名、初耳の計画に硬化する。

速くなり始めていた呼吸に気付き、瞬時に押さえ込んだ。大佐に悟られなかったかと心配になるが、有難くも召集された面々を眺め回す彼の視線の軌道に、マリスは含まれていないようだった。

並んだ他の三人の反応を窺ってみたかったが、大佐の面前では微動だに出来ない。動くことを許されているのは臉と心肺のみである。視点を大佐の背後の国旗に固定したまま、説明がなされるのを待った。

「知つての通り、心理作戦部隊は作戦地域住民からアメリカ連邦の政策に協力的な人物を選出、彼らに親連邦行動を取らせるための特殊部隊だ」

そこでマリスの頭は動き出し、知識を検索し始める。

心理作戦部隊はアメリカ連邦に好意的でない国家において、その政権に弾圧された民族や団体などに対し、密かに教育や武器を与えて反政府行動を煽る部隊のことだ。東南アジアの軍事政権国家、中東の独裁政権国家でこれらの部隊が暗躍していたのは有名な話である。

しかしそれはあくまでも仮想敵国に対してであり、アメリカ連邦内の準州に適用されるなど前代未聞だった。グアヌ島といえばマリスの出身国である大和日本国から近く、修学旅行先としても人気の手軽な太平洋の南国リゾートである。

「グアヌ準州には公選の知事が置かれている。だが現知事アルデバラ五世はグアヌのかつての王族であり、事実上の立憲君主制だ。このアルデバラ五世がアメリカ連邦から独立しようとする動きが、にわかに顕著になってきた」

そういった事情と自分との関連性が、マリスは見当もつかない。今朝までのフォートブラッグ陸軍基地同様、グアヌ島は未踏の地だ。親戚知人がいるわけでもない。

「プレアデス計画とはアルデバラ五世の長男、ヒアデス・アルデバランを親アメリカ化するというものだ」

ホワイト大佐はマリスの肩越しに後方へ視線を送った。背後から歩み寄る静かな気配がする。マリスはそこでようやく、召集メンバ―と大佐以外の人間がこの部屋にいたことに気付いた。

大佐の横に立ったスーツの男性は理知的な気品を漂わせ、コーヒ

―色の髪をした長身の青年だった。

大和日本人と白人のハーフにも見えたが、それにしては黒にブル―が絞られた珍しい瞳の色をしている。その瞳の焦点は真つ先にマリスへ合わせられた。見つめていたのを知られたかと、マリスは慌てて微かに顔の角度を変えた。

「紹介しよう。ヒアデス・アルデバランの一卵性双生児、スヴァルだ。しかし彼の存在はヒアデスにも、父親であるアルデバラン五世にさえ知られていない。母親は数年前に死去している」

コン、とホワイト大佐が拳の第二関節をデスクに突く硬い音は、判決を下す裁判長の木槌のように重々しく響いた。

「ヒアデスとスヴァルを入れ替える。アルデバラン五世は勿論、誰一人に悟られることも無く、だ。それが君達に課される使命だ」

梶原艇人は本日何度目か、数える気力も起きない溜息を漏らした。辞令と分隊創設の目的を簡潔すぎるほど簡潔に述べた大佐の執務室から退き、カンファレンスルームへ移動していた。

隊長として詳細な説明をしなければならぬ。だが部下となった三人の日系アメリカ人とスヴァルを前に、場違い感は募る一方だった。

今朝までの身分は、中央情報局の片隅で情報の収集と体系化を専門とする分析官だった。軍人の経験も、軍人の部下を統率する経験も無かったし、資質があるとも到底思えなかった。難解な文字や画像を相手に、研究室で紙と本に埋没しているのが幸せなのだ。

しかし准尉の階級と隊長の任を与えられてしまった以上、従うしかないのは承知していた。

士官候補生になった気分でホワイトボードに梶原艇人、横に Tate Kajiwara と併記する。そして部下達に向き直り、大和日本語で話を始めた。

「えー……初めまして、梶原艇人といいます。元々の所属は中央情報局アジア宗教分析課ですが、このプレアデス計画実行隊長を任せて頂きました。精一杯頑張りますので、皆さん、どうぞよろしく願います」

部屋はしーんと静まり返っている。反応を見回したところ、筋肉の塊みたいな男がしきりに瞬きを繰り返していた。驚いているようだ。

また妙な剃り残しでもこさえていたかと顎をさすってみたが、どうやらきちんと剃れている。髪は縛って来たから、寝癖は隠せている筈だ。

では資料によると猪植陸、Rick Inoue という名の二十歳の歩兵師団上等兵は何をぼかんとしているのか。考えていると、

横手でぷつと吹き出す音がした。

「士官学校の見習い士官も、こんなに初々しくはないだろうね。そう思わないか、猪植上等兵」

「Yes, Sir No, Sir」

吹き出したスヴァル、Svarは穏やかに微笑している。猪植上等兵は核心を突かれたのか、慌てた様子でアメリカ語を口走った。

「あーそうか、そうですね。申し訳ありません。どうもこういう立場は慣れていなくて……鬼軍曹みたいのをお望みでしたら、期待外れですみません」

「言っているそばから、君は」

忍び笑いしていたが、スヴァルは雰囲気や和らげてくれたようだ。それに応えるように、安心をもたらす柔らかな笑顔を見せたのは看護師団で二十三歳の花咲海璃、Kylie Hanasakiだ。だがもう一人の女性はギリシャ彫刻のような涼やかさを崩さない。

やりにくいなあ、とテイトは頬を掻いた。

「梶原准尉、まずは我々の目的を詳細に伺いたいのだが」

「ああ、はい。では、ブリーフィングを始めましょう」

スヴァルは説明されなくとも既に全てを熟知している。流石に助け舟を出してもらっていることに気付いて、テイトは人数分の資料ファイルを手を取った。配って回ろうとした瞬間に、ギリシャ彫刻が素早く立ち上がる。

「自分が配布致します」

その起立は何事かとびくびく身構えていたテイトは、そう言われてようやく理由を納得した。隊長というものは、自分の足で資料を配って歩く必要がないらしい。

ブーツキャンプを修了したばかりの十八歳の新兵が自分より余程落ち着いているのを見て、テイトはまた小さく苦い溜息を吐いた。

「ホワイト大佐からの説明にもありました通り、我々の目標はグア
又準州知事アルデバラン五世の長男、ヒアデスを極秘裏にスヴァル
へすり替えることです。ヒアデスは次回の知事選挙への出馬が予想
されています。彼をスヴァルに替えて親アメリカ路線に誘導するこ
とで、グアヌの独立を阻止します」

特殊な部隊であるからには、常識に縛られない柔軟な思想であつ
て然るべきだ。情報共有の徹底のためにも質問があれば遠慮なくど
うぞ、とテイトは前置きして話し出した。

「まずアルデバラン家の歴史を振り返るとしましょう。アルデバラ
ン王朝は一八九〇年に成立。それまでは現地チャバロ人王朝でした
が、最後のチャバロ人王はアルデバラン一世を後継に指名して死去
しています」

遠慮がちなカイリの拳手を見つけて、テイトは先を促した。

「ということは、アルデバラン家はチャバロ人ではないということ
でしょうか」

心持ち首を傾け、おっとりした口調で質問する姿には、奥ゆかし
い大和日本人らしさがある。金茶色の髪と抜けるように白い肌は白
人の遺伝子の多さを物語っていたが、その外見と異なり大和日本人
の性質を継いでいるようだ。

積極的に弁論の達人なアメリカ人女性が苦手なテイトは、ほつと
しながら頷いてみせた。

「いい質問ですねえ、その通りです。アルデバランと名乗っていま
すが、彼らは王位に着く直前に大和日本から移住してきた一族でし
た」

移住と王位継承に際してのおぞましい詳細は後回しにして、テイ
トは先を続けることにした。

「けれどもアルデバラン王朝成立の僅か十年後、グアヌはアメリカ
連邦の植民地に。その後の植民地時代を経て、一八九八年にアメリ
ア準州になります。以降は公選の知事が置かれ、立法には一院制議
会があたっています」

緊張で既に喉が渴き始めていたテイトは、代わりに唇を湿らせた。
「準州民の圧倒的支持により、グア又準州知事はアルデバラン家の世襲制に等しい状態です。アメリカ政府がグア又を事実上の立憲君主制とみなす理由はここにあります」

テイトはアメリカ政府がどんなに対立候補を立てても敗北してきた歴史を簡単に述べた。

「対抗馬を出す一方で、アメリカ政府はアルデバラン家に半強制的にアメリカ人と結婚させました。血を薄める事によって精神をも希釈する、というけしからん思想ですねえ」

妄信的な国家主義者には、この表現はアメリカ連邦の政策への非難と受け取られるだろう。

だがカイリは人道主義が勝っているらしく、申し訳なさそうに一瞬唇を結び、それからふと思いついたようにスヴァルへと目を転じた。

アメリカ人との結婚を重ねたにしては、スヴァルは大和日本人種の血を濃く引いているではないか　と問いたげなカイリの視線を受け止め、当のスヴァルが頷いて口を開く。

「アルデバラン五世はアメリカ白人女性との結婚を拒否、大和日本人を妻にした。この時点でアルデバラン家は、反アメリカの意志ありとしてマークされることになった」

スヴァルは白人と大和日本人のハーフに近い。大和日本人にしては背が高く、焦茶色の髪をしている。特筆すべきはその瞳の色だ。

テイトは改めてスヴァルの目を観察した。

瞳の黒い大和日本人と青眼のアメリカ人が結婚した場合、子供の瞳は黒になる。これは黒の遺伝子が青に対して優性であるからだ。故に、黒に青が乗ったスヴァルの瞳は通常、ハーフには出現しないものだ。

恐らくアルデバラン五世の妻は大和日本の東北出身だったのだろう、とテイトは推測していた。

東北には純粹な大和日本人でありながら何故か、ごく稀に青や緑

の瞳をした者が存在する。突然変異の遺伝子の悪戯なのか、隠されたルーツの歴史があるのかは定かでない。

いずれその研究もしてみたいものだ、などと考えていたテイトの視界から、その不思議な瞳がついと逃げた。

「残念ながら男性に見惚れられる趣味はないんだ、テイト」

「君にとって幸運なことに、私にもその嗜好はないなあ、スヴァル」
大真面目なスヴァルに大真面目で答えて、同時に笑い出す。笑いが止まってみると残された三人、特に猪植上等兵は呆気に取られているようだ。スヴァルが軽く手を挙げる。

「失礼、私達は既知の仲なんだ。それで、梶原准尉。今の話で、この人選についてある程度推測がなされたと思うが、役割分担は」

話を脱線させたスヴァル本人の軌道修正に助けられて、テイトは話題を元に戻した。

「人選についてですが……グアヌの公用語は当然、アメリカ語です。ですがこの作戦遂行にあたっては、アメリカ軍内でも大和日本語に堪能な者が選ばれました。大和日本出身のアルデブラン家が大和日本語を話し、大和日本文化と深い繋がりを持つからです」

しかし名前だけをスヴァルに気に入られて選ばれたことを知ったら、猪植上等兵はどんな顔をするだろうか、とテイトはそれ以上の追及がされないことを願った。

「我々の任務はまず、スヴァルの知識をヒアデスと同期させる事。スヴァルは資料の中でグアヌやヒアデス関係者を見知ってはいますが、現地入りして実際との照合や微調整をしていく必要があります。作戦中はグアヌ大学生を装い、共同生活をします。低年齢の隊員を集めたのはそのためですね」

グアヌ大学には、アメリカ連邦公認会計士への足掛かりとして留学する大和日本人が大勢在籍している。十八歳、二十歳、二十三歳

の部下達、同じく二十三歳のスヴァルが大学生として、また二十七歳のテイトが博士課程の学生として身分を偽るには最適の場所であった。

「花咲看護師はスヴァルおよび隊員の健康管理。猪植上等兵にはスヴァルの護衛を担当して頂きます。また別働の特殊部隊も隠れて警護に付くことになっています。スヴァルがヒアデスと入れ替わり、安全かつ安定的に生活を落ち着かせるまで分隊は継続します」

少女新兵の役割をあえて飛ばしたことを、本人は気付いたのだろうか。

テイトは眼鏡の縁に引っ掛けるような角度で盗み見たが、相手は変わらず静かな表情を保っている。あれは実は陶器の仮面ではないのか、とテイトは疑いたくなった。質問されないのを感じて先に進める。

「アメリカ軍関係者であることを隠すため、認識票、H & a m p ; K M k 2 3 拳銃一挺、フォールディングナイフ一振り以外を特殊部隊預かりとします。制服、装備、徽章、全てです」

どうしてなんだ、とリク Rick Inoue、猪植陸歩兵師団上等兵はテーブルの下で拳を握っていた。

拳銃一挺とナイフ一振りなどと、銃器保持の自由が認められているアメリカ連邦においては、そこらの民間人の方が遙かに武装していると言っていていい。そんな軽装備で護衛出来るとは思えなかった。

実戦について無知らしい中央情報局員が何故、この特殊作戦部隊を指揮するのか。梶原准尉の覇気の無い話し方、俯き加減の気弱な態度に、リクの神経は嫌と言うほど逆撫でされていた。

リクは徴兵制導入以前に入隊した志願兵だった。前線に配備されたことはないものの、それを目標に日夜厳しい訓練に励んできたのだ。

フォートブラッグ陸軍基地への召集がかかり、更に特殊部隊への配属を命じられた瞬間には胸を躍らせた。が、その作戦内容も上官も、期待していた実践的かつ特殊技能的なものとはかけ離れていた。大和日本語に堪能である、それだけで選抜されたいのにもがっかりさせられた。

考えてみれば試験も面接も無く特殊部隊に配属されるなど、有り得ないことだ。大和日本語も能力の一つには違いないが、リクは歩兵らしく身体的能力面において抜擢されたのであって欲しかった。

しかし、上官の命令は絶対と身に叩き込まれている。失望も怒りも拳の中に握り潰し、Yes, Sirと答えて与えられた任務を全うするのが仕事だった。

「勿論」

気を鎮めようとしているリクの耳に、ソフトな声が滑り込む。

「生活の拠点となる住居には、民間仕様の防弾ベストを始めとする装備を人数分用意する。猪植上等兵が希望するであろうサブマシンガンやグレネード、暗視スコープ等も一通り揃えるそうだから、安

心してもらいたい」

発言の主、スヴァルに目を向ける。リクには王家の血筋の男の方が、まだ作戦隊長に相応しいように思えた。スヴァルには隊員達の口に出さぬ思考を拾い上げる、確かな観察眼があるらしいことを察していたからだ。

「あなたの近接戦闘力は特に秀でてしていると聞いている。グアヌにおける作戦行動範囲は市街地が中心で、万一の際には屋内での交戦も予想される。私はあなたの言語力と戦闘能力が、共に心強い戦力になると信じている」

たちまちリクはスヴァルの発言に溜飲を下げる。准尉がゲホツと笑いを誤魔化すような咳払いをしたのが一瞬だけ気になったが、リクの関心はどんな武器が有効かというエキサイティングな問題へすぐ移って行った。

「テイト。アルデバラン五世が政府に反抗的だ、という点について説明を聞こうか。大和日本人との結婚は、政府が彼の反アメリカ意志を察知した端緒に過ぎないわけだろう」

今や完全に流れをリードしているスヴァルが水を向ける。

リクは彼こそが作戦隊長であり、梶原准尉は知恵袋なのだと内心位置付けることにした。そうでもしなきゃやりきれない、と胸底で愚痴を垂れる。

「そうですね。まずは一年前のグアヌ準州知事選挙です。当時、アメリカ連邦政府は今回こそアルデバラン五世に勝利しようと強力な対立候補を掲げ、大量の選挙資金を投入して臨みました」

せめてこのですます調である調に変えるだけでもしてくれまいか、とリクは苛立っていた。政治はリクの興味をあまり刺激しない題材だ。

アメリカ連邦は大和日本と安全保障条約を締結している。が、大

和国内のアメリカ軍基地は首脳会談によって整理縮小を迫られており、島の三分の一をアメリカ連邦海軍基地が占めるグアム島は、その機能移転という点で重要な意味を持つてくる。

こうした現状がなかったら、リクは独立でも何でも自由にしてくれと欠伸を噛み殺さねばならないところだ。

「ところが、その対立候補が選挙運動中に自宅の階段から転落死します。アメリカ政府はアルデバラン五世による妨害工作を疑いました。けれどもグアム警察は事故という判断を下し、結果としてアルデバラン五世は圧倒的な得票率で再選を果たしています」

きな臭い話になってきて、リクは欠伸を我慢する必要はなさそうだと感じ始めた。

「ところで、アルデバラン家にはアメリカ政府軍と通じているチャバロ人メンテナンスがいます。チャバロ語で二を意味する、ドスというコードネームで呼ばれています。彼は我々にアルデバラン家の盗撮映像を流してくれる、貴重な情報源です」

住居や家電の管理や修理を行なうメンテナンスとしての顔と、アメリカ政府に通じる情報屋の顔。二面性にちなんで二という数字が付けられているのだろう。

そう推測するリクの拳はようやく失望を手放し、興味を握り始めていた。

「そのドスからの情報によりますと、対立候補転落死の直前一週間は、アルデバラン邸はメンテナンスもメイドも立ち入りを厳禁されていたそうです。ここで、資料の衛星写真をご覧下さい」

資料を捲ると、海に面したアルデバラン邸の衛星写真があった。庭の一部が四方を大きく布で覆われ目隠しされているが、屋根は無く中は丸見えだった。中央に台が幾つか接近して並べられており、その上には所狭しと何かが積んであるようだった。

「この設備が何か　あなたなら答えられるね、泉二等兵」

スヴァルの声には楽しげに挑むような調子があった。その双眸はリクの隣に座っていた女性二等兵へと真っ直ぐ向けられている。

リクは慌てて資料のページを戻し、Maris Izumiという名前を探し出した。

初年兵が何故特殊作戦に参加しているのかと訝しみながら、横の少女へと上体を捻った。

長そうな黒髪をきつちりと上げていて、大和日本人種にしては色白の部類に入る。細面は可愛いというより美人だが、凜として涼やかな瞳は何処か近寄り難い雰囲気だ。

自分としては看護師のカイリの方が好みだ、とリクは思った。

マリスはスヴァルを落ち着いて見返し、リクの雑念を断つような清冽な声で答えた。

「はい。護摩壇しまです」

リクの曾祖父はアメリカ軍日系二世部隊、特にその戦歴を時の大統領も賞賛した四四二連隊の兵士であった。祖国は大和日本、心はアメリカ人として敵よりもアメリカ連邦内の差別と戦った彼らの歴史は、アメリカ連邦陸軍の必修とされている。

同じくアメリカ軍日系二世部隊として輝かしい戦果を挙げた第百歩兵大隊の博物館がハワイ州に建造されているが、ハワイを今や経済的に支配する大和日本人の観光客がそこを訪れることはあまり無い。

家系は日系人同士の結婚を繰り返してきたものの、リクの精神はアメリカ軍日系二世部隊と同様にアメリカ人である。敬虔なと言うのは非常に憚られるが、リクはクリスチャンだ。護摩壇と言われても何のことか理解出来なかった。

「正解。花咲看護師と猪植上等兵のために説明しておこう。仏教の一派に密教がある。護摩を焚くと言って、護摩壇を設けて護摩木を焚くのは密教の祈祷の儀式の一つだ」

スヴァルの説明を聞いて、つまりアルデ balan 家は密教徒だとい

うわけかと理解した。この特殊作戦分隊の隊長として中央情報局アジア宗教分析官が担ぎ出されたのも、何となく合点する。

次のページは護摩壇の拡大写真を映像解析したものです、とその分析官に促されて資料を捲る。

映像処理によって、儀式用具らしきものが驚くほど鮮明に映し出されていた。文字の書かれた薪や紙などのようだが、リクには燃料にすぎないそれらがわざわざ映像解析される理由が分からない。

デスクの上でゆっくり両手を組んだスヴァルが、僅かに上体を乗り出すのが見えた。作戦にとって、この護摩壇というのが重要であるらしいことを物語っていた。

「泉二等兵、あなたの意見を聞きたい。このアルデ balan 家の護摩壇が何を意味するのか、その道の専門家として」

ハーフにしては青過ぎる感じがするスヴァルの目に対し、マリスがここに至って緊張し始めたように見受けられた。きりつとした姿勢を崩してはいないが、マリスの白い頬に漂う硬さが増大傾向にあるのをリクは感じ取った。

「申し訳ありませんが、わたしは専門家ではありません」

答えるまでに二秒はあった。軍人としては遅すぎる。

それまでリクの苛立ちの対象は温和すぎる准尉の態度であったが、瞬時に新兵の返答の遅さに切り替わった。

「認識票を拝見しよう」

スヴァルに静かに催促され、マリスは制服の襟元から長いボールチェーンと、そこに通したドッグタグを引き出す。

「五行目はBだね」

「はい」

確認するまでもなくスヴァルには、マリスのドッグタグの五行目の刻印が分かっているようだった。

ドッグタグはアメリカ連邦軍個人認識票の俗語である。小判型のステンレス板をチェーンに通し、首にかける。

一行目にはラストネーム。二行目にはファーストネームと、あればミドルネームのイニシャル。三行目には厚生年金受給番号。四行目には血液型とそのネガポジ、および性別。五行目には宗教が刻印されている。

五行目の刻印がCならカトリック、Pならプロテスタント、Jならユダヤ教徒を示す。BならばBuddhist、つまり仏教徒だ。「あなたの名前をボードに書いてもらおう。アメリカ語表記でなく、大和日本語で」

「はい」

新兵の返答は先刻ほどではなかったがリクの基準からすればまだ遅く、リクを不機嫌にさせる。

静まり返った室内で、ペン先がボードに当たる柔らかい音が続いた。

そしてホワイトボードには、泉摩^{まりす}利守という文字が書き付けられた。

ようこそ、私の究極のボディガード。

スヴァル、Svarはそう言ったら彼女はどんな顔をするだろうか、あのクール・ビューティを驚きで塗り潰してくれるだろうか、実行してみたい衝動に駆られた。

泉摩利守はプレアデス計画に必要な不可欠であり、彼女無くして完全な成功は有り得ない。計画の発動は彼女の新兵訓練修了を待つて欲しい、とホワイト大佐を説得したのは他ならぬスヴァルだった。

大和日本語に堪能なアメリカ軍人の名前リストを見た瞬間に、マリスに関する詳細な調査を依頼した。そして届いた調書を読んだ日から、スヴァルはマリスとの対面を心待ちにしていた。ホワイト大佐の執務室では、つい一番にマリスの顔を確認してしまっただほどだ。秘めた強い意志を覗かせる漆黒の瞳に、淡い珊瑚色をした唇。そこから何千回と紡がれたのであるうある言霊を、早く聞きたくて仕方が無かった。

逸る気持ちを抑え込んで、スヴァルはゆつくりと、丁寧に頼んだ。「摩利守という名前の由来について話してもらいたい」

「仏教には信仰の対象となる尊格が多数存在し、その性質によって大きく如来部、菩薩部、明王部、天部等に分類されます。摩利守は、天部の一つである摩利支天まりしてんという守護神に因んでいます」

名前リストを一目見て察した事柄を、本人の口から確認出来た。スヴァルはそれに満足しながら確認を重ねる。

「あなたの父方の家系は代々、摩利支天を本尊とする寺を守っているそうだね」

「はい」

答える目許が僅かに収縮した。触れて欲しくない話題らしいと判断したが、スヴァルはもう引き返すわけにはいかなかった。マリスを見据えて、心の内を示すサインを見逃すまいとする。

「あなたは父親に教育され、摩利支天モリシテンの密教修法ミキョウシュホウを全て体得している筈だ」

「いいえ」

今度の返事は早かった。質問を予想し、いいえと答えるべく待ち構えていたような、逡巡シュンジュンの無い早さだ。

ブレアデス計画の人選の過程で軍がマリスに対して行なった経歴調査書は、隅々までスヴァルの脳細胞に記憶されていた。

両親は彼女の幼少期に離婚、母親はアメリカ連邦に移住して、マリスは大和日本在住の父親に育てられた。小学校に上がった頃から父親に行者としての英才教育を施される。

十五歳で母親と暮らすことを希望してアメリカ連邦に渡っているが、それまでにマリスが秘法の数々を習得していたという証言が得られていた。

アメリカ連邦に移ってからのマリスは父親と連絡を取らず、部屋に仏教徒を思わせる物を一切置かなかつたらしい。

マリスの遅れがちな返答、あるいは躊躇チウジウの無さ過ぎる不自然な反応は、父親が密教に対する否定的な感情によるものか。スヴァルは推測しながら腕を組む。

「梶原准尉から同じ質問をしてもらって同じように答えたら、あなたは偽証罪に問われても文句は言えないよ」

「偽証などしておりません」

頑固な少女との間に、ぴりりとした空気が張り詰める。スヴァルはマリスの協力が得られなければ、それは死を宣告されるに等しいと思っていた。

テイト、すなわち梶原准尉からもう一度質問を繰り返してもらおうかとスヴァルが考えていると、そのテイトが恐る恐る口を開いた。「スヴァル、すまないが、あまり私の部下をいじめないで欲しいの

だけれど」

「……失礼した」

少々焦っていたことを認めて、素直に謝る。五歳も年下の少女をいきなり追い詰めてしまったかもしれない。これだからテイトにインテリヤクザなどと言われてしまうのだ。スヴァルは心の内だけで苦笑する。

「質問を訂正しよう、泉二等兵。前回の知事選の際にアルデバラン邸に設けられた護摩壇の特徴について、あなたの見解は」

マリスの瞳から、鋭さがいくらか消えた。たったそれだけのことが、スヴァルの胸につかえた黒い不安を和らげる。マリスをこの計画に引っ張り込んだことを、初めて申し訳ないと思った。

「護摩壇による祈祷は、目的によって本尊、護摩炉の形状、向き、供物などが異なってきました。目的には災害の無いことや無病を願う息災、延命や商売繁盛を願う増益、愛情を得るための敬愛などが挙げられますが」

ホワイトボードから自席へ戻る途上で淡々と述べてから、マリスは資料の衛星写真を手にして、その一部を指し示した。

「アルデバラン家の庭に設けられた護摩炉の形は三角。向きは南。ここから、この護摩壇は調伏のためのものと断定出来ます。つまり怨敵や魔障を除いたり、呪うためのものです」

看護師のカイリが Oh , my God と呟くのが聞こえた。

「更に、映像解析された拡大写真には数多くの人形ひとがたが見られます。怨敵調伏の護摩を焚く際はこの人形に殺したい相手の名前を書いて火に投じ、何も残らないほどに焼き尽くすとされています」

「ちなみにこの人形に書かれているのは、アルデバラン五世の転落死した対立候補の名です」

テイトが補足を入れ、続いて一枚のCDを掲げる。

「ここに音声データがあります。メンテナンスとして潜り込んでいくドスがアルデバラン邸に仕掛けた盗聴器のデータを分析した結果、この護摩が焚かれている時間帯に、アルデバラン五世の声紋と一致する音声が確認されました」

用意されていたラップトップで再生されると、サーというノイズに乗って低い声流れ出した。

「オンシユチリキヤラロハウケンソワカ、オンシユチリキヤラ……」

気迫の籠もった声が響き、カンファレンスルームにはどろりと濃く重い渦が巻き始めたようだった。

男は異様な程の執念さで一つの言葉を繰り返している。音量を絞つてから、テイトはマリスの方へと身を乗り出した。

「誦呪には独特のイントネーションがあるので、聞き慣れない我々には判別し難いのですが……どう思いますか」

「大威徳明王の真言です」

迷いの無い即答に、スヴァルは拍手を送りたかった。マリスの作戦参加に難色を示したホワイト大佐に聞かせてやりたいものだ、と残念がる。

しゃんと背筋を伸ばしたまま、マリスは淀まずに続けた。

「大威徳明王護摩は不動明王護摩より格段に強力と言われています。それだけ障りも大きく、修法を執り行ったアルデバラン五世側にも何らかの被害が及ぶでしょう」

「ありがとうございます。大変助かりました。席に着いてくれていいですよ。呪いの存在が明示され一気に室温が下がったような空気の中で、テイトののんびりした話し方は救いだった。軍人らしからぬ口調に最初は呆気にとられていたらしいりくまで、ふうと息を吐いている。対立候補の転落死がアルデバラン五世の呪いの結果である、と立証することは不可能だ。法的に罪を問うことは出来ない。」

だが呪術を行なうような人間が準州を国家として独立させ、民衆の圧倒的支持の勢いに乗って王となった場合、待っているのは恐怖

政治である。

テイトが声に心配を滲ませながら、そう説明した。

「グアヌ州民は七割が仏教徒です。上座部仏教と現地チャバロ人の信仰が包含されたものです。アルデバラン家もそのグアヌ特有の仏教を信仰しているように装っていますが、護摩壇を用いた呪術を行なうことから密教徒であることは間違いありませんねえ」

微かにマリスが頷いたのを、スヴァルは見逃さなかった。良い兆候だ。彼女の正義感に訴えることが出来れば、協力的になってくれるかもしれないと期待を繋ぐ。

「アルデバラン家は支持してくれている民衆を欺いていることになります。私個人としましては、アメリカ連邦からの独立がグアヌ州民の総意であれば、独立自体に異を唱えるつもりはありません。ですが、この状況では何も知らない民衆がアルデバラン家の犠牲になることは必至です」

「考えてみて欲しい事がある。アルデバラン王朝成立の経緯だ」

テイトの説明が一区切りするのを待つて話し出す。顔を全員に向けてはいたが、スヴァルの訴えたい相手はマリス一人だった。

「アルデバラン一族は十九世紀の終わりに大和日本からグアヌへ移住した。直後にチャバロ人王朝の継承者が立て続けに急死、最後のチャバロ人王は後継にアルデバラン一世を指名して、その後に死亡している」

王位継承者の相次ぐ死亡、そして先住民族の王が大和日本からの新参者を後継に指名するという不自然さ。

スヴァルは面々がそれに思い当たったのを、まさかという表情への変化で汲み取った。

「テイト、例の宗派について話して欲しい」

先刻まで、これはマリスに話させるつもりだった。

密教は非常に閉鎖的な集団だ。顕教、すなわち民衆に向かつて広く教義を説く一般の大乗仏教と異なり、密教は血脈相承けちみやくや師資相承ししと呼ばれ、師僧から弟子へのみ伝承されていく。門下に無い者に対しては情報を漏らさない。

中央情報局アジア宗教分析官であるテイトだが、密教に関する研究にはその閉鎖性ゆえに苦労している、とスヴァルは聞いていた。密教徒に教えを請わねば正確な実態は掴めない。

だが、どうやらマリスは密教に関して口をつぐんでいたらしい。密教の師資相承の遵守だけでなく、マリス自身に密教への拒絶反応がありそうなのは窺えた。説明を無理強いしてマリスを敵に回すのだけは避けたかった。

「密教には多数の宗派が存在します。大きく分けるところになります」
テイトの手がホワイトボードぞうみつに雑密、東密、台密たいみつと記述した。ペンのキャップをはめながらふと、テイトは緩んだような優しい微笑を浮かべた。

「泉二等兵には、それこそ釈迦に説法で申し訳ないですねえ」
「いいえ」

クール・ビューティーが小さく笑った。彼女の唇から白い歯を覗かせることを、人付き合いの苦手なテイトは意図していなかっただろう。なのにそれに成功した。

北風より太陽か、とスヴァルは自嘲気味に思った。

「東密というのは真言宗で、密教を中国からもたらした空海が始祖。台密は天台宗で、開祖は最澄。システマティックに完成されたこの二つに対して、それ以前のものを雑密と呼びます……が、もう一つ、眼鏡の奥にある、テイトの青い目はもう微笑んでいない。次に来る単語に備えて、スヴァルも気を引き締めた。

「影に、裏密という一派が存在すると囁かれています。呪術性が非常に高く、政敵や怨敵を呪殺するために皇族がお抱えにしていたと言われています」

禍々しい話の数々にカイリ、Kyliie Hanasaki、花咲海璃看護師は胸が悪くなっていた。

この准尉はアメリカ人なのにアジアの、しかも恐ろしげな宗教集団を研究しているなんて変わっている。だが彼みたいな分析官がいるからアメリカの治安が保たれようとしているのだ、と即座に思い直した。

それにしても、とカイリはテイトの痩せた頬を眺める。

この人の、梶原准尉の不健康そうな肌といたら。研究に没頭して寝食を忘れ、ろくに日光に当たらず、運動もしていないに違いない。熱帯海洋性気候のグアヌでは初日に倒れてしまうのではないかしら。しっかり食べてもらわなくちゃ、と早速に課題を頭へ刻む。

「裏密という一派は公式の文書には一切登場しませんし、勿論、皇族も彼らとの繋がりとどこか、彼らの存在さえ認めていません」

その健康不良青年の言葉で、カイリは健康問題から呪術集団へと関心を引き戻される。

「ですから、これは確たる裏付けの無い話に過ぎないのですが……数々の貴重な証言を元に推測すると、次のようになります。皇族と繋がって暗躍していた裏密一派ですが、皇族の力が弱まった幕府の時代になつて影を潜めます」

カイリは父親の仕事の都合で、高校生までを大和日本で育った。当然その過程で大和日本の歴史も習っている。看護学校はアメリカ連邦で修了したが、入隊してからは大和日本国内にあるアメリカ連邦軍基地に配属されていた。

外見以上に大和日本人文化に近いカイリは、テイトの説明をすんなりと理解していた。

むしろリクの方が見た目は大和日本人なのに、説明を噛み砕くの苦労しているようだった。説法、怨敵などという口語的でない単

語が出てくる度に、彼の眉間には皺が寄せられる。

不明瞭な点が無いか後でフォローしてやらねば、とカイリはまた課題を頭に入れた。

「裏密はその後、勢力復活の希望を見出します。一八六九年の大政奉還ですね。皇族と共に再び活動を活発化させるかと思われましたが、もはや皇族は裏密を必要としていなかった。時代が変わっていったんですねえ。パトロンに見放され、失望した裏密は新天地を求めたようです」

宗教つて、地盤が危うくなると海外へ布教しに行くわね。カイリはそう思ったところで、はっとする。

「グアヌのアルデバラン王朝成立は一八九〇年。大政奉還の僅か十一年後。このタイミング、そしてアルデバラン家の極めて呪術性の高い密教修法、パトロンに頼らず自力で王国を樹立しようとする動き。私は、アルデバラン一族こそが大和日本を捨てた裏密一派と考えています」

復活を目論むアルデバラン家の執念を生々しく感じて、カイリの腕には鳥肌が立った。

「裏密は一家相伝、つまり教義は弟子でなく一家に代々伝えられてきたと言われています。つまりアルデバラン家が裏密ならば、唯一の教義継承者であるヒアデスをスヴァルに替えた時点で、裏密は途絶えることになります」

アジア・オセアニア地域に展開するアメリカ連邦太平洋軍の看護師団の一員として、カイリはグアヌの戦略的重要性を良く知っていた。これはグアヌ準州の独立によって海軍の大きな拠点を失うのを阻止する一方で、危険分子を排除する一石二鳥の作戦なのだ。

ホワイト大佐、梶原准尉を隊長とする特殊作戦分隊、スヴァル氏、そしてグアヌ現地の情報源であるドス。カイリはこの七人に課せら

れた任務の重さを思い知った。

「アメリカ連邦によって暗殺が計画されたかは、我々の知るところではないが」

カイリが重圧に身を縮めているというのに、そう話し出す替え玉本人はどこか楽しそうだった。

王家の血を引いているのが理由かは分からないが、存在感も気品もある。会話の進め方を見ると、頭も良さそうだ。けれどマリスに對しては少し強引に感じた。

彼らに軋轢がないといいけれど、とカイリは心配になる。

「それなりの警護もついているし、何しろグア又準州民の圧倒的な支持を受ける要人だ。消すより親アメリカ派に転向してくれた方が、手間はかかっても得策というわけだね」

スヴァルが悠然と見回す様は、人の上に立つ者の風格を感じさせた。

「アメリカ連邦特殊作戦軍の truth、つまり真理は四つある。 Humans are more important than Hardware. 武器より人材。 Quality is better than Quantity. 量より質。 Special Operations Forces cannot be mass produced. 少数精鋭」

長い指が数えていく。

「そして Competent Special Operations Forces cannot be created after emergencies occur. 備えあれば憂いなし」

それにしても不思議な子だわと思いつながら、カイリはマリスへ目を向ける。

大和日本人種としては標準以上の身長があるが、アメリカ人の中
ではやはり小柄だ。リクのような精気に溢れる存在感はなく、むし
ろ周囲に融けて消えそうだ。かと言って影が薄いわけでもない。

こうして見れば綺麗な子ね、とカイリは思った。

ストレートのブルネットを丁寧にアップにして、ナチュラルなメ
イクは清潔感がある。アメリカ人女性が薔薇のような華やかさを競
うなら、彼女は百合の静けさを湛えている。

新兵というのはとにかく緊張して場から浮いてしまいがちなのに、
マリスはそういった意味での新兵らしさを感じさせなかった。

やっぱり寺院の娘だからかしら、と納得してみる。

カイリは大和日本での暮らしが長かったが、流石に摩利支天とい
う名までは聞き覚えが無い。マリスはその秘術は出来ないと言った
が、カイリからすれば密教の知識は中央情報局の専門家であるテイ
トと同等に豊富なのは確かだった。その博学さを買われているのだ
ろうと推測する。

「作戦遂行にあたっては、慎重な行動が求められます。と言います
のも裏密つまりアルデバラン家は、敵に対して積極的に呪術を仕掛
けると考えられるからです」

マイペースな研究者といった風情のテイトも、流石に硬い口調で
注意を喚起している。

「前々回、五年前のグアヌ準州知事選挙においても、アルデバラン
五世の対立候補は選挙直前に突然の発作に見舞われています。彼は
健康上の理由を選挙戦から降り、アルデバラン五世の再選後に死亡
しています」

技術的な問題のため、前回の知事選直前に撮影されたほどの詳細
な衛星写真は得られなかった。だがこの時もアルデバラン邸の庭で
は火を焚いているような映像が確認されている、と説明があった。

「そしてこれも確実性のある話ではないのですが」

カイリは分隊が相手にする者の陰湿さに背筋が寒くなり、思わず
自分の肘をさする。

「日本を見限って去る際に、裏密は自分達を用無しとした大和日本の天皇家に呪いをかけたとされています。具体的には明治天皇の後嗣です。太正天皇が養子という話はご存知でしょうか」

明治天皇と皇太后の間に皇子女は生まれなかった。側室との間に生まれた四人の親王、内親王も次々に亡くなっている。

そして即位した太正天皇は、典侍と呼ばれる宮中の女官との子である。明治天皇とこの女性には他に三人の皇子女があつたが、いずれも成年に達することはなかった。

太正天皇も出生直後から健康に優れず、また精神状態においても懸念があると噂され続けた。皇位を継承して健康状態が悪化、即位後僅か七年で皇太子が摂政となり、更にその七年後に四十七歳で亡くなっている。

そういった説明を受けて、カイリは怖くなる。

アルデバラン家断絶が計画されていると知つたら、彼らはアメリカ大統領を手にかけることだつて厭わないだろう。この特殊作戦分隊も危ない。

敵に悟られるような軽率な行動は厳に慎まねば、とカイリは身を引き締めた。

資料はその場で全てシュレッダーにかけられた。作戦展開中は物的証拠を残さないように厳重注意される。写真等の撮影は厳禁、筆跡の残る手紙やメモも必ず焼却処分。

作戦終了後はスヴァルは勿論、各メンバー間の連絡、面会は絶対禁止。成功にしろ失敗にしろ、任務が完了すれば二度と再び会うことの許されない人になる。

軍隊つてつくづく非人間的な組織ね、とカイリは唇を尖らせた。

「I love working for Uncle Sam!
 Let me know just who I am」
 「I love working for Uncle Sam!
 Let me know just who I am」
 「1, 2, 3, 4, United States Marine
 Corps! 1, 2, 3, 4, I love the Ma-
 rine Corps!」
 「1, 2, 3, 4, United States Marine
 Corps! 1, 2, 3, 4, I love the Ma-
 rine Corps!」

陸軍特殊作戦軍民事ノ心理作戦軍団第二心理作戦部梶原隊の朝は早い。

階級的にも年齢的にも一番下であるマリスは四時起きである。そしてまずすることはP・T・Physical Trainingつまり体力向上訓練。Good Morning Runの通称は聞こえはいいが、実情は地下ジムで筋肉大好き歩兵とみつちり三マイルのランニングだ。

毎朝マリスはリクとランニングマシンで並走し、歩調を取るための軍隊特有の歌に声を張り上げさせられる。地下で音が漏れないからというリクの提案だが、新兵マリスにとってそれは命令となる。

二マイルに差し掛かったところで、マリスはグア又入りしてから数日来、ずっと不審に思っていたことを口にした。

「あおう、先輩」

「何だ後輩」

マリスは猪植陸上等兵を先輩と呼んでいた。

通常ならばCorporal Inoueと呼ばねばならないところだが、そうもいかない。ここグア又準州における作戦展開中は、

民間人として大学生を装うことになっているからだ。

かと言ってアメリカ人学生らしくRickと呼び捨てるのは新兵として流石に気が引けて、困ったマリスは先輩と呼ぶことにしていた。

同様の理由で梶原艇人准尉は梶原さん。花咲海璃看護師はカイリさん、そしてスヴァルはスヴァルさんである。

「これって、陸軍じゃなくて海軍の歌ですよね」

「俺の好みだ」
「にべも無い返事。」

「My Corps! Your Corps! Our Corps!
The Marine Corps!」

「My Corps! Your Corps! Our Corps!
The Marine Corps!」

陸軍なのに、陸軍の花形・特殊作戦軍なのに。先輩の名前も陸軍なのに、とマリスは複雑だ。

「海軍に入りたかったんですか?」

問えばリクはびたりと黙る。マリスは走りながら冷静にリクの唇を観察した。端が忌々しげに引きつっている。

「……ひよつとして先輩、泳げなくて水が怖いとか」

「黙れ一兵卒! 三マイルから五マイルに増やされたいか!」

一マイルは一・六キロ。ブーツキャンプでも毎朝三マイル走らされていたが、もともと体力が自慢ではないマリスはそれ以上は御免だった。

「No, Sir! I don't want no teen
- age queen. I just want my M14
」

「I don't want no teen-age queen
n. I just want my M14.」

女の子よりライフルを。マリスは、この歌詞がリクの気に入りな
のを知っていた。たちまち機嫌を直したリクが調子外れに合わせる

のを確認すると、マリスはやれやれと溜息を吐く。

それが終わってシャワーを浴びると朝食の支度になる。

梶原隊の面々はなかなか好みがうるさい。まずマリスは消極的demi-vegとスヴァルにからかわれた、鶏肉と魚肉は食べるベジタリアン。

マリスの父は菜食主義者だった。仏道にある者は肉に加え、五葷ごこんと呼ばれる臭気の強い野菜も避ける。具体的にはニンニク、玉葱、蕪などである。

父親はマリスにもそうさせたが、大和日本の学校では宗教による食事の差別化にはあまり配慮がなされていない。しかも宗教上の理由で給食を残すことを認めない、頭の凝り固まった教師がいるのも事実だ。なし崩し的に肉も食べる羽目になったのが、消極的デミ・ベジの所以だ。

スヴァルは卵や牛乳も禁忌するstrict vegetarianを心がけている。成り代わる対象、ヒアデス・アルデバランがそうだからだ。よってスヴァルの食事担当は、父親の食事でベジタリアンフードを作り慣れていたマリスに決まった。

一方、リクはBBQを語らせたら翌朝になりそうなmeat-eater。ベジタリアンにも段階がある事さえ知らないようだ。

「チキンウイングが食べられなくなったら、俺は二日ともちませんよ。えっ、じゃあ代わりに何を食べるんですか？ ああ、フレンチフライか」

食事から肉を引いたらフライドポテトしか残らないという思考回路から推量するに、リクはmeat-eaterだけでなくfast food-eaterでもあるようだ。

リクはコーラが世界最高のドリンクだと信じている人種に違いはない、とマリスは密かに思う。

「先輩、野菜はジャガイモだけじゃないんですよ。豆類には先輩の
だーい好きなプロテインも含まれてます。豆腐が原料のステーキや
ハムもありますよ、先輩も一度試してみてくださいは」

「ニセもんで腹が膨れるか！」

リクには精進料理の存在意義を認める気が無いらしい。

スヴァルが含み笑いしながら首を振って見せていた。こういう人
には何を言っても無駄だよ、となだめられたようだ。

密やかな断念がされているとも気付かないようで、リクの嘆きは
止まらなかった。

「ガーリックもオニオンも駄目？ チーズバーガーなんて無理？

かーっ、俺は坊さんにはなれない。頼まれても金積まれても、絶対
ならない。肉がなきゃ生きてけない」

真剣に肉への情熱を語るリクに、カイリがにつこりしてみせた。

「安心してね、リク君。お肉なら売るほど冷蔵庫にあるわ」

「ありがとう、カイリさん！ 御礼に何でもします！」

「そお？ じゃあキッチンの壁、塗り直してもらおうかな」

「Yes, Ma'am! I'd be delighted！」

こうして、リクの食事担当は特に主義の無いカイリということに
なった。そしてリクはうまく操縦されて雑用の力仕事をさせられる
のだが、delightedの言葉通り喜んで従っている様子だ。

残るはテイト。金髪青眼のくせして朝は和食派だが、その他のこ
だわりは無い。そもそも食べることに興味が無いらしい。調査に熱
中してダイニングに下りて来ないこともしばしばで、その度にカイ
リに部屋から引きずり出されてくる。

よって、朝のキッチンは各自の主義と好みに合わせた食材が飛び
交うことになる。

マリスはふと、特殊作戦部隊の仕事で納豆をレンジ解凍している
自分に首を傾げた。

朝食も済むとブリーフィングが待っている。

スヴァルはグアヌの地理を把握するために、ボディガードのリクを伴って外出する日が続いていた。ヒアデス・アルデバランが過去に歩いた場所をくまなく歩き、地形や地名を頭でなく体に叩き込むためだ。二人からはその進捗状況と予定の報告がされる。

カイリは隊員達の健康管理と家事の傍ら、テイトの秘書も務めていた。資料作成や連絡などを甲斐甲斐しくこなす。だがマリスにはカイリが秘書仕事より、部屋に籠もりがちなテイトに食事と睡眠を取らせる事に燃えているように見えた。

「じゃあ、今日も一日よろしくお願いします」

自分には何も報告させずに打ち合わせ終了を告げるテイトの声を、マリスは唇を引き結んで聞いていた。

テイトとスヴァルが何を期待して自分をこの特殊作戦に参加させたのか、マリスは痛いほど承知していた。それに応えられない不甲斐無さと、応えたくない反発心が同居している。

「マリスさん、ちょっと」

テイトに手招きされ、マリスはとうとう来たかと腹を括った。

ここはグアヌ準州の首都アガタの郊外に建つ、四バス四ベッドルームの一軒家である。

玄関にはセキュリティ会社のサービス加入を示すラベルが貼つてあるが、誰かが押し入った場合に駆け付けて来るのは警備員でなくアメリカ海軍だ。しかも屋内にはリクが毎日愛情籠めて手入れする銃器類が待ち構えている。ただの空巢にしる、賊は生きて帰れないことを保証されていた。

その中の一室、テイトの部屋は足の踏み場を見つけるのも苦労する程の本に埋もれていた。カイリには整理整頓と掃除の観点から、リクには警備上の観点から散々片付けると言われても、テイトはへらっと笑ってこう言うのだ。

「いやあ、散らかってても僕は、何処に何があるのか把握している

「んですよ」

「そうでなくて、と詰め寄られても平気なものだ。」

「それがO型の特徴なんですよねえ」

するとカイリもリクも、とりあえずその日は文句を言うのを諦める。

マリスは最初、テイトがわざとはぐらかしているのかと思っていた。だが真面目に受け答えしているつもりなのを知って、頭の中の隊員観察メモ・テイト欄に無頓着の文字を追加していた。

何処に何があるのか把握している以上は崩してはいけないのだろう、と慎重に本の塔の間を縫って、マリスは勧められた椅子にたどり着く。そこにもファイルが重ねられていたが、テイトは気付いていないようだ。

仕方なくマリスは近辺のカーペットが露出している貴重なスペースをそのファイルで埋めて、ようやく腰を下ろすことに成功した。

「実を言いますと僕は今、困ってしまってますねえ。何がって、友人の調査結果を信じるか、部下である君を信じるかということなんです」

マリスは一週間前の、フォートブラッグ基地での会合を思い出した。父親に教育され、摩利支天の密教修法を全て体得している筈だと断言したスヴァルの強い視線が蘇る。

息を一つ大きく吸い、実際に眉尻を下げて困っている様子の准士官を見つめ返した。

「ご友人の調査通り、わたしは摩利支天の修法を行なえます」

テイトは大きく脛と腕を開く。それは感嘆でもあり、何故嘘をついたのかという問いかけでもあるようだった。

「ですが、全部ではありません。だからあの時、スヴァルさんにはいいえと言いました」

眼鏡の向こうの青い目がきよんとする。開いていた腕が、膝の上にはたりと落ちた。

全ては体得していない。そういう意味でいいえと言ったのは故意の説明不足だ。

マリスは叱られるかと覚悟していたが、返って来たのは意外にも朗笑だった。わざわざ私物で持ち込んだのか、テイトは扇子で膝を打ったりしている。

軍配団扇のつもりですか、と聞いてみたくなるのを我慢した。

「あーそうか、そうだったんですね。いやはや」

まるつきり白人の顔で、いやはやなどと言われると気が抜ける。

あの人調子狂うんだよな、と独り言のように呟いていたリクに賛同しなくなった。

しかし言ばれて困るのはマリスである。途端に上機嫌になったテイトを制そうと、急いで言い足した。

「それに、今は出来ないんです。この任務を命じられてから、努力はしています。けれど三年間のブランクがありますし」

「Hm-hum」

先刻と打って変わって、テイトの相槌はアメリカ人的だ。

「わたし自身、迷いがあつて……力不足で、申し訳ありません」

「差し支えなければ、何に対して迷っているのか、聞いてもいいですか？」

テイトはマリスの上官だ。差し支えなければなどと下手に出る必要は無く、話せと命令出来る立場にいる。

けれどそうしようとも、そう出来るとも思っていないなさそうなテイトの謙虚さに打たれて、マリスは話す決意を固めた。

「最初に申し上げておきますが、わたしには摩利支天神鞭法しんぺんを使うことは出来ません。誰かを呪殺するなんて、恐ろしくて出来ません。わたしはそれが原因で父と衝突して以来、一切密教に関わっていないんです。ドッグタグの宗教表示は弾みと言うか、癖と言うか」

「いえ、マリスさん」

「神鞭法はやり方も知りませんし、例え教わっても出来ません。わたしは仏の道は、そういう目的のためにあるのではないと思っています。そう考える限り修法は効力を発揮しません。ですから」

「マリスさん、マリスさん」

寡黙を貫いてきた新兵は堰を切ったように話し出した。上官の制止を無視してまで出来ない、しないという否定的単語を懸命に強調している。新兵とはいえ、軍令は絶対とされる軍人失格の剣幕と拒絶だ。

これまでギリシャ彫刻のような白い静けさに満たされていた筈のマリス。その内側がただの十八歳の少女であることを、テイトはようやく肌身に感じた。

「落ち着いて。誰も君に、そんな怖い事を頼もうなんて思っていないんですから」

「……そうなんですか？」

テイトは何度も頷いてみせたが努力虚しく、マリスの瞳にあるのは拒否と不信ばかりだ。

「君が言っていたように調伏を行なう場合には、それだけのものが引き換えにされるとか」

五年前のアルデバラン五世の政敵病死と同時期に、アルデバラン五世の妻も同じ病気で他界している。一年前の政敵転落死には何が引き換えにされるか不明だが、家系断絶の回避を考えればアルデバラン五世自身の筈だ。

でも、とテイトは逆接の接続詞に力を籠めた。

「でも僕は、僕の部下を一人として犠牲にしようとは思っていませんから」

マリスの膝の上にある両手は祈るように握り締められている。テイトの言葉の信憑性を決めあぐねているようだった。

「リクの家系にはですね、アメリカ軍日系二世部隊、四四二連隊の兵士がいたそうです」

一見脈絡の無い話題転換に、マリスは戸惑ったようだ。

だが日系二世部隊の歴史といえば、アメリカ陸軍の必修科目だ。新兵訓練センターで耳にした記憶に行き当たったらしく、話の先を促すような相槌が返って来た。

「彼らのモットーは Go For Broke!、当たって砕けるとか打ち砕けとか、カミカゼの精神ですねえ。その精神で彼らは輝かしい戦歴を残しましたけど、同じ事を現代のこのアメリカ軍日系二世部隊に望むつもりはないんです」

プレアデス計画へのマリスの選抜理由は、ヒアデス呪殺ではない。もし呪殺が可能だとしても、命を生贄にさせてまで行なわせるつもりはない。テイトはそう重ねて断言した。

「そういう面からすれば幸いホワイト大佐は修法の効果に非常に懐疑的で、彼は知識以上に君に期待出来るものはないと考えています。よって我々の使命はヒアデスとスヴァルの入れ替えのみで、ヒアデスの処遇までは管轄外ですから。僕達がすべきなのはスヴァルを教育し、守る事。それ以上はしません」

「はい……」

マリスの昂ぶっていた感情が急速に抑え込まれていくのが、黒曜石の瞳の揺れ幅で見取れた。冷静さを取り戻すのが早いのは修行の成果だろうなあ、とテイトは感心しながらそれを眺める。

父親と対立した過去を掘り起こされ、そのうえ呪殺の要請を警戒していたら、修法は出来ないと微妙な嘘をついたのも無理はない。

志願兵ではないのだから、いやたとえ志願兵だとしても、ブート

キャンプ直後の新兵に殺人の心構えなど無くて当然だ。

可哀想に、と同情するテイトの向かいでマリスは安心したように肩から力を抜いている。長い髪を下ろしてシンプルな水色のワンピース姿のマリスは何処にでもいる一人の少女で、とても修法を会得した行者には見えなかった。

修法と言えば、と金髪に包まれたテイトの脳は摩利支天の呪殺法を思い出した。

「だってねえ。摩利支天の神鞭法って、あれでしょう。怨敵の名前を書いた紙を、何百回も鞭打つとかいう……ははっ、ちょっと恥ずかしくて、人前じゃ出来ませんよねえ」

返事があるまでに、何故か三秒はあった。

「人前じゃなくても出来ませんが、その……そういう問題じゃなく」

「アルデバラン五世みたいに護摩を焚いたりするのは、いかにも呪いっぽくて格好もつきますけどねえ」

今度はしーんとしていた。マリスは答えに苦慮しているような難しい顔をしている。テイトとしては慰めたつもりだったのだが、あまり効果は無かったようだ。

「……ではわたしの役割は、摩利支天の隠身のご加護を受けるという事だと捉えれば宜しいのでしょうか」

展開に唐突感があったような気がしたが、前向きになったらしいマリスの発言が有難くて、テイトはとにかく急いで頷いた。

「そうそう、そうなんです。僕の知識の確認も兼ねて、君の出来る事を教えてもらえませんか。師資相承の密教の戒律には、どうか目を瞑って頂くという事で」

「分かりました」

「摩利支天は密教における尊格の一つで、陽炎が神格化されたもの

です。陽炎は目に見えませんが、悪事災難から陽炎のように身を隠し、何者にも害されることがありません。これが日本では攻撃から身を守ると解釈され、武士の守護神として中世から信仰を集めました」

テイトはふんふんと顎を縦に揺らしながら聞いていた。

摩利支天は、一般的にはあまり馴染みのある存在ではない。だが加賀の前田家、長州の毛利家、楠木正成、赤穂浪士の大石内蔵助、新撰組の近藤勇と摩利支天を信奉した武士は枚挙に暇が無い。

その流れを汲んで剣道や武道、選挙に臨む者や勝負師、相場師の必勝祈願の神としても信仰されている。

だがテイトに言わせれば、必勝は摩利支天の本来の利益^{しやく}ではない。陽炎のように身を隠す、すなわち隠身こそが摩利支天の最大の特徴なのだ。

攻撃は最大の防御、という理論は摩利支天にそぐわない。防御の徹底により勝機を見出す、攻撃側の自滅を誘発する、という地道で静かな戦略なのだ。

流石に実家が摩利支天を本尊とする寺であり、一時は行者だっただけあって、マリスも似たような事を実に流れ良く述べた。三年間の空白があっても、幼い頃から叩き込まれた知識が失われることはなかったようだ。

「ご加護ですが、例えば護符を家に貼れば泥棒から身を隠すという意味で盗難に遭わず、同様にして火難や水難も避ける事が出来ます。護符を持ち歩けばその人は陽炎のように人々の意識に存在を感じさせず、結果として災厄が避けていきます」

つまり悪人、魔物、災い、あらゆるものの目から隠れる事が出来る。

六臂像や八臂像の摩利支天は針と糸を持しており、これは仏像としては珍しい事である。あらゆるものの目と口を縫い、見えなくするという摩利支天の隠身の利益を象徴しているのだ。

「隠形術^{おんぎょうじゆ}は印を結び摩利支天の真言を百八回唱える事で、誰からも

姿を見られなくなります。これは物理的に消えるという事ではなく、誰の目にも捉えられなくなるという意味です。つまり……透明人間です」

「ぷっ」

思わずテイトは吹き出した。アメリカ連邦陸軍特殊作戦部隊の会議中に、大真面目に透明人間などと口にされたら可笑しくもなる。笑ってしまったから、テイトは失礼だったかと慌てて咳払いした。

だが恐る恐る窺うと、マリスは俯いた唇の端で笑っている。マリスなりの冗談だったらしい。テイトはほっと胸を撫で下ろした。

「アメリカ軍風に言えばF-117A、ナイトホークというわけですねえ」

「はい」

笑いを滲ませた視線に、この部下が心を開いたことを教えられる。信頼は何よりの財産だ。テイトは自分の何がマリスにそうさせたか定かでなかった。

だが、にわか軍人とはいえ隊長として一歩前に進めた事を、緩やかに上昇する胸の温度と共にはつきり自覚していた。

「それから封言術ふうげんと言う修法もあるのですが……」

急にマリスはようやくやく見せた笑顔を早くも消し去ってしまい、心持ち首をすくめている。

「今のわたしは、護符かんじょうに勧請かんじょうすることも満足に出来ないと思います」

「理由は例えば神鞭法のような呪殺の手段があることで、密教に対して不信感を抱いているからですか？」

立て板に水を流すようだったマリスの弁舌がまたしても止まり、少女は彫像に戻ってしまった。不用意に触れてはいけない質問だったかと、テイトは焦って背筋を正す。

「ええとですね、答えたくなければ……」

「いいえ。こうして理由をお話ししようとするとすごく子供じみているような気がして、恥ずかしくなっただけです」

部下は決まり悪そうに目を伏せている。テイトはいやいやと手を振ってみせた。

「人間、他人にとっては何でもない事にこだわったりするものですよ」

例示は研究者の基本だ。例えば、と人差し指を立てながら身を乗り出す。

「スヴァルなんかですわねえ、納豆に醤油を入れるのはネリネリしてからでなければいけないと力説するんです。その方が良く粘るとか何とか。醤油が先か、かき混ぜるのが先かなんて、納豆の味には全く影響を及ぼさないと僕は思っんですけれどねえ」

「……はい」

ひどく答えにくそうだったようだが、同意らしきマリスの返事はテイトを満足させた。力を得て、指揮棒のように扇子を振り回す。

「スヴァルは生い立ちのせいかな、知識先行型と言いますか……あれですね、機械を買ったらプラグを差す前に説明書を熟読するタイプです。僕は最初にパワー入れていじり回して、それでよく滅茶苦茶な操作をして怒られるんですが。そうそう、昨日もコーヒーメーカーを触っていたら、カイリさんに取り上げられてしまっ……ええと」

話の行き先を見失い、口ごもる。何の話題だったかとテイトが会話の記憶を探っている間に、あの、とマリスに先を越されてしまった。

「お言葉に甘えてお話をさせていただきますと、わたしが不信感を持っているのは父です。呪殺法を教えようとするのは、わたしを娘でなくただの弟子としてしか考えていないように思えて。その父に付随するものとして、密教まで否定してしまっただんです」

「ああ、その話でしたね。うーん……」

「でも父と密教は別だって、頭では理解しています」

「こういう時、どう言ってやるべきなのか。唸る事で稼いだ時間に語彙を探したテイトだったが、またしても出遅れた。スヴァルならスマートに慰めるのだろうに、やはり自分にはボスの資質がない、とがっかりする。」

「ありがとうございます。神鞭法は不要と伺い、安心致しました。一日も早くお役に立てますよう、努力致します」

仕事の顔だ、とテイトは思った。ワンピースを着ていても、そこにいるのは最早一人の少女でなく軍人だった。敬礼の代わりになりそうな、ちゃんと伸びた背筋。引き締まり、僅かに上向いた顎。

部下が最大限の努力を約束しているというのに、テイトの胸の端には暗雲が居残っている。その理由が突き止められず、テイトは扇子の先で額を搔いた。

「物着星だ」
ものきはし

ニセもん、とりくに一蹴された豆腐製ターキーハムのサラダを渡そうとした指を、スヴァルに掴まれた。掴むというより包むようなソフトさでも、いきなりすることにマリスは反射的に手を引こうとする。

だがそれは、あなたを警戒してますと確言するに等しい仕草だ。瞬時に思いとどまり、スヴァルが早く放してくれるのを待つことにした。

「……ものきはし？」

「ほら」

長い指がマリスのフレンチネイルの爪に浮かんた、白く小さな斑点を示す。

「この星が出来ると、服が手に入ると言われてる。……知らない？」

あなたは大和日本育ちなのに」

マリスはスヴァルがどこで生まれ育つたのか知らなかったが、大和日本ではないらしい。そのスヴァルに大和日本語を教えてもらってるなんて、と情けなくなつた。

まだ手を握られている。そのうえ顔を覗き込むようにスヴァルが身を屈めて来て、マリスはその場で消えてしまいたくなつた。そんないづらさをスヴァルの瑠璃の瞳に完全に見抜かれていそうだ。

俯く事でどうにか視線を逸らす。

「午後はわたしとデートしないか？ あなたにプレゼントをさせて欲しい。物着星のお告げだからね」

あまりに奇想天外な事を言われると、むしろ驚いた反応など出来なくなるものだ。マリスはそれを頭の隅でやけに冷静に実感しつつ、スヴァルを仰いだ。

「あつ、じゃあダブルデートしましょう、カイリさん！」

すかさずリクがカイリに詰め寄っている気配がする。あらじゃあ梶原さんも、と話が大きくなり出したところでマリスは我に返った。「いえ、結構です！」

サラダをスヴァルに押し付けて手を引く。ありがとう、いただきますと冷静になっこりされるとますます身の置き場が無い。

「ねえマリス。リクは優秀なボディガードだけれど、男二人でモ―ルをうつくのは少々味気ないんだよ」

諦めていないようだ。マリスはもう一度、いいえとはっきり発音した。

「スヴァルさんに服を買って頂く理由はありませんから」

「今日は四マイルだ！」

翌朝のP・Tでは案の定、カイリとのデートチャンスを潰されたリクの報復が待っていた。子供じゃないんだから、と思うが口には出来ない。悟られないように、マリスはほんの鼻先だけで溜息を吐く。

「嫌われてしまったようだ、ってスヴァルさん苦笑してたぞ。おまえがあんな風に言うから」

マリスが渋々マシンの設定を変更していると、リクは事のついでのように呟いた。

「嫌ってはいません」

「でも好きじゃねーだろ」

リクの黒い瞳はブラックホールじゃないのか、と思うことがある。視線を逸らすのを許さないような強さがあるのだ。マリスはその強さから逃れることに失敗した。ふん、と馬鹿にしたように笑われてしまう。

マシンに走らされるのではなく、足でベルトを回しているような力強さでリクは走り出す。マリスも黙ってマシンに乗った。

「おまえ半端なやつだよな」

苦味の効いた口調だった。リクは武士のような、荒削りでしつかりした顔立ちをしている。笑えば普通の青年なのに、機嫌が悪い時は頭を押し付けられるような威圧感がある。

マリスは胸が冷える圧迫を恐る恐る押し返して、リクへと顔を向けた。

仏頂面、というのは釈迦の知恵が仏格化した仏頂尊の無愛想な面相に由来するとも言われる。マリスは仏頂尊勝曼荼羅を見た事があったが、今のリクの方が遥かに無愛想だった。

「家が寺だから、仏教徒になった。給食で食わされたから、半端なベジタリアンになった。徴兵されたから軍に入った。好きじゃないのは嫌ってないとか言う」

マシンが急に速くなったように感じた。リクの言葉には質量があつて、聞いた瞬間に体重に加算されたようだった。マリスは足許を流れていくマシンのベルトに視線を落とす。

「おまえの意志は何処なんだ？ おまえは何をしたいんだ。腹の底が見えないやつは嫌いだ、腹が決まって無いやつはイライラするね」

「申し訳ありません」

マリスはやつとそれだけを絞り出す。

「おまえみたいのが軍にいると士気が下がる。徴兵期間が終わつたら、さつさと大学でも寺でも行くんだな」

「申し訳ありません」

アメリカに渡つて三年、馴染みきれずにいるマリスは根から刈られた草のような状態で漂っていた。

大和日本を出たのはアメリカ連邦での母との生活よりも、父と密教から逃げたかっただけだった。自分の半身を失つたような気持ちのまま月日だけが白々しく過ぎてゆき、マリスはそう認めざるを得なかった。

ここにいていいのだ、いるべきなのだと思える土地がなければ、

草は土を探して岩場にしがみつくだけで精一杯だ。成長し、花を咲かせる余裕などない。

テイトから、リクの家系にアメリカ軍日系二世部隊、四四二連隊の兵士がいたと聞いたのを思い出す。ブートキャンプでも習った、アメリカ軍史の暗部の一つだ。

大戦当時、アメリカ国内に移住していた日系二世達は敵国の人種として偏見の目で見られた。アメリカ政府は彼らの熱意に押されて部隊を編成したものの、最初は戦地に送る気が無かったのだという。両親家族を強制収容所に送られ、家や畑を買い叩かれ、それでも彼らはアメリカに忠誠を誓った。

誓うしかなかったのだらうとは、マリスには思えなかった。日系人の地位向上という高い志があったに違いない。だからこそ四四二連隊、第百歩兵大隊は全アメリカ軍部隊の中で、勲章・死傷者の数ともに最高という戦歴を残したのだ。

リクも同じように日系人でありながら、アメリカ連邦軍に志願している。心がすでにアメリカに根ざしている。リクのような愛国主義者にはなれないと分かっている。マリスにはそのひたむきさが羨ましかった。

美味しい肉を食べられないベジタリアンは可哀想だ、信仰を持たない人間は哀れだ、そう嘆く人達をマリスは狭量だと思う。一方で彼らにそう盲信させる程の確固たる地盤を自分も手に出来ればいいのにと、ひどく半端者の気分になるのだ。

マリスは自分が密教修法を再現出来ないのが、父に対する不信感の余波でない事を察していた。父と密教を捨てて来た筈なのに、ドツグタグにはBuddhistの刻印がある。ベジタリアンをやめられない。そういった自分自身の半端さが原因なのだ。

そして恐らく、スヴァルに反感があることも。

昨日の話し合いの最後に、テイトが何か言い足りなさそうにしていたのはこれだったか、と思う。

「If I die in the combat zone,

Box me up and ship me home.

いきなりリクが歩調を取るために歌い出し、マリスは俯いていた顔を慌てて上げた。

「If I die in the combat zone,
Box me up and ship me home.」

「Pin my medals upon my chest.

Tell my Mom I've done my best.

「Pin my medals upon my chest.

Tell my Mom I've done my best.

戦死したら家に送り返して、胸にメダルを着けてくれ。母に自分はベストを尽くしたと伝えてくれ。

自分が送り返されたいhomeは何処なのだろう。ベストを尽くしたとリクから伝えてもらえるだろうか。マリスは握る拳に力を籠めた。

突然のノックに、マリスは筆を落としそうになった。硯に筆を置きながら、はいと答える。ドアから上半身を覗かせたのはスヴァルだった。

「おはよう、マリス。サラダのドレッシングは何にしたいご気分かな?」

言われて気付くと、とつくに朝食の用意にからかねばいけない時間になっていた。慌てて詫びの言葉と共に立ち上がるとする。

「ああ、いいよ。知事の息子もサラダくらい作れないとね。ところで、それは?」

それと聞かれて、マリスはテーブルを眺めた。硯、筆、和紙、そして書きかけの符。

「除難符を謹書しようとしていましたが、失敗しました」

役に立てるよう努力するとタイトに約束した、その第一歩として

マリスが自分に課したのが護符の謹書だった。スヴァルはテイトから話し合いの内容を伝え聞いていなかったらしく、意外そうに一瞬黙った。

「すまない。邪魔をしてしまった」

「いえ、違います。今朝はP・T・が一マイル多くて、筋トレも厳しかったんです」

書きかけの護符を向けて見せる。

「疲労で手が震えて、直線が心電図になってしまいました」

途端、スヴァルは弾けるように笑い出した。マリスは見せるんじゃないかった、と即座に後悔して書き損じを丸める。どうしてこうこの人はいつも、自分を困らせるようなことばかりするのか。今日は朝から散々だ、と頭の中でぼやく。

「違うんだ。あなたが涼やかに心電図とか言い放つのが可笑しくてね」

事実を述べただけなのに、何がそんなに可笑しいのか。マリスが理解出来ずに突っ立っていると、スヴァルは無理矢理笑いを飲み込んだようだった。緩んだ口元を拳で押さえている。

「失礼した。気を悪くしないで欲しい、マリスの言い方がすごく気に入ったんだよ」

本当なのか誤魔化されているのか判別出来ずに、曖昧にはいと返事をする。

「リクは可愛い後輩が出来たから喜んで鍛えてるんだな、きつと」

「はい」

先刻のリクの態度は厳しかった。だがマリスは、あれがリクなりの激励だと考えることにしていた。リクはどうなってもいい人間相手にわざわざ嫌味を言うような、意地悪な性格で無いようだ。だがここでいじけたりしたら、恐らく本当に見放される。マリスはどうかして力を取り戻し、リクに見直してもらいたかった。

「それで？ ドレッシングはジンジャー・ソイがおすすめなんです
が」

そつだ朝食、とマリスは急いで頭を切り替えた。

「いえ、わたしが作ります」

断ってから、嫌われてしまったようだと言っていたと聞かされたのを思い出す。険悪な表現だったろうかと心配になる。

アメリカ連邦陸軍特殊作戦の重要人物にこんなこと頼んでいいんだろうか。マリスは躊躇い一つも聞いてみた。

「ですので、あの……手伝って頂けますか？」

優雅な笑みが返って来た。誰もが王家の血筋と信じるに違いない、自然で与えるような笑顔だ。

「勿論、喜んで」

スヴァルさんはどういう方なんでしょうか。マリスが切り出すと、だらしなく落ちてくる長い前髪を耳に掛けていたテイトの指が止まった。

上官に対する質問としてはあまりに幼稚だったか。マリスは即座に後悔するが、仕事のためでもあるし、と気力を奮う。

「梶原さんとスヴァルさんは作戦前からの知り合いだと伺っていましたので。わたしはスヴァルさんに対して、偏見や誤解を持っているのではと感じたものですから」

昨日呼ばれた時よりも、テイトの部屋からはさらに床スペースが減っていた。壮大な紙のオブジェを作ろうとでもしているかのようだ。製作段階から大いに不評であるようだが。

孤高のアーティストはやんわりと困った笑顔をした。

「あー……実はですねえ、カイリさんが心配していたんです。マリさんのスヴァルに対する第一印象は悪かった筈だ、って」

はいとも答えにくくて伏せがちにしたマリスの目は、テイトのヨシしたシャツに齒磨き粉らしき縦長の染みを発見する。これもカイリの心配事の一つだろうとマリスは容易に推測出来た。

「何やら脅迫めいた事を言っていましたからねえ。そうそう、偽証罪がどうか」

「嘘をついたわたしがいけなかったんです。でもその節は庇って頂き、ありがとうございます」

頭を下げるマリスに、テイトはいえいえと扇子を振る。それから扇子の先を顎に当てた。そこが栗色の無精髭にうつすら覆われているのを見てマリスは、この人は早く結婚するべきだと思う。

「スヴァルがどういう人か、ですか……」

すらすらとした回答を予想していたマリスは、テイトの沈んだような表情に戸惑った。たつぷり一分程も黙り込まれ、質問を撤回しようかとマリスが考え始めた頃に、ようやくテイトは頷いた。

「マリスさんは、疑問に思いませんか？ グアヌの王族、ヒアデス・アルデバランの一卵性双生児ともあるうスヴァルの存在が何故、ヒアデスにも父親にも世間にも知られていないのか。何故そんな都合のいい話があるのか」

母親が極秘裏に養子に出したのだろうか、程度にしか考えていなかった。マリスは答えに窮して、膝を揃え直したりしてみる。

「スヴァルの存在はねえ、ヒアデスを生んだ母親でさえ知らないんですよ」

一卵性双生児であることを母親さえ知らない、そんなことが有り得るのか。

啞然とするが外面上は努めて平静を装って、マリスはテイトの説明を待ち受ける。対するテイトの青眼は、真剣というより憂いているように見えた。

「アメリカ連邦陸軍は病院関係者に、アルデバラン五世の妻から胎児の細胞を盗ませました。スヴァルは代理母から生まれた、ヒアデスのクローンなんです」

アメリカ連邦政府、そして陸軍特殊作戦部隊でもほんの一握りしか知らないプロジェクト・ダブルという機密がある。

ダブルとは映画やドラマ等において、役者の代わりに体の代役を務める者のことだ。プロジェクト・ダブルは画面ではなく、現実世界における影武者を養成する計画なんです、とテイトは説明を始めた。

「影武者と言っても本人の身代わりではなく、本人を乗っ取る影武者ですけれど」

アメリカ連邦政府にとって都合の悪い各界の要人。その子供は親の後を継いで、やはり目障りな人間である可能性が高い。政府はそうした要人の子供の遺伝子を盗み、軍の研究所奥深くで何百人ものクローンを育てている。

「ダブルの一環としてのプレアデス計画なんです。そして軍はいつかスヴァルさんみたいに、本物とすり替える日を狙っているんですか……」

流石にギリシャ彫刻の仮面も青ざめていた。

話した事が政府に知られれば、テイトには軍機漏洩罪により鉄格子の中の一生が待っている。あるいは手っ取り早く、銃弾一発の間で終わりにされる危険もある。

そうわざわざテイトが注意したわけではないが、マリスは十分に察しているようだった。

「民間でクローン技術に成功したのは一九九〇年代の後半です。羊、牛、猿、マウスで可能なら、人間だって勿論可能です。ただ倫理的な問題で、表立ってその領域へ踏み込む科学者がいないだけですね。けれど軍事レベルではそれ以前につく、人間のクローン製造が実用化されていたんです」

要人の子供達のクローンはすり替えが実行に移されるまで、プラ

ントと呼ばれる研究所の教育施設から一步も外に出ることはない。十二歳までは一緒に育てられるが、それ以降はクローン同士の面識は断たれ、個別に各自の本体と同じ知識、同じ仕草を教育される。

「僕は二年前から、アジア系クローン達の宗教関係の教師として雇われているんです。スヴァルには密教の深い知識が要求されますし、すり替えが決まっただけからには特に緊密な講義が必要でした」

硬い表情で目を伏せている部下の視線を追ってみて、テイトは齒磨き粉の染みに気付いた。そこを手で払いながら続ける。

「スヴァルは歳も近くて勉強熱心だし、あの通り僕をいつもリラックさせてくれます。僕はいつしかスヴァルに、講師と生徒以上の友情を感じるようになりました。だから、プレアデス計画が決まった時は嬉しかったですねえ」

「スヴァルさんが、プラントの外で暮らせるようになるからですか？」

「それもありませんが」

クローンは本体が怪我をすれば、同じ傷を付けられる。本体が手術をされれば、同じ手術をされる。

「そして本体が死ねば……同じ事をされます」

マリスが気を保とうとするように、一瞬強く目を瞑った。やはり刺激が強かったようだ。申し訳ないと思っただが、それでも話したのはスヴァルを理解してもらいたかったからだ。

大丈夫です、と小さな申告を聞いてから話を再開する。

「本体がアメリカ政府にとって脅威でない、反抗的でないと判断されれば、当然クローンは不要になります。そうなればクローンは、こういう言い方はしたくありませんが……処分されるのです」

「嬉しかったのはプレアデス計画で、スヴァルさんの生存が確定したからです」

スヴァルはヒアデスになる。遺伝子的に同一とはいえ、他人の名前で、他人の人生を、他人の友人家族と暮らさなければいけない。

それでも、いつ用済みにされるかと死刑囚のような気持ちである

無機質なプラントに閉じ込められているよりは、遥かに人間的だ。人道的でない出生、人道的でない教育、人道的でない人生のために造られた彼らが、人間として生きる道はそれしかない。

「わたしは、スヴァールさんが……アルデバラン家の地位や名譽か、報酬のためにプレアデス計画に乗ったのだと誤解していました」

マリスの手は膝頭を強く握っている。指先の血が止まってしまっているのではないかと、テイトは心配になった。

「そのうえ強圧的な事を言われて、反感を持っていたんです。ですが、どれだけ必死に計画の成功を望んでいるか、それ故の言動だったんだと、やっと分かりました」

マリスはスヴァールへの反発を撤回してくれたようだ。そのマリスが先刻まで腰を下ろしていた椅子をぼんやり眺めて、テイトは頬杖をつく。

『私の存在意義は、ヒアデスに成り代わるまで発生しない』

いつかのスヴァールの言葉が脳裏をよぎった。

スヴァールは賢い人間だ。国家の敵を円滑に排除し、アメリカ連邦の安定と発展を確固たるものにする、とクローン達は洗脳の如く教え込まれている。

けれどスヴァールは表面上でしかその大義名分を認めていなかった。人権と倫理を歪めてまで、政府が国民に対する制御力を強化しようとするプロジェクト・ダブルを疑問視していた。

しかしそれはスヴァール自身の存在をも否定することになる。

スヴァールは生きてがっていた。教育の一部として画面を通して知る外の世界に実際に触れたがり、講師以外の人間と話したかった。

『私がスヴァールでいる限り、私という人間はこの世に存在しない。アメリカ軍の駒、未使用で捨てても誰も痛手を蒙らないどころか、使う事なく処分した方が望ましい一個のクローンに過ぎないんだ』

テイトはそう言うスヴァルを慰めてやれないのが悔しかった。

十日前に初めてプラントから出たスヴァルには、目にする物も手にする物も、全てが新鮮と感動の連続の筈だ。だが感情を表に出すことで過去の生活を怪しまれないよう、スヴァルは実に理性的にそれを押し隠している。

グアヌ入り初日に一言、無限に眩みそうだとスヴァルは眩いた。プラントの白い壁で仕切られた空間、仕切られた人生から突然に開けた世界の広さと可能性に圧倒されたのだろう。そして恐らく、このまま逃げてしまいたいとも思っただろう、とテイトは考える。

だがクローン達は遺伝子操作をされており、定期的に投薬されねば生き長らえない。それはクローンを管理するアメリカ軍の嘘なのか、真実なのか。

本体とのすり替え後に脱走を試みたクローンがいたのか、いたとしたらその後どうなったのか、テイトは知らない。友人として、特殊作戦部隊の隊長として、スヴァルにそれを勧めようとは思わなかった。

スヴァルがヒアデスと替わり、ヒアデスの人生を演じ、アメリカ政府の言うなりにさせられるとしても、テイトはプレアデス計画を成功させたかった。ヒアデスという制約があっても、スヴァルに外の世界を生きて欲しかった。

アルデバラン家に、スヴァルの存在を察知されてはならない。知った瞬間に、彼らは間違いなくスヴァルを呪殺しようとするだろう。悟られないためには、マリスが摩利支天の加護をどれだけ受けられるかにかかっている。

夕食後、マリスからスヴァルとリクへ護符が手渡された。午後いっぱい部屋に籠もっていたのはこの用意のためだったのか、と思いが当たった。

「摩利支天の除難の護符です。お持ちになったら、周囲の間人や災禍の注意を引かなくなります。隠密的行動の際の助けになるかと思えます」

説明するマリスの口調はしつかりしていた。自信があるらしい。護符に勧請することも満足に出来ないと言首をすくめていた昨日からの変わり様はどうだ。テイトはリスクを負ってもプロジェクト・ダブルの話をして良かった、と安堵する。

「マリスは密教の知識があるだけじゃなくて、こんなことも出来るのね。すごいわー」

カイリが心底感嘆した様子で目を丸くしていた。リクは護符を裏表ひっくり返したりして眺めていて、あまり信用していないようだ。それでもマリスに向けられる視線には驚きと感心が窺えた。テイトは自分の事でないのに誇らしくなる。

「梶原さん、この家にも貼っていいですか？ 人目に付き難くなると思いますので」

「それはもう、何千枚でも貼って下さい」

「そんなに貼ったら、逆に目立ちます」

はにかんで笑いながら、マリスは早速に護符を手にしてリビングから出て行った。それを見送るスヴァルは嬉しそうだ。

当然だろう、アルデバラン家の呪いをかわす命綱としてのマリスがようやく始動したのだから、とテイトは込み上げる笑みを押しえられない。

「実はね、テイト。さっきマリスが、やっぱり服を選ぶのに付き合い欲しいと言ってくれたんだ。昨日はつれなく断られたのに、一体どういう心境の変化だろうね？」

こんな風と言う時は、スヴァルは何もかも察していて、確認を取っているだけなのだ。二年の付き合いでそうと知っているテイトはとぼけてみせる。

「さあ、見当も付かないなあ」

「そうかな？ まあそうだった訳で、明日はマリスとデートだ。す

まないが、リクは尾行で護衛してくれるかい」

「勿論です。カイリさんにはダブルデートを断られてしまったし」
リクはぶすーっとムクれている。リクはカイリがお気に入りなのか、とテイトはそこで初めて察した。

「だってあたしが出掛けたら、誰が梶原さんのランチを用意するの？ 自分で作るとなったらロクなもの食べないに違いないわ、この健康管理のなつてない准尉さんは」

腰に手を当てたカイリに、きつぱりと断言されてしまった。部下の恋路をランチ一つで邪魔する訳にはいかない。冷蔵庫から何か見繕って食べますから、と提案してみたが、カイリは金茶色の豊かな髪を振っている。

「いけません、これがあたしの仕事なんです。梶原さんに外出命令をされても従いません。もともと看護師団は軍の命令系統からは外れた独立組織なんですからね」

「はい……」

逆らえずにうなだれる。カイリは奥ゆかしい日本人気質だと思っていたが、職業意識は人一倍のようだ。

「君は士官向きかもしれないと思いましたが、やはり研究者が最適なんだろうな」

スヴァルは上機嫌だ。リクには後でどうにか謝ろうと思いつながら、テイトは首の後ろを掻いた。

「マリス、疲れているようなら午後か、別の日にするが」

朝から何度も細い膝からがくりと力が抜けてしまっている事に、スヴァアルは気付いていた。女性は買い物が好きらしいが、それにしてマリスにモールを歩き回る余力があるようには見えなかった。「いえ、大丈夫です」

「もしかして今日も筋トレが厳しかった上に、四マイル走ったのかな？」

リクに対して口元で微笑んで、視線で咎めてみる。テイトに、尋問する警察官が容疑者を殴る寸前の笑顔と評された顔だ。案の定、リクは後ろめたそうに視線を逸らしている。

「リク。私は明日一日、テイトの講義を受けねばならない。マリスにも同席してもらおう。君はその間にゆっくり反省するといい」

つまり、講義の間はカイリとリク、二人つきり。何度も瞬きした後でそこへ行き着いたらしく、リクはぼかんと顎を落とした。

「さて、出掛けようか。君を撒いてしまわないよう、気を付けないとね」

「撒けるもんなら撒いてみて下さいよ、スヴァアルさん」

にやりとリクが返してきた。作戦終了後、カイリとの接触は断たれる。なのに近付こうとするのは、軽い遊び心というよりリクの純粹さなのだろう、とスヴァアルは思う。カイリに相手にされずに、拗ねてマリスに八つ当たりする子供っぽさも微笑ましかった。

自分はヒアデスにならない限り、恋愛をする身分にない。せめて他人の恋を応援してやるだけだ。リクと挑戦的に指差し合って笑いながら、スヴァアルはそう思った。

見立てて頂きたかっただけですと言い張るマリスをなだめて、明るいオリーブ色のワンピースをプレゼントした。スヴァルがさらにアイスクリームを食べようと提案すると、マリスははつきりと呆れた顔をした。

「strict vegetarianがいいんですか？　こんな、卵も牛乳もたつぷり入ったもの食べたりにして」

「いいんだ。私自身はベジタリアンではないし、どんなに似ていても、これで私が真面目すぎるほど真面目で知られるヒアデス・アルデバランだと思う人はいないだろうからね」

過激なロックバンドのＴシャツに、破れたジーンズ。目元を覆う、透けない反射加工が施されたミラーレンズのサングラス。そして女の子と連れ立ってアイスを頬張っていたら、知事の息子ではないかと疑う者はいないだろう。

普段のスヴァルは上品な無地の服を着るため、マリスにはこの市街偵察用の服装が見慣れないようだ。Ｔシャツの派手な模様をちらちら盗み見ては首を傾げるマリスに気付いて、スヴァルは面白くて仕方無かった。

ふと、アイスをすくうマリスのスプーンが大人しくなった。

「スヴァルさん、申し訳ありませんでした。修法は出来ないと言った嘘をついたり、反抗的な態度を取ったりして」

買った物は口実で、これを言いたかったのか。スヴァルはミラーレンズの向こうで恐縮しているマリスを眺める。陳謝を繰り返されていく内に、テイトがプロジェクト・ダブルを話したのだと思いついた。

「謝ることはない。何にせよ私の動機は正しくないんだからね。私は自分が生きるために、ヒアデスの死を望んでいるんだ」

「それはスヴァルさんのせいじゃありません。クローンを作った政府の……」

「私はクローンじゃない。ドッペルゲンガーなんだ」

ドイツ語のドッペルは英語のダブルに当たり、自分のドッペルゲ

ンガーに会ったら死ぬと言われている。

プロジェクト・ダブルのクローンがプラントから放たれた時、それは本体の死を意味する。そして本体の残りの人生を乗っ取る。ただのドッペルゲンガーよりたちが悪いんだよ、とスヴァアルは笑ってみせたが、マリスは沈痛な面持ちのままだった。

「物着星を知らなかったマリスは、客星は知^{かくせい}っているかな？ 例えば彗星のように、通常は目に見えないのに突然現れる星の事だ」

「スヴァアルさんが博識すぎるんです」

途端に拗ねた顔でアイスを突付き回すマリスが可笑しい。スヴァアルは頬杖をついて、クール・ビューティがすっかり崩れ去っている様子を堪能する。

「客星、御座を犯す。ぼつと出の平民が王座を狙うという意味だ。盗んだ遺伝子で王族になろうとしている私にはびつたりだと思わな
いか」

「冗談にしては自虐的です」

真面目に怒っているようだ。だが急に、アイスを崩すのに忙しかったスプーンが止まった。いいことでも思いついたか、不意に差し向けられた黒目は楽しげな光を含んでいる。

「今日はローマの休日ってことにしませんか。スヴァアル王子は身分を隠して、散歩したりアイスを食べたり」

平和すぎる気がする。とは言え、確かにヒアデスに成り代わってしまえば、呑気に女性の買物に付き合ったりアイスを食べたりすることは出来なくなる。前払いの休日と言えなくもない。

何よりマリスが場を和ませようとしてくれるのが嬉しくて、スヴァアルは話に乗ることにした。

「成る程。それなら、私はringerかとあなたに聞いただけしてみてもいいかな？」

「ringer？」

あの映画を英語で観た事はないのかい、と聞くとマリスはもじもじした。

新聞記者のジョーがスクープのためにアン王女の写真を撮らせようと、同僚のカメラマンを呼び出すシーンがある。到着したカメラマンは、驚きながらこう問うのだ。

『Hey, er, anybody tell you you're a dead ringer for...』

あなたはアン王女のdead ringer、生き写しのようだと言われた事はないか。そう言おうとしたが、アン王女だと認識していない振りをしたいジョーは、カメラマンをテーブルの下で蹴る。一方のアン王女はdead ringerが分からない。そして礼儀正しく、カメラマンの発言を最後まで聞こうとする。

『Tell me, Mr. Radovich, what is a ringer?』

ringerとは何ですか？

『Oh. Er, it's an American term, and it means anybody who has a great deal of charm.』

わたしの国の表現ですよ、ringerとは魅力に溢れた人のことです。ジョーはそう言ってアン王女を誤魔化した。

スヴァルが説明すると、マリスは自分もdead ringerという単語を知らなかったと頬の端を染めた。マリスがスヴァルにringerかと問いただされたら、映画のシーンを汲んで、あなたは魅力的な人ですと答えなければいけなかったことにも気付いたようだ。

崩壊したアイスを一すくい失敬してから、スヴァルは身を乗り出してマリスの耳元に囁く。

「やれやれ、ローマの休日をしているのはマリスの方らしい」

モールの広い通路を、駐車場を目指して歩く。

ブランドショップの袋を抱えて収穫に顔をほころばず女性観光客。片手に風船、片手に母親の手を握る小さな子供。その横でどっさり荷物を抱えさせられている父親。

スヴァルは彼らと自分を隔てているミラーレンズが一生、心から外せない事を知っていた。こちらからは見えても、向こうからは決して覗く事は出来ないのだ。

「王座や知事の椅子など、燃やすまでに解体の手間がかかる分、ただの薪より価値が無い」

すれ違つ手を繋いだ恋人達を見やりながら、スヴァルは呟いた。

「だが私には、その薪より無価値な椅子しか座るものが無い。ああして普通の市民として、顔や身分を偽らずに歩けたらどんなに解放的だろうね」

そのまま数歩進んでから、マリスが黙ってしまったことに気付いた。つい愚痴を零して、困らせてしまったようだ。

詫びようとした矢先、マリスが毅然と顔を上げた。更に肘にマリスの腕が通され、スヴァルは言葉を飲み込んだ。

「三年間やってませんから、成功するか分かりませんが」

すつと息を吸い込んで、マリスは目を瞑る。細い指は胸の前で幾つも印契いんげいを結んだ。最終形は、軽く握つた左の拳の上に指を揃えた右の掌を乗せたものの、摩利支天印だ。

秘法が行なわれようとしているのに気付き、スヴァルは息を詰める。

「オンマリシエイソワカ、オンマリシエイソワカ……」

よくよく聞いてから、スヴァルはそれが摩利支天の真言だと察した。だが、唇の先だけのような鋭い呟きはあまりに速い。スヴァルはテイトの教材として、真言が誦呪されるのを何度も聞いていた。そのどれよりも速い。

何十回と繰り返し返しているようだが、スヴァルには最早それが何回目なのか見当も付かなかった。

「……オンマリシエイソワカ。摩利支天、隠形」

やがて開かれたマリスの目の静謐さに、スヴァルの腹の底から快感に似た身震いが湧き起こる。

先刻まで服の色に悩み、アイスを突付いていた少女はそこに居ない。一瞬にしてマリスの周囲だけが神域に切り取られたように澄んで、一切の邪が打ち払われたようだった。

風も無いのに、マリスの長い髪がふわりと揺れる。天女の姿を取る事の多い摩利支天像とマリスが、スヴァルの目の奥で重なった。見惚れていたスヴァルは、ばたばた騒がしく駆け付けて来る足音に我に返った。尾行して警護している筈のリクだ。愕然として周りを見回している。面前に立っているスヴァルを、リクの慌てた視線は完全に通過している。

「大きな声を出さないで下さい。姿が消えても、声は聞こえてしまいます」

印を結んだままマリスが背伸びをして、スヴァルに耳打ちした。そこでスヴァルはやっと、マリスが摩利支天の隠形法を成功させたのを知る。二人の姿は今、リクにも誰にも見えていないのだ。陽炎が神格された摩利支天の最大の利益、陽炎のように消える隠形の術。「今ならサングラスを外しても、誰も気付きません」

促されて、スヴァルはゆっくりとミラーレンズのサングラスを外す。通りすがりの親子連れに手を振ったり、観光客の進路を妨害したりしてみるが、誰もスヴァルに目を向けない。スヴァルの存在を感知していない。

辺りをおたおたしていたリクが携帯を操作し始める。スヴァルの持つ携帯は圏外を表示していた。リクは電源が入っていないか電波の届かないところに、という案内メッセージを聞かされたらしく、舌打ちしている。

「スヴァルさん、すみません、急に見失ってしまいました。何処にいるか連絡を下さい」

留守電にそう告げて携帯を切ると、リクは焦った様子でまた駆け出して行く。その後姿を見送って、スヴァルは笑いを堪えるのに必

死だった。

「リクには悪いけれど、このまま少し歩いてもいいかな」

「はい。でも印が解けたら術も解けるので、ゆっくり歩いて下さい。それからわたしから離れたらスヴァルさんだけは見えてしまいますので、必ず何処かに触れていて下さい」

マリスとスヴァルは腕を組んだまま、通路を歩き出す。ヒアデスと同じ顔を晒していても、誰も振り返らない。見向きもしない。グア又準州民であろう男性店員の顔を覗き込んでも、一瞥さえされない。

「ありがとう、マリス」

スヴァルの腕がマリスの肩を抱く。

「私は今までヒアデスのクローンとしてしか認識された事がなかったんだ。私自身さえ、そうしていたかもしれない。でも今は……こうしてすれ違う人達と同じ、ただの一市民の気分にいるよ」

精神集中を崩さない程度に小さく、隣のマリスが微笑んでいる。スヴァルの願いを耳にして、封印していた筈の密教修法を復活させてくれたのだ。スヴァルは迷わず身を屈め、マリスの白い頬に唇で感謝を伝えた。

「え……」

動揺した顔が仰ぎ見る。その指が結んでいた印が崩れた。

「予告無く消えたりするな！ 俺は本当に、本当にビビったんだ！ 帰途の車の中、リクは大声でまくし立て続けている。マリスが繰り返した謝罪の回数はまだ二桁に達していた。

「何とかの何とか法が出来るんなら」

「摩利支天の隠形法です」

「その何とかが出来るなら、最初から報告しろ！」

マリスはリク側の肩をすくめている。耳元で怒鳴られ、脳に響い

ているらしい。

「申し訳ありません。でもこの三年間は出来なかったんです」

「私がマリスに頼んだんだよ、リク。驚かせてすまなかった」

すまないと言っている割に、スモークガラスの後部座席にいるスヴァルは上機嫌だった。

「だがそう言う訳だから、君には約束通り一週間、私と同じ完全菜食主義の食事をしてもらおう。マリス、今日の夕食から早速、リクにもベジタリアンフードをお願いするよ」

私がリクを撒く事が出来たら肉を断つ賭けをしたんだよ、とスヴァルが説明した。リクはこの世の終わりみたいな顔をしている。

はいと返事をしながらマリスは、リクに見えないように窓側を向いて笑いをこらえていた。

「スヴァルさん、せめてフライドチキンは許して下さい」

命乞いの必死さで、リクが嘆願する。肉食のリクにとっては断食に等しい刑罰らしい。

「駄目だ」

「じゃあターキーブレストハムだけでも！」

「往生際が悪いな。ああそれから、この腹いせでマリスのP・Tを増やしたりしないように」

呻いてから、リクは分かりましたと絞り出す。その時、話がまとまるのを待っていたかのタイミングでマリスの携帯が着信を知らせた。

「はい。あ、カイリさん。今から戻るところで……」

鋭く振り返ったマリスはもう笑っていなかった。一瞬にして全感覚が起動されたような軍人の顔。

「どうした」

「アルデバラン五世が心臓発作で病院に運ばれたそうです。ホワイト大佐はすぐにヒアデスとスヴァルさんを入れ替えるよう、要請してきたそうです」

リクが黙ってアクセルを踏み込んだ。

宗派の頂点にある事を技術的に証明するため、教祖が奥義を独占する。その奥義は死ぬ間際に後継者へ伝授される。特に呪術という絶対的な実力に宗派の存在意義を頼る裏密において、この死の床における奥義継承が繰り返されて来たのは間違いありません。

アルデバラン五世の急病に伴い、ヒアデスとスヴァルの入れ替えを急がせるホワイト大佐の意図について、テイトが説明を始めた。その横でカイリは、軍事通信衛星経由で次々送られてくる大佐の指示を端末画面に開いていく。

ダイニングに集まった分隊の面々は、一様に緊張に満ちていた。「アルデバラン五世の奥義が何なのかは不明ですが、裏密の性格からすれば当然、呪殺系の修法でしょう。大佐はこれがヒアデスに渡るのを回避したい、その前に早期にスヴァルに入れ替えたいとの意向です」

スヴァル、マリス、リクが買い物から戻るのを待っていた時に、カイリは作戦実行を繰り上げた大佐を揶揄してこう言った。

『大佐つて、裏密の呪術力やマリスの能力に懐疑的な割には、怖がりなんですな』

それを聞いたテイトは、やんわりとこう答えた。

『孫子を知っていますか。中国の兵法書ですが、そこにこう著されています。兵は拙速を尊ぶ。戦はたとえ作戦が多少まずくとも、相手より速く攻撃を仕掛ける事が重要である……』という意味です』

カイリはその対話を思い出しながら、説明を続けるテイトの横顔を仰ぎ見る。この准尉は軍人らしい強力なリーダーシップは持ち合わせていないが、それを補って余りある何かを内包している。

プレアデス計画に協力的でなかったマリスを懐柔し、マリスとスヴァルとの軋轢も解消してしまっただけらしいことに、カイリは気付いていた。

もしそうした能力を見抜いてテイトをブレアデス計画遂行の分隊長に任官したとしたら、ホワイト大佐は相当の慧眼だと言わねばなるまい。

「マリスさんは、裏密の奥義の見当は付きますか」

テイトの声で、カイリは回想から現実に戻された。

「攻撃性の強い修法なら、やはり明王部、特に不動明王の修法かと思われます。例えば火生三昧かしょうさんまいは修験者の荒行、火渡りの修行として知られています。が、靈力の強い者が行なえば、火焰で張った境界内の生き物を骨も残さず焼き尽くすといえます」

一瞬も考え込むような素振りが無い。グア又入りして数日は塞ぎ込んでいたマリスからの変貌ぶり、それを頼りにしているのである。テイトの強い目は、太い結束の誕生をカイリに確信させた。

「政敵呪殺に用いていた、大威徳明王護摩の可能性もあるかと思えます。衛星写真ではアルデバラン五世が一人で修法を執り行っていました。護摩は通常、単独で行なうものではありません。一週間もかけて焚かれる大威徳明王護摩なら、なおさらです」

恐ろしい呪術者について淡々と述べるマリスに、カイリはいつも感心してしまう。相手は強力な火炎放射器にもなり、手も触れずに敵の息の根を止めてしまえる生物兵器にもなる、と言っているようなものなのだ。

職業柄、死の影は患者の上に散々見てきた。だが死の恐怖と同様に、それを進んで与えようとする憎悪に対して無感情ではいられない。何も感じなくなったら、看護師として便利かもしれないが、人間として停止する。

マリスは、軍人は……カイリがそう考えた時、電子音が大佐からの通信受信を知らせた。背筋を伸ばし直して、メッセージを読み上げる。

「アルデバラン五世は小康状態を取り戻し、数日以内に退院の見込み。退院の夜を作戰実行日とする。派兵するデルタフォース一個分隊と合流し、アルデバラン五世とヒアデスの身柄を確保。スヴァルはヒ

「アデスと交替せよ」

アルデバラン五世とヒアデスの身柄を確保。

カイリはそれが、二人を拉致するという意味だと理解していた。彼らの身柄はデルタフォースに渡され、カイリたち梶原分隊は関与しない。だが彼らは抹殺されるのだと明らかに予測出来てしまえば、関与しないとは言っても気分のいいものではない。

父親のアルデバラン五世は心臓発作の予後が悪く、自宅で死亡という筋書きにでもなるのだろう。

息子であるヒアデスの記憶や言動に多少違和感があっても、父親の死で動揺しているからだと周囲は気遣い、違和感の原因を追求したりしないだろう。いずれ彼は空席となった準州知事の再選挙に立候補し、当選し、親アメリカ政府路線の政策を打ち出していくのだろう。

シーツの冷たい部分を求めて、カイリはまた寝返りを打った。夕方の方の作戦会議での緊張がまだ体に居残り、眠らせてくれそうになかった。

アルデバラン家が呪術を行なったのは確かだ。が、その効力は科学的に証明され得ない。裏密の邪悪性についての数々の証言とて、証拠にはならない。これは魔女裁判のようなものだ。

軍令に疑問を抱いてはいけない。この行為が正しいのか、目の前の敵は本当に敵なのかと躊躇すれば、命を落とすのは自分なのだ。勝った者でなければ理由付けは行なえない。故に勝たねばならない。どんなに人類が進化しても、結局は弱肉強食の理論から逃れられずにいる。

「あたしは軍人には、なれそうにないわ……便利な看護師にも」

看護師カイリの溜息は、不意に聞こえた小さな物音に断ち切られた。目覚まし時計のデジタル表示は四時半を告げている。リクとマ

リスが早朝訓練をしに地下へ降りる音か、と気付いた。

少しでも眠らなければ、作戦決行日が近いのに体力を逃がす訳にはいかない。看護師として自分にそう言い聞かせてみるが、最早つかまえるべき眠気の尻尾はどこにも無かった。諦めて身を起こす。

「軍人さんのトレーニング風景でも見学しようかな」

「Mama & Papa were Laying in
bed. Mama rolled over and this
is what's she said.
「Mama & Papa were Laying in
bed. Mama rolled over and thi
sis what's she said」

地下室へ降りる階段の途中から、リクとマリスの歌が聞こえてきた。カイリはその独特の曲調に覚えがあった。軍人がランニングする時に、歩調合せに用いる歌だ。

「Oh, Give me some. Oh, Give me
some
「Oh, Give me some. Oh, Give me
some」

二人の歌は淡々としているが、カイリはその歌詞が実はベッドシーンであると気付いて足を止める。妻が夫に、ちようだいとねだっている場面なのだ。

「P.T.! P.T.! Good for you. Good
for me. Mm good.
「P.T.! P.T.! Good for you. Goo
d for me. Mm good」

しかも、イイと嬌声をあげている。軍人の早朝ランニングにこんな歌が使われていたのか、とカイリは思わず笑い出してしまった。

「カイリさん？ おはようございます。どうしたんですか」

マシンの上で走るリズムを崩さぬまま、マリスが首を伸ばしている。

「おはよう。ちょっと様子を見に來ただけなの。そしたら歌が聞こえたから、つい」

「歌？」

若い軍人二人は走り続けたまま、きよとんと顔を見合わせている。彼らにとってはもうこれは歌でなく、習慣になっているのだろう。

「だって、パパとママがベッドでP・T、フィジカルトレーニングをするって歌詞じゃない？ いかつい兵士達が大声張り上げて大真面目にベッドシーンを歌いながら走るなんて、おつかしいわ」

「もつと卑猥な部分もあるんですよ。カイリさん、先輩にこれはセクハラだって言っちゃって下さい」

ケロリと間接的不平を言っただけのマリスのこめかみに、リクが苦笑しながら軽く拳をぶつけている。当初はマリスに胡散臭そうな目を向けていたのに、いつの間にかリクは随分とマリスと打ち解けているようだ。

「こんなのが恥ずかしいとかセクハラだとか、そんな甘っちょろい感情が残ってちゃ軍にいられないぞ」

「さつさと大学か寺に行行って言っただは先輩です」

「何とかの何とか法が出来るなら、話は別だ」

「摩利支天の隠形です。先輩、長い大和日本語覚える気ありませんよね」

普段は見せない二人の軽い会話は、朝早く見学に來てくれたカイリへのサービスなのかもしれない。だが会話の内容がシビアであることに、本人達は気付いていないようだ。

恥という感情は広い意味で、大和日本人の国民性だ。これは文化人類学者であるルース・ベネディクトが著した「菊と刀」で広く認知されるようになった。よく大和日本は恥の文化で、欧米は罪の文化であると言われる。

しかしリクは、恥ずかしいだのセクハラだのという感情や罪の意識は軍人に不要だと言った。大和日本の文化も欧米の文化も人間性も切り捨てて、軍人に残るのは何だと言うのか。

加えて、摩利支天の隱形術が出来るなら話は別、という台詞は、軍人に残るべきものの一つが技術であると示唆している。カイリは曖昧な笑みを返しながら、自分は軍人にはなれそうにないともう一度噛み締めていた。

「昨日ね、梶原さんに話したの。マリスは軍神ですね、って。ほら、ローマ神話の軍神マルスと名前も似てるし」

「カイリさん、褒めすぎですよ。こいつは僧兵です」

隱形術で尾行を撒かれたのが悔しかったのか、あるいはその罰にベジタリアンフードを食べさせられている恨みなのか、リクが忌々しげに舌打ちしているのが微笑ましい。カイリは、スヴァルに見つからないように肉を差し入れてあげなければ、と心にメモを取る。「ふふ。そしたらね、梶原さんが言うには、マリスは神兵なんです。新しい兵のシンペイじゃなくて、神の兵。摩利支天の加護を受けた神兵だって」

ありがとうございますと答えるマリスの視線は、はにかんだように下向き加減だった。良かった、彼女はまだ軍人になりきっていない、とカイリは思う。

「カイリさん、神の兵は人間とアイスを分け合ってイチャつくものなんですか？」

「イチャついてません、スヴァルさんとは映画の話をしただけです」

「おまえ、服一枚買ってもらっただけでコロツと態度変わったよな」

「反省したんです。洋服とは関係ありません」

マリスは感情をあまり表に出さないし、話し方も冷静だ。だが感情に乏しい訳ではなく、その内側でちゃんと喜怒哀楽している。それは眼を凝らせば、僅かな視線の動きや唇の端に、ちらちらと浮かんで見えるのだ。

今も照れているのだろう、頑なにリクの方を向こうとしない。
物着星は思った以上にデートらしいデートを運んだらしいと踏ん
で、カイリはそっと微笑んだ。

§ 1 (後書き)

* 歌詞は映画「フルメタル・ジャケット」から転用しています

日付が変わる頃に吹き始めた風で、黒い波は落ち着かなげに騒いでいた。

闇に沈んだ高級住宅街の一画、プライベートビーチを有した広大なアルデバラン邸は、空気の流れから取り残されたように密やかだった。

準州知事邸を警備している準州兵は、アメリカ軍司令部の命令で退けられている。邸内の電気系統、警報装置はアメリカ軍に通じているメンテナンス、ドスの手引きで既にデルタフォースが掌握していた。

アイアンレースの見事な裏門の前に、デルタフォース一個分隊の兵士が集結している。ナイトビジョンマウントを搭載したマツトブラックのヘルメット、ブラックのボディーマーは完璧に影と同化していた。

リクがその装備を羨ましそうに眺めている。特殊部隊と歩兵師団では支給される装備が異なるからだろう。

裏門からグリークリバイバル様式の白い邸宅まで、芝生が長く緩やかな弧を描いている。その上を併列縦隊のフォーメーションで兵士達が駆けて行くのを、テイトは待機するバンの中から見ている。

デルタフォースの目的は、準州知事とその息子の確保のみ。彼らが呪術の使い手である事は、恐らく知らされていない。ホワイト大佐が超常力を信用していない以上、デルタフォースにそれを警戒すると伝える筈もない。テイトはその点を懸念していた。

デルタフォースの兵士達の認識は、民間人を二人取り押さえるだけの事である可能性が高い。大使館人質占拠事件等で用いられるべき特殊作戦軍の精鋭が何故、テロリストでも犯罪者でもない政治家一家の身柄確保に駆り出されねばならないのか。そういった心の隙を、悪意はよく嗅ぎつけるものなのだ。

「邸内に突入した模様です」

バンの運転席からカイリが報告してくる。デルタフォースの無線連絡を、梶原分隊の待機するバンにも流してもらっているのだ。

デルタフォースのような特殊作戦分隊は、指令が漏れるのを恐れて作戦展開中は自国や現地の言語を使わない。今回はドイツ語が用いられており、看護師としてドイツ語に馴染みのあるカイリが状況を中継している。

邸内からは何も聞こえない。明かりも点かない。ぬるく湿った風と、遠い波の音が窓の隙間から入り込んでくるだけだ。

「マリスは、スヴァルさんから離れるな」

低く小さなリクの声がした。暗いバンの車内を、声の方へと複数
の視線が集中する。

「了解」

「何とかの何とか法が出来るなら、おまえの役割は俺の後方支援じゃない。スヴァルさんの護衛だ」

「了解」

マリスの返答は落ち着いていた。既に何度も交わされた確認である上に、自信もあるのだろう。

三年ぶりに隠形術を成功させた日から一週間が経っていた。その間に安定して確実に成功出来るよう、マリスが隠形術を繰り返し返したり、阿字あじかん観瞑想したりしていたのをテイトは知っていた。

「リク君、摩利支天の隠形術ですよ。後輩の十八番を覚えてあげて下さい」

それが何とかの何とか法で済まされてしまうのが不憫で、やんわり注意する。

すぐに、くつと吹き出す声があった。こんな笑い方をするのはこの隊に一人だけ、スヴァルだ。

「テイト、リクは覚えてるけれど、わざと言わないんだよ」

「そうなんですか？」

とテイトの内心を代弁したのはマリス。マリスもすっかり引つか

かっていたようだ。

「尾行を撒かれたささやかな当てつけなんじゃないのかい、リク」
「P・T・増やすの禁止されましたからね」

スヴァルの指摘は凶星だったらしく、リクの口調は悔しそうだった。ぴりぴりと緊張していた隊の雰囲気は少しほぐれたものの、イトの心は晴れない。

スヴァルの人間観察眼は、クローンとして養われた技術なのだ。それをスヴァルが自覚して利用しているであろう事が、ますますスヴァルの人間性を奪っていく気がしてならない。

その時、カイリが拳手で一同の発言を制した。突入部隊からの無線連絡が入ったようだ。

「二人の身柄確保に成功したようです」

邸内は、梶原分隊に引き渡す　デルタフォースの連絡を受け、
テイト達はバンを降りた。

中継役のカイリを運転席に残し、アルデバラン邸の裏門を抜ける。細い月の下、黒々と広がる芝生の上を邸宅へと向かった。

安全のためと着込んだ軍支給のボディーマーは、一昔前の防弾プレートを挿入するタイプと違い、ケプラー繊維と呼ばれる軽量素材で出来ている。ケプラー繊維は被弾の衝撃を繊維全体で吸収するため、二、三発を連続して受けると防御能力を失う。だがリクの半分も筋力のないテイトにとっては、軽いというだけで有難い代物であった。

それでも慣れない装備を早く外してしまいたいと願いながら、イトは歩を進めた。

裏門と邸宅との中程に差し掛かると正面玄関の扉が開き、デルタフォースが姿を見せた。

隊員達が構えるサブマシンガンの先は、二つの影に突き付けられ

ている。触れてくる銃口から神経質そうに身を離すのがヒアデス、その後方で肩を落とし足元のおぼつかない者がアルデバラン五世だろつ、とテイトは判断した。

騒音も混乱もなく身柄確保を達成したデルタフォースの働きを労ってやらねばならない。

テイトがそう思つて足を早めた時、突如として鋭く低い声が空気を裂いた。

「臨、兵、鬪、者、皆、陣、烈、在、前、ノウマク サマンドバザラダン センダマカロシヤダ ソワタヤ……」

デルタフォースの隊員達は、誰が何を喋っているのか見当を付けられなかつたらしい。瞬時に緊張を漲らせ、周囲を見回している。

だがテイトにはその声にも、その修法にも、その真言にも聞き覚えがあつた。つい先刻まで、病人そのものな弱々しい姿であつたアルデバラン五世だ。薄暗闇と距離のために確認出来なかつたが、刀印と共に九字を切つたに違いない。

そして続く不動明王の中呪、これは不動金縛り法だ。

テイトの心臓が喉元に跳ね上がる。

恐らくデルタフォースはアルデバラン家が用いる呪術を知らず、また病み上がりと侮つて、アルデバラン五世の拘束を身体の前での手錠に留めたのだ。密教修法における必要条件是真言の誦呪、そして印契。身体の前の手錠では、アルデバラン家の呪術を封じたことにはならない。

不動金縛り法は霊縛法であり、本来は怨霊の動きを止める目的で用いられる。だが生身の人間に対しても効力を持ち、相手の動きの一切を縛り付ける。

アルデバラン五世はデルタフォース一個分隊を不動金縛りにかけ、逃亡を企んでいるのだ。

「……サラバタタギヤテイビヤク サラバボツケイビヤク サラバタ タラタ センダマカロシヤダ」

ようやくデルタフォースが声の主をアルデバラン五世と判断し、

銃口を定めながら黙れと警告を発するのが聞こえた。

しかし、誦呪されているのは既に大呪であることにテイトは気付いていた。すなわちそれは、不動金縛り法が完成に近いことを示している。

止めなさい　そう叫ぼうとしたテイトは、不意に後方から強く腕を引かれた。制止したのはスヴァルだ。スヴァルはテイトの手首を掴むと、掌をマリスの肩に押し付けた。そのマリスはひどく真剣な顔で印を結び、小さく何事かを繰り返している。

「オンマリシエイソワカ、オンマリシエイ……」

一心不乱に呟かれているのは、摩利支天の真言のようだ。マリスが隠形法を試みていることに気付いたが、テイトにはその理由が見当たらない。金縛りをかけようとしているアルデバラン五世と梶原分隊には、広い前庭半分の距離がある。いかにアルデバラン五世の呪力が強くとも、霊縛法がここまで及ぶとは思えなかった。

それよりアルデバラン五世を止めなければ、デルタフォースが危険だ。そう主張しかけたテイトを、マリスの強い視線が黙らせた。テイトはそこでようやく悟る。マリスが隠形法で回避しようとしているのは、不動金縛り法ではない。その次に来ると予想される何かだ。

「センダマカロシヤダ　ソワタヤ　ウン　タラタ　カン　マン
不動明王、緊縛」

テイトの背の遠くで、不動明王金縛り法の完成を告げる声があった。振り返ると、棒立ちのデルタフォースの間を細身の影が一つ、勢い良く走り抜けていく。正門へと向かったその影がヒアデスであることは、スヴァルに瓜二つのシルエットで容易に判断出来た。

逃走するヒアデスを追おうと、リクが動く。危険だ、とテイトは察した。ここからヒアデスを追うには、庭の中央を横切らねばならない。金縛り法の次の一手から逃れるには、走って裏門に後退しても間に合わないと判断したからこそ、マリスは隠形法を唱えているに違いないのだ。

瞬時に同じ判断を下したらしいスヴァルが、リクの腕を掴んだ。そして先程テイトにしたのと同様に、その掌をマリスの肩に触れさせている。そして自らもマリスの肘に手をかける。

もう一つの影はとテイトが首を巡らすと、アルデバラン五世は玄関ポーチに留まっていた。

「不動迦楼羅火焰界」

一週間前に心臓発作で倒れたとは思えぬ力強さで裏密の呪術者が唱えると、その足許から炎が湧いた。それは翼を広げて二羽の鳥の姿となり、弾けるように飛び立つと地表すれすれを一気に滑った。軌跡が炎の筋となって残り、闇夜を紅く焼き染めだす。

不動明王の像容は、背に迦楼羅焰を負っている。迦楼羅とは貪、瞋、痴、すなわち欲、怒り、愚痴の三毒を食らう火の鳥のことであり、不動明王が背負う焰はこの迦楼羅が吐く炎の意匠である。

その迦楼羅は正門を抜けたヒアデスの背後で二手に分かれると、アルデバラン五世を中心とした邸内を瞬時に楯円に切り取った。

迦楼羅の飛跡である炎の円周は、裏門のすぐ内側まで達していた。迦楼羅火焰界に取り込まれ、テイトの背筋を寒気が駆け上がる。アルデバラン五世の結界内に、デルタフォースと共に捕らわれたのだ。

マリスは何と saying っていたか。一週間前の作戦会議で裏密の奥義について訊ねた時、こう saying ってはいなかったか。

「は修験者の荒行、火渡りの修行として知られています。が、霊力の強い者が行なえば、火焰で張った結界内の生き物を骨も残さず焼き尽くすと。」

「……センダマカロシャダ ケン ギヤキギヤキ サラバビキンナン ウン タラタ……」

「……マリシエイソワカ、オンマリシエイソワカ……」

後方では朗々たるアルデバラン五世の誦呪が続いている。やはり

不動迦楼羅火焰界を張っただけで済まず気はないらしい。一方で、マリスマも聞き取れないほどの早口で摩利支天の真言を唱え続けている。

『骨も残さず焼き尽くすと』

あらゆる災厄から陽炎のように身を守るマリスの摩利支天隠形法が間に合わなければ、デルタフォースマもろとも生きてままだ茶毘に伏されることになる。テイトの身震いを感じたのか、スヴァルは空いていた手でテイトの肩を掴んできた。

「大丈夫だ。マリスの誦呪は、神速だからね」

泉摩利守はプレアデス計画において、必要不可欠の存在です。そう力説してホワイト大佐を説得した当人、スヴァルはじつとマリスを見下ろしていた。その横顔は落ち着いている。

渴望していたプラントの外の世界、クローンでなく人間としての身分、人生、命。それらが文字通り灰にされようとしている瞬間だ。というのに、スヴァルは動揺を見せなかった。

『私は未使用で捨てても誰も痛手を蒙らないどころか、使う事なく処分した方が望ましい一個のクローンに過ぎないんだ』

自分の人生にも命にも一切の決定権を許されないクローンは、命を誰かに委ねることに慣れているのかもしれない。テイトは胸を詰まらせる。この男を、そんな底無しの諦観の囚虜にしておくわけにはいかない。

マリスの肘を、そこに軽く添えられたスヴァルの手ごと、テイトは両手で握り締めた。何が起きてても摩利支天の加護、その神兵であるマリスの修法を、スヴァルが受け損ねることのないように。

「テイト……」

緩く微笑んだスヴァルと目が合う。スヴァルの唇が「あ」の形へ開かれた瞬間に、マリスの凜とした声、そして背後から響く低い呪詛がそこに被った。

「……オンマリシエイソワカ、摩利支天隠形」

「……ウン タラタ カンマン、不動明王火生三昧」

轟音が鳴り渡り、テイトの視界は紅蓮に焼き尽くされた。

「……摩利支天隠形」

そうマリスが言い切った直後、目の前が火の色に遮られた。リクは驚愕に飛びすさるうとして、寸でのところで踏み止まる。マリスから手を離すな、とスヴァルに厳命されたばかりだったのだ。それに背けばより恐ろしい災禍が待ち受けているであろう事は、リクの本能が凄まじい警鐘と共に告げている。

それでも逃げ場を探して見回せば闇は炎に追い立てられ、遙か頭上に僅か覗いているだけだった。リク達は狂った大蛇のようにのうちまわる巨大な火柱に、完璧に包囲されていた。

死ぬのだと素直に納得出来る程の圧倒的な業火を前にして、リクは退路の確保を断念せざるを得なかった。

死線を越えようとする者が見るといふ走馬灯の記憶は訪れなかった。回想や絶望や恐怖よりも先に立ったのは驚きだ。人生が終わるのは今で、場所はここで、死に方はこうだったのかと。

戦場において死に瀕した兵士が最も多く遺すとされる言葉、それは『……に愛していると伝えてくれ』。

己の死を看取り伝言を託せる生存兵が傍にいる状況というのは、何と恵まれていることかとリクは思った。梶原分隊は今、全滅しようとしているというのに。

ふとリクは、熱さを感じていないことに気付く。焼却炉に放り込まれたように炎は足許から湧いて出るのに、コンバットユニフォームは燃えていない。

難燃性を誇るノーマックス素材だからかとも考えたが、外気に露出している顔でさえ一切の熱を感じない。リクの頭は再び混乱しだした。

目を上げた熱風に歪む景色の向こうで、テイトの青眼が怯えたように大きく見開かれている。対照的にスヴァルとマリスが平静を保

っているのを発見し、リクは愕然として立ちすくむ。

リクにとつて、無惨な死や戦火から離れた場所に身を置く民間人である筈のスヴァル。彼は彼と同じく沈着冷静でいる新兵からリクへとゆっくり目を転じ、穏やかに微笑した。

核爆弾の爆心地にいる錯覚を起こさせるような烈火以上に、それはあまりに現実離れた光景だった。その気品さえ漂わす唇が動く。「心頭滅却すれば火もまた涼し　とは、こんな境地かな」

リクの理性は思考を止める。苛立つくらいに精神的な脆さを持つ年下の少女が、猛り狂う炎から生身の人間達を守っているらしい事。この事態を楽しむかのように平然と笑顔を見せる王族の男。

それらはリクの人生経験をもつてして、その場で受容できるものでは到底なかった。

炎は誕生と同じ唐突さで消失した。

一気に落ちて来た暗闇に併せて、リクの理性も舞い戻る。

マリスの肩から離れた手で急いでマグライトを点けると、その強力なワイドビームが照らしたのは灰だった。南国の太陽を浴びて青々と茂っていた筈の一面の芝生は、うつすらと細かい灰をかぶった焦土と化している。あの大火は幻影ではないと、モノクロな景色が告げていた。

マグライトの光跡がブレるのは手が震えているせいだと知りたくなくて、リクはせわしなくヘッドの向きを変える。事態を把握しなければならぬのに、懐中電灯に浮かび上がる一片の生命も感じさせない焼け野原が思考回路を寸断する。

航空機に採用されるアルミ合金を削り出した頑丈なマグライトボディを握り締め、リクは自らを奮起させた。

邸宅へと光を投げると、四人いた筈のデルタフォースの姿が見当たらない。呪術によるものらしい火焰を回避しようと、邸内に退却

したのだろう。ただ一人だけ、光の輪の中に玄関前の階段で倒れている人影が認められた。

目を凝らしたリクを、不意に正門の方角から低く抑えた声が呼び止めた。

「梶原隊の者だな？」

リクは咄嗟にH & a m p ; K M P 5サブマシンガンを構える。

だが門柱の影の小さな黄緑色が味方識別用の蓄光式識別マーカードと気付き、リクはほっと息をついて銃口を下ろした。邸宅周囲の見張りについていたデルタフォース隊員が、火に驚いて駆け付けてきたようだ。

リクがそうだと答えると、矢継ぎ早に質問が飛んできた。

「何が起きた？ 無線通信兵からの連絡が途絶えた。他の梶原隊員はどうした？」

緊張して上擦った相手の口調に、リクの胸底が冷えていく。何が起きたかなど、リクにも正確な事は分からない。

だが身柄確保を担当したデルタフォースの姿が見えない理由が退却でないことを、リクは悟ったのだ。

上官であるテイトの見解と指示を求めてリクは振り返った。だがそこには何もなく、闇と焼け野原だけが茫洋と広がっている。テイト、マリス、スヴァルの姿を見失って、リクの額から血の気が引いた。

瞬時にその感覚に覚えがあると気付いたリクは、マリスの何とかの何とか法がまだ効いているのだと思いついた。術者であるマリスから手を離れた自分だけがデルタフォースの隊員に見えている。そしてマリスから手を離れた自分には、三人の姿がもう見えないのだ。

リクの推測を肯定するように、虚空から唐突にテイトが現れた。

正門の影にいるデルタフォースが何やら驚きの言葉を発しているのが聞こえたが、テイトはそれに構わず邸宅へと歩き出し、リクも慌てて後を追う。

「あそこに倒れているのは、恐らくアルデバラン五世です。もしまだ生存していたら、即座に後ろ手に拘束しましょう」

アルデバラン五世は倒れていると見せかけて、殲滅の機会を窺っている可能性がある。安全が確認出来るまでスヴァルの姿を隠匿し続けておかねばならない。

困惑顔ながらも追いついてきたデルタフォース二名と合流し、リク達は慎重に邸宅へと接近した。

「……アルデバラン五世だ。死亡している」

屈み込んでバイタルサインを調べると、何の反応も認められなかった。

「修法の体力的負担による心臓発作か、あるいは贅の結果か……」
テイトが呟いていたが、リクは内心舌打ちしていた。軍人にとって敵が存在しない、あるいは消えるという状態は精神衛生に良くない。死体を冒瀆する趣味のないリクは、仕方なく門柱に一回蹴りを入れて怒りを冷やした。

改めて握り直したマグライトの光が照らし出したのは、事切れたアルデバラン五世の背中を囲む、突入したデルタフォース隊員と同数の小さな灰の山。周辺には原型を留めないほど溶解した金属の塊が転がっている。

リクには、あの火柱が邸宅周辺を包んだのは一分にも満たないという感覚が残っていた。たったそれだけの時間で遺灰にされたデルタフォース分隊を見下ろすリクに、今更ながら恐怖感が押し寄せてくる。

もしマリスが何とかの何とか法を成功させていなかったら、何とかの何とか法が遅れていたら、梶原分隊も足先の炭化物と同じ運命にあったのだ。

門外にいたために生き残った先刻のデルタフォース隊員二名が、邸内を搜索している気配がする。彼らが踏み越えた砂山が仲間の残骸である可能性など、考えてもいないのだろう。

「……カイリさん」

ふと、リクは門外に残してきた自分達の仲間を思い出した。

「カイリさん！」

叫んで裏門へと身を転じる。はっと顔を強張らせたテイトを突き飛ばすようにして駆け出し、焦げ臭ささえ残さない程に燃やし尽くされた庭を走り抜ける。

その中でただ一箇所、芝生の緑が残っていた。炎に包まれた時にリク達が立っていた、そして今もマリスとスヴァルが姿を隠しているであろう場所の四人分の足跡だ。

裏門から転がるようにして走り出たリクは、思わず汚い言葉を吐いた。停めておいた筈の、カイリが待機していた筈のバンが無い。

動き回る光の円は、すぐに道路の端に倒れているカイリの姿を捉えた。

「ヒアデスだと思うわ。後ろから乗り込んできて、引きずり降ろされたの。車に頭を打ち付けられて……ごめんなさい、逃がしちゃったのね」

そこまで言うと、カイリは再び顔をしかめている。幸い後頭部の打撲と軽い擦過傷以外に怪我は見当たらず、すぐに意識を取り戻した。

カイリによると、梶原分隊のバンはヒアデスにカージャックされたようだ。聞いていたテイトが首を振る。

「謝ることはありません、怪我が軽いのが一番です。それにむしろ徒歩での逃亡よりも好都合です、GPSで車両の所在が割り出せますからね。僕は太佐と連絡を取りますから、リク君はカイリさんの手当てをお願いします」

言い置いて、テイトはデルタフォースのバンへと走って行った。車内には作戦上カイリよりも安全確保の優先度が高いスヴァルと、護衛のマリスも既に待機している筈だ。

リクと共にそこへ向かうカイリは女性らしい柔らかかな線に似合わないボディアーマーの上から、何やらごそごそと探っている。

「どっか怪我してるんですか？」

「いえ、違うの……拳銃が無いみたい。ヒアデスに盗られたのか、それが倒れた弾みに落としちゃったのかしら。ドッグタグも無いし」探しに行こうと思ったのか、後ろを振り返るカイリをリクは制止した。

「見つけてもらえますって。ヒアデスに逃げられて、デルタフォースの精鋭四人を焼き殺されたときたら、陸軍の調査班が押しかけてくるに違いないんだ。そいつらが拾って、返してくれまして」

「そうね。こんな装備でうろついているのを、近所の住民に目撃されるわけにもいかないし……。ああもうあたしってば、失態ばかりで嫌になるわ」

作戦はワーストケースを遥かに超える失敗に終わったのだ。緊急出動要請の下つたらしい海軍によって、アルデバラン邸一帯は封鎖された。

ヒアデスは何処に逃げるつもりだろうか　リクはカイリを励ましながら暗い星空を見上げ、いつかの夕食の席で聞いたスヴァルの話を思い出す。牡牛座の赤い一等星、アルデバランは恒星が近接した二重星だと言っていたか。そのうち一つは地獄に堕ちた。

だがもう一つはまだ、燃える憎悪を抱いたまま闇夜に潜んでいる。

準州知事邸は原因不明の出火、騒ぎに驚いたアルデバラン五世は再び心臓発作に見舞われ急死。

陸軍特殊作戦軍の用意したシナリオにグアヌ準州民は疑う気配すら無いまま、王族出身の準州知事喪失の悲しみに沈んでいた。

ヒアデスがカージャックした梶原分隊のバンは郊外で乗り捨てられていた。その後一週間が経過しても、ヒアデスの行方は杳として知れない。

アルデバラン五世の葬儀を契機に、スヴァルとヒアデスの交替は強行された。

公的機関の指紋登録書き換え、邸内の指紋や掌紋の清拭、医療機関の治療記録改ざん、廃棄。万が一ヒアデスが我こそは本物と名乗り出たとしても、証言を裏付ける物的証拠は何一つ残されなかった。報道で見るスヴァルは、口数が少なく堅そうな印象のヒアデスを完璧に演じている。

修復中という名の下に陸軍の極秘検証が続く準州知事邸に代わり、ヒアデスとしてのスヴァルは郊外に建つアルデバラン家の別荘に逗留している。内密の突貫工事を経て、テイト以下梶原分隊の面々も別荘の広い地下室に身を潜めていた。

使用人が帰宅するのを確認してから、分隊は階上へ上がる。

報道、葬儀、弔問客、相続などあらゆる対応とヒアデスを演じる緊張に追われるスヴァルの顔には、回復する間もなく蓄積していく疲労が色濃く刻み込まれている。それでも視線が合った瞬間に安心したように微笑まれると、マリスの心臓はどきりと鳴った。

「もぐらのような生活をさせてしまって、すまない。太陽が恋しいだろう?」

「俺は太陽より、トレーニング・マシンが恋しいですよ。体がなまって腐りそうだ。徒手格闘じゃ、マリスは一分も相手にならねえし

……おまえ、ロー・ブローを恥ずかしがってる場合か？ 男に勝とうと思うならフェイントでいいんだよ、まず急所をこう」

「すみません、次回は必ず」

地下室の面積と優先順位の都合から、リクが愛するマシン類は運び込まれなかった。マリスとしては鬼の早朝訓練から解放されて有難い。

だがその代わりにリクの機嫌は下降の一途で、ストレス発散のとばかりは新兵マリスに容赦なく降りかかっていた。

マリスには、それだけがリクの不機嫌の原因でない事が理解出来た。

死の淵を覗いた混乱、秘密裏に展開される検問や山狩りにもヒアデスが発見されない苛立ち、そして何より上層部への不信感をマリス自身も日が経つごとに痛感している。軍に対して理想の高いリクにとっては、理不尽に加えて失望も甚だしいことは想像に難くなかった。

ヒアデス逃亡とデルタフォース四名の損失を許したのは、ホワイト大佐の超常力への不理解と情報伝達不備に起因している。だが彼はそれをアルデバラン家の分析不可能な兵器による反撃の結果と断じた。マリスの隠形術が梶原隊を守った事実も認められなかった。ヒアデスとしてのスヴァルの護衛は準州兵に一任された。

テイトが抗議を試みていたが、干渉権は無いとばかりに発言を遮断された。大佐と一分隊は象と蟻のような関係だ。噛み付こうとする蟻を潰したところで、象は痛みも痒みも感じはしない。

そうした孤立感と反抗心の中にあつて、スヴァルの存在はマリスを奮い立たせた。日々怒涛の情報量と緊張に晒されるスヴァルは、情報戦略面において梶原分隊の助力が無ければ著しい危機に陥るのだ。

マリスは後方支援に没頭した。それが大和日本を逃げ出した過去を含めた、自分の存在意義を肯定していく作業のように感じながら。

「一息入れましょうか、准尉さん？」

カイリの提案に時計を見やると、既に日付が変わろうとしていた。テイトと額を突き合わせていたマリスは、すっかり首筋が張ってしまっていることに気付く。

「あ、そうですね。いけませんね、熱中しすぎてはいけないと、カイリさんにはいつもアドバイスをもらっているのに」

「ええ、それ以上レンズが厚くなったら、眼鏡の重みで鼻が折れてしまいますからお気をつけて。スヴァルさんはお疲れでしょうし、お休みになつては？」

それぞれに議論の体勢を解いて身体を伸ばしているのに、スヴァルだけは不動明王像の写真に視線を落として考え込んだままだ。カイリに話しかけられてようやく顔を上げ、ふつと目尻を緩ませる。

「ありがとう。だが、あなた達といる時が一番落ち着くんだよ。…それにまさかカイリの紅茶を飲まないまま、私に寝室へ引つ込めとは言わないだろうね？」

大仰に絶望的な顔をしてみせるスヴァルに、カイリが華やいだ笑みを返している。

「良く眠れるように、紅茶にブランデーをたらしてあげます。確か書斎のキャビネットに飾ってあったわ。頂いちゃいませよ」

「あつ、特別待遇だ。ずるいなースヴァルさんだけ。カイリさん、俺も俺も」

はい、と快諾を残したカイリの背中が廊下に消え、空気が一段と緩んだ。テイトは眼鏡を外してこわごわと鼻の付け根を揉んでいる。リクはソファの豪華な生地を意にも介さず、ゴアテックスのごついミリタリー・ブーツを肘掛けにドカンと載せてストレッチを始めた。

一杯の紅茶より余程和む光景を見回したマリスの注意は、スヴァルの疑問形に寄せられた眉の上で止まった。

声にならない声でその唇が呟いたのが『ブランドー？』であるのをマリスが読み取った瞬間、邸内に鼓膜を突くようなブザー音が鳴り響いた。

梶原分隊長、テイトには戦闘の知識も経験もない。代わってリクが非常時の行動計画を立て、マリスに細かに叩き込んでいた。

耳障りな警報音が何であるかを脳が判断すると同時に、マリスはスヴァルの腕を掴んでキッチンに飛び込んだ。アイランド型のキッチンは弾丸を避け身を隠す遮蔽物が多く、外へ通じるドアもある。リクが指示した潜伏場所だ。

ワンピースの下のレッグ・ホルスターからベレッタを抜き、セイフティを外す。

特殊作戦分隊として支給されたのはH & amp; K Mk 23だったが、マリスはそれを携行しなかった。ブート・キャンプの射撃訓練で親しんだベレッタの方が遥かに扱いやすいからだ。

リクも警報と同時にテイトを抱えてソファの後ろへ飛び込んだのを、視界の隅で確認する。マリスは射撃ポジションを取りながら、スヴァルに早口で状況説明する。

「地下室の武器庫のアラームです。何者かが侵入して、触れた可能性が……カイリさんが無事だといんですけど」

やすやすと侵入されるとは、このアルデバラン別宅の警備についている準州兵は何をしていたのか。

近接戦闘では二名のチームを組み、前進や後退には必ず援護射撃を行なう。リクのバディという立場に置かれたら、マリスは隠形術を施す余裕が無くなるのだ。

胸をよぎった焦りをすぐに追いやり、聴覚と指先に神経を集中させた。

地下室へのドアがある暗い廊下の奥から、急いた足音が一つ駆け

て来る。マリスの親指が撃鉄を起こした。

「嫌だわ、何なのかしら、このアラーム」

不機嫌そうなのその声でカイリだと気付き、マリスの腕から一気に緊張が抜けた。銃口を下ろすと、カイリにもソファの裏へ身を隠すように言おうと壁の縁から出て一歩、サイド・ステップを踏んだ。

「出るな、マリス！」

その刹那に何が起こったのか、マリスは分からなかった。リクの雷のような怒鳴り声と、後ろから腕を引く強い力、そして連続した銃声。

状況は把握出来なくても、覚えのありすぎるその発射音がベレッタM93Rの三点バーストである事を、マリスの記憶が自身に教えた。

一回に三発が発射される銃弾でえぐられるビシビシと硬く鈍い音は、マリスが遮蔽にしていた壁の縁から聞こえてきた。この三点バースト機構を持つために、ベレッタM93Rは市販されていない。軍人のみが扱う機関拳銃であり、それはつまり軍関係者がマリス達を襲撃していることを示唆している。

「書斎でブランドーなど、一度たりとも見ていない」

背後からのスヴァルの低い囁き声には悔しさが滲んでいる。ようやくマリスは、自分を遮蔽の裏に引き戻したのがスヴァルだったのだと気付いた。スヴァルには銃撃のタイミングが、そして襲撃者が何者かが分かっているようだった。

急いでスヴァルの言葉を反復するうち、恐ろしい疑惑がマリスの胸を押し潰し始める。

見回すと、ソファの裏から廊下側を窺うリクの顔は蒼白だった。

「何で……」

リクの歪んだ唇から呻き声が漏れる。言葉にならずにいるその続きを、スヴァルが叫んだ。

「どうして裏切るんだ、カイリ！」

在りもしないブランドーを取りに行ったカイリ。不審を抱いた時点で問いただすべきだった、と後悔しても遅い。

幸い、今は一時的に特殊作戦軍に籍を置くとはいえ、カイリは看護師である。射撃訓練を積んでいない。

その威力にそぐわぬコンパクトさが仇ともなって、制御が極めて難しいベレッタM93R。カイリの腕は強すぎる銃身の跳ね返りをコントロール出来ず、射撃の正確性は相当低いようだ。

とはいえ、三点バーストは当たれば同時に三発を食らう事になり、殺傷能力は高い。カイリの攻撃を予期してマリスの腕を引き戻したスヴァルは、間に合って良かったと細い身体を抱え込みながら安堵した。

「ヒアデスにここまでする必要があるの？ 彼はただ、自分達の王国を取り戻したいだけよ。彼自身はまだ何も罪を犯していないわ」
どうして裏切るのかという問いに対して、廊下の奥から訴えるような答えが返ってきた。

「何代にもわたって虐げた拳句に最後通牒もなしに処刑だなんて、ひどすぎるわ。スヴァルさんさえいなければ、ヒアデスにはまだ、アメリカ国家と共存していく道が……」

アルデバラ五世の呪術を有効とするならば、ヒアデスの殺人幫助は確定だ。カイリへの傷害、軍用車の窃盗、拳げればいくらでもあるとスヴァルは考えた。

だがそれを告げてもカイリには届きそうにない。カイリは心奪われたような熱心さ、何処か浮かされたような口調でヒアデスの命乞いを続けている。

「カイリ、あなたは優しく、フェアで人道的な精神の持ち主だ。だからヒアデスへの同情を募らせての行動かもしれないが、今なら我々の胸の内だけで済ませられる。銃を置いてくれないか？」

「スヴァルさん。あなたにだけは、そんな事を言われたくないわ。ヒアデスに成り代わったあなたには！」

会話の隙を突いてソファの裏から廊下を覗んでいたリクが、手のサインで敵は一人だと伝えてきた。

カイリの無謀な反抗にスヴァルは呆れる。頭数、銃の弾数、戦闘の知識と経験でカイリが圧倒的に不利なのは明白だ。奇襲をかけたつもりだったかもしれないが、ブランドー代わりに劇薬を紅茶にたらしめた方が遥かに賢明な選択だった。

恐らくカイリは武器収納庫に警報装置が付いているのを知らず、火力に頼ろうとしたのだろう。同情と怒りがカイリの判断を曇らせたのだろうが、そこまでの感情を抱えているのを一切見抜けなかったのが悔やまれた。

「僕の話なら聞いてくれますか、カイリさん！ 君の言う事も分かります、まずは武器を置いて話しませんか」

部下の突然の裏切りに、リクの後ろで青眼を白黒させていたテイトがやっと話した。ソファの背から亀のように首を伸ばし、廊下の奥を見やっっている。

この場の説得は間違いなくテイトが適役だろうと、スヴァルは素直に口をつぐんだ。

「梶原さんはいい人だけど、スヴァルさんの友達ですもの、同罪だわ」

最早、カイリはカイリだけの論理に凝り固まってしまっているようだった。

スヴァルと同じ結論に達したのか、リクが銃を構えたまま視界確保のためにソファから後退しだした。マリスに援護射撃をさせてカイリに接近し、捕らえるつもりらしい。カイリの気を逸らすためだろう、話し続けると人差し指を回してテイトに合図を送っている。

だが、間に合わなかった。

ブラインドの外に懐中電灯の光の輪が閃いたかと思うと、窓を打ち破って兵士がなだれ込んだ。リビングと、音の方角からすると書

斎。門衛の準州兵が警報を聞きつけたのだ。

カイリは前後を挟み撃ちされた格好になった。追い詰められた者の選択肢は二つに一つ、投降するか、最後の抵抗を試みるかだ。

「くっ！」

スヴァルの、そして恐らくテイト、リク、マリスの期待さえもカイリは裏切った。廊下の暗がり飛び出して来る焦った足音。視界の隅でマリスが青ざめている。その指がトリガーを引く事はないように思えた。

「止まれ！ 止まらないと」

リクの叫びは警告より懇願に聞こえた。

スヴァルは走ってきたカイリが構える銃の照準が、真っ直ぐに自分の胸を指しているのを見る。自らの危険を顧みずに思いを遂げようとする必死な栗色の瞳に、スヴァルは息を呑んだ。命を懸けようとする者の目には修法でなくても相手を縛る力が宿るのだと、妙に冷静に納得する。

パン、と乾いた音がこだます。

拳銃の銃声というものは映画やドラマで聞くより、実際は遙かに空虚なものだ。爆竹や花火とさほど変わらない。あんな音で人の命が一瞬にして吹き飛んでいくなどと、信じたくなくらいに軽い。怒りさえ覚えるほどあつけない。

「何で……」

キツチンカウンターにもたれかかり、それから崩れ落ちたカイリの身体の向こうで、リクは荒い息を吐いていた。その手の中で銃弾を発射したばかりのH & amp; K Mk 23が震えている。

「何であんなんだ、畜生」

準州兵は状況を掴めず、ライフルを手にしたまま忙しく室内を観察している。ベレッタを捨てたマリスが、横たわるカイリにすりつく。茫然自失のテイトはへたり込んだままだ。

音と時間が飛んだような空間に、リクの絶叫だけが響いていた。

「畜生ーっ！」

翌朝、ラムラナ山中にある密教系寺院が襲撃され、僧侶が射殺されているのが発見された。弾が尽きて捨てられていた拳銃は、ヒアデスにカージャックされた際にカイリが紛失したものと判明した。

境内には焚いた後の護摩炉が残されていた。現場写真を見たマリスが半円の形から敬愛炉だと答えた。特定の相手の人望や愛情を得る敬愛護摩に用いられる炉だ。

その脇にカイリのドッグタグが打ち捨てられている一枚を見て、リクが硬直した。

「カイリは裏切ったのではなく、裏切るよう仕向けられたのだ」
証言能力のある一人は射殺され、一人は未だ逃亡中で、推測の域を出ない。だがスヴァルには、それしか合理的な答えを見出す事が出来なかった。

「ヒアデスは準州知事邸から逃亡する際に、カイリの拳銃とドッグタグを強奪した。敵の一員であるカイリを取り込めば仲間割れや、昨夜のような襲撃をさせられると考えたのだろう。そして敬愛の護摩を焚き、カイリにヒアデスへ好意を抱かせるよう仕向けた。カイリの心優しさがそれを決定的にさせてしまった可能性もある」

もしヒアデス逃亡時で既にカイリがヒアデスへ心を寄せていたなら、つまり最初から裏切る気であったのなら、ヒアデスが敬愛の護摩を焚く必要はないのだ。

ダン、と派手に殴られてテーブルが揺れた。リクは続いて自分の短髪をかきむしっている。

「すみません。カイリさんが拳銃とドッグタグを失くした事、俺は知ってました。カイリさんが梶原さんに報告したと思っ込んで…俺のベレッタを貸したんです。それに、ドッグタグ一つでこんな事になるなんて思わなかった」

調伏にしろ敬愛にしろ、名前さえ判明していれば護摩修法は可能

なのだ。ドッグタグを奪われヒアデスに名前が知られたことが分かっていれば、この事態を予想して対処出来たかもしれない。

だが密教や修法に馴染みのないリクが、そこまで気が回らなくても仕方ない事だった。

理解しているのだろう、憔悴甚だしいテイトがゆっくりと首を振る。

「カイリさんはカージャックされた事や直後の隊の忙殺ぶりに気が引けて、紛失を言い出す機会を逸してしまったのかもしれない。これは上官である僕のミスです」

痩せたテイトの掌は、自責に頭を抱えている部下の肩へそつと置かれた。

「ですが、昨夜のリク君の行動は間違っていないかと思っています。君は兵士として立派に責務を果たしたんです」

「俺はこんな事をするために、軍に志願したんじゃないんだ！」

テーブルの上で握り締められたリクの拳からは血の気が引いている。

「俺の行動が間違ってたとしても、正しかったって気にはならない……」

誰も泣けずにいた。泣くには打ちのめされすぎていると、スヴァール自身も思っていた。カイリの死、それも仲間によって手を下される死というヒアデスの反撃は、あまりに手痛かった。

ヒアデスによって襲撃された寺院からは法具や供物、そして車も奪われていた。次は何を仕掛けてくる気なのか。それまでに梶原隊は立ち直れるのか。

スヴァールの目はいつの間にかマリスへ向けられていた。マリスの涼やかな瞳、しっとり俯いた睫毛、とにかく何処かに救いを見出すようにしているのを自覚していた。

だが感情を遮断することでその決壊を防ごうとしているように、マリスの表情は硬いクール・ビューティーに覆われている。今夜も長い夜になりそうだ、とスヴァールは密かに嘆息した。

もう少しここにいて、と言ってマリス達を先に地下室に戻させたまま、リクは帰って来ない。

アルデバラン家別宅の地下室には簡易二段ベッドが二つ設けられていた。マリスの上段を使っていた女性はちょうど二十四時間前に他界した。彼女を手にかけて男性が使っている、地下室の反対側にある二段ベッドの下段。その場所は主を待ちながらひっそりと静まり返っている。

カイリの一件は準州兵の目撃もあり、テイトがありのままをホワイト大佐に報告したらしい。だがテイトの浮かない顔を見れば、裏切りの原因がヒアデスの護摩修法だと信用されなかったのは明白だった。

カイリの名誉は著しく傷つけられた。海軍基地からアメリカ本土へと移送されるカイリの遺体は、殉死兵とは異なった扱いを受ける事になる。

リクを苦しめるものは多すぎる、とマリスは思った。慕情より軍令。論理より悔恨。喪失より強奪。人間より兵士。

ベレッタM93Rを両手でグリップし、スヴァルに向けた時の力イリがマリスの脳裏に蘇る。

応戦する際はあつた筈だったのに、マリスには出来なかった。目の前でいつもと変わらぬ優しい香りを漂わす女性が、軍用銃と敵意を剥きだしに襲いかかって来る。その状況は準州知事邸で火生三昧の業火に囲まれた時とは、まるで比較にならない混乱だった。

訓練されたリクがいなければ、スヴァルは銃撃されていただろう。あるいはマリスがカイリを射殺せざるを得なかったが、それが可能だったかマリスには自信が持てなかった。なのにリクだけが一人で重圧を抱え込むのは、不当のように思えた。

結局マリスはベッドを抜け出して、階上へと向かった。

暗いリビングでリクはソファに埋もれて、カイリが倒れた地点をじっと見つめていた。そこには既に血痕一つ残されていない代わりに、花の一輪すら捧げられていない。

「……星を落としてやったつもりが、落とされちまったな」
振り返りもせずリクが呟いてくる。その声は百パーセント自嘲で出来ていた。

「……スヴァルさんとヒアデスを入れ替えるプレアデス計画の名前は、スヴァルさんの名前がプレアデス星団の和名である昴にちなんでる事から命名されたんだと思うんですが」

マリスの言葉が予想外の反応だったらしく、リクは僅かに顔を動かす。

牡牛座が従える二つの星団、ヒアデスとプレアデス。その名はギリシア神話に由来している。巨神アトラスの子であるヒアデス七姉妹とプレアデス七姉妹は異母姉妹だ。

ヒアデスの遺伝子を使って代理母に産ませたクローンがプレアデスの和名を与えられたのは、この神話に基づいているに違いなかった。

「肉眼で確認出来るプレアデス星団内の星は、大和日本では六つが通説です。でも七つと数える国や伝説が沢山あるんだそうです」

大和日本では数に含まれない七つ目の暗い星。その暗さの理由は、プレアデス七姉妹の一人であるメロペが人間の妻となったのを恥じて隠れたからとも、別の姉妹であるエレクトラが我が子の建設したトロイアの滅亡を嘆いて彗星になったからとも言われる。

「でもメロペにしるエレクトラにしる、目を凝らせばちゃんと他の姉妹の傍で輝いてる筈なんです……」

私達の星は落ちていない、とマリスは伝えたかった。けれど上手く言えずに、リクの動かない背中を見つめたまま立ち尽くす。

ブラインド越しに射し込む外灯だけの薄暗闇で、置時計がかちこち鳴る音が息苦しく繰り返されていた。

マリスは大腿にソファを回り込むと、リクの前のローテーブルにあった一輪挿しを取り上げる。挿されていたのは優しい卵色のデンドロビウム。それを引き抜くとカイリが亡くなった場所に置く。更に、レースのテーブルセンターを掴んでキッチンカウンターに放った。

「何やってんだ、おまえ……」

啞然として見上げるリクの目前で、マリスは勢い良くスニーカーの片脚をローテーブルへ掛けた。

「階段昇降です！」

「はあ？」

「Mama & amp; Papa were Laying in bed. Mama rolled over and this is what's she said.」

ランニングする時の歌を、ローテーブルを使った階段昇降をしながら歌い出す。

「Oh, Give me some. Oh, Give me some」

ぽっかり口を開いていたリクだったが、そこでふつと苦笑した。

「カイリさんが笑ってたな、それ。ごつい兵士が大真面目にベッドシーン歌いながらジョギングなんて、とか言ってる」

「P.T.! P.T.! Good for you. Good for me. Mmm good.」

腿上げがきつい分、この階段昇降はランニングより格段に負担が大きかった。それでもマリスは声を張り上げ、慣れ親しんだ歌詞を歌い続けた。

「よし、マリスが始めたんだからな。後でスヴァルさんに泣きつくなよ！」

弾みをつけてソファから立ち上がったリクが、マリスと並んで階

段昇降を始める。リクの頑丈なミリタリー・ブーツの衝撃で、ロ―
テーブルの継ぎ目が悲鳴を上げた。

「I love working for Uncle Sam!
Let me know just who I am」
「I love working for Uncle Sam!
Let me know just who I am」

アメリカ国家のために喜んで働いている、俺が誰だか教えてくれ。
何と皮肉な歌詞なんだろう、とマリスは思った。個としての存在
など、愛する国の前には掻き消されていくというのか。

選曲を誤ったかと早くも後悔したマリスの思いを打ち消すように、
リクが先に歌う順番をさらった。

「1, 2, 3, 4, Kylie Hanasaki! 1, 2,
3, 4, I love Kylie!」

マリスは面食らった。ここは1, 2, 3, 4, United
States Marine Corps, 1, 2, 3, 4,
I love the Marine Corps.と続くところ
なのだ。それをリクは、カイリの名前に替えて歌っている。

振り仰ぐマリスの視線を感じていただろうが、リクは強い瞳で前
を向き続けていた。

「先輩……」

「My Kylie, your Kylie!」

My Corps, your Corpsと海兵隊を讃える歌
詞は全てカイリへの鎮魂歌になった。マリスはようやく流れ始めて
くれた涙を拭いながらリクに合わせる。

「My Kylie, your Kylie!」

「Our Kylie!」

「Our Kylie!」

気が付くと、リビングの隅にスヴァルとテイトが佇んでいた。前
庭の花壇から切ってきたのか、スヴァルの手にはとりどりの花が溢
れている。半分をテイトに渡して、二人はそれをカイリの亡くなっ

た場所に捧げた。

リクとマリスがリビングのローテーブルで階段昇降をしながら大声で行軍訓練歌を歌い、スヴァルとテイトが黙って見守る。これが悼む事をようやく己に許したマリス達の、カイリの葬式だった。

「……おはよう、マリス」

寝室のある二階から下りて来たスヴァルは片足を浮かせたまま、階段の途中で立ち止まっていた。驚いたように三日月形に上がった肩、そこにかかるコーヒー色の髪はまだしっとり水気を含んでいる。

「おはようございます、すみません、すぐ元通りに」

ヒアデスに襲撃された寺の現場写真を何十枚と広げていたマリスは、朝が来ている事に気付かなかった。明かりで上官と先輩の眠りを妨げてはいけないと思い、地下室ではなくリビングを使っていたのだが、スヴァルの起きる物音でようやく外の明るさを知らされたのだ。

スヴァルがシャワーを浴びている間にと写真をかき集めものの、カイリに手向けた花の山、靴跡の付いたローテーブルなど片付けるものが多すぎた。リクの渾身のステップでグラつくようになってしまったローテーブルの足を検分しているところで、スヴァルに見つかってしまったのだ。

スヴァルはふむ、と難しい顔つきで顎を撫でながら歩いて来た。

「ごめんなさい、ちょっとだけ壊してしまいました……」

ローテーブルを使った階段昇降を始めたのは、他ならぬ自分だ。

マリスは責任をひしひし感じて身を縮める。

「マリス。あなたには価値が分かっているようにだ」

仮にも一時は王としてこの島を治め、長きにわたって準州知事を務めてきた一族の別宅である。調度品がことごとくアンティークか特注品であることは承知していた。

ボディシャンプーの香りがする距離までスヴァルに迫られて、マリスは半歩後ろに下がった。こんな風にびしりと言われるのは、フオートブラッグ陸軍基地で偽証罪がどうのと詰められた時以来だ。

不穩に鳴り出した心臓を手で抑えながら俯く。

「申し訳ありません。あの、弁償しますから……」

「この象牙の如き肌理は、まさに東洋の神秘だ。それをあなたは、徹夜なんぞで曇らせてしまうなんて」

「……………」

テーブルへの賞賛にしては妙な台詞が、マリスの脳内をくるくると空回る。

「……………え？」

「毎日朝から晩まで政治家だか前知事の旧友だか、気難しい老人と顔を突き合せなきゃならない私が、目の保養としてどれだけあなたに頼っているか分かっているのかな？ 徹夜が美容に良くないのは世界の常識なんだろう？」

仰ぎ見たマリスの至近距離で、スヴァルは思いつきり渋面だ。その苦々しさとは対極にある澄んだ、深い藍が絞られたような瞳に覗き込まれていて、マリスの心臓は忙しくまた違う律動を刻み始めた。「カイリに怒られてしまうよ。化けて出てこようんじゃないか……あたしが見張ってないからって、睡眠を削ったりしちゃ駄目ですからね」

茶化すような口真似があまりに見事で、思わず吹き出しそうになった。懸命に平静を装ったものの、うまくごまかせたか自信が持てない。

「お上手ですね、そっくりでした」

言ってしまうってから、失言だったと気付いた。スヴァルにとって演技は職業、それもクローンの存在意義に直結する養成された技能なのだ。マリスの額の辺りがすうっと寒くなる。

「お褒めにあずかり、光栄です」

だがスヴァルは大袈裟に西欧貴族風のお辞儀をしてみせた。詫びの言葉を口にする隙を与えない、素早さと優雅さ。

「さあ、掃除を手伝うよ。使用人達には、テーブルは私が寝ぼけて蹴つまづいたとでも言っておこう。今日は足を引きずって歩いてみるかな」

「でも……」

「だが交換条件がある。あなたは掃除終了後、ただちに睡眠を取る事。最低でも四時間。そして私を安心させなさい。これを私がテイトに頼んで正式な軍令にする前にイエスと答える方が、お互い時間の節約だ。そうだろう、泉二等兵」

やりかねない、いや、この人は本当にやるだろうと確信できた。わざとらしい威圧的な口調も、ノーは受け付けないとの宣言代わりなのだろう。

「了解致しました、お心遣い感謝致します」

「よろしい。ではただちに、当区域におけるクリーン大作戦を開始する」

「ぶっ」

瞬時に咳払いにすり替えようという試みは完全な失敗に終わった。せめて笑いに肩が揺れてしまうのを抑え込む。

「そんな単語も、プラントで習うんですか」

「北風も太陽になれるなら、覚えた甲斐があつたというものだな」

スヴァルはいたく満足気に、高い鼻先で歌いながらテーブルの位置を直し始めた。

「ところで何があなたを徹夜させたのか、報告してもらわないといけないな。そうでなければ私は今夜から、まさかマリスが徹夜してはいまいかと、毎晩ベッドで気を揉みながら徹夜することになる」

「ヒアデスが襲撃した寺の調査報告を見ました」

スヴァルには素直に従うのが一番なのだ。結局彼は思い通りに事を進めるのだから。マリスは資料をファイルに収納する手を休めずに、徹夜越しの懸念を話しだす。

「現場写真に写っているべきなのに、写っていないものがありました。護摩壇です」

「……そういえば、なかつたな。護摩炉だけが残されていた。ヒアデスが持ち去つたとすると？」

答えを求める教師が生徒を指名するように、スヴァルは問いを投げてきた。教師というものは当然、解答を承知している。切花を抱えて悠然と清掃を続けるスヴァルに、マリスは姿勢を正した。

「自分をヒアデス捜索隊に派遣して下さい」

寺の現場写真と紛失物リストを突き合わせ、導き出された答えは調伏護摩だった。

アルデバラン五世の遺族としてヒアデスを演じるスヴァルの姿は連日報道されている。逃亡中のヒアデスがニュースを耳にすれば、アメリカ軍によってヒアデスという人間の偽造が行なわれた事に気付くだろう。知事邸を襲撃したのがアメリカ軍である事は、ヒアデスが奪ったカイリのドッグタグを見れば一目瞭然だからだ。

アルデバラン家の積年にわたる悲願、グアヌの独立とその王座。替え玉が存在する限り、実現可能性は皆無だ。そうなれば操られたカイリが言ったように、まずスヴァルの存在を消すしか活路は無い。そしてヒアデスはスヴァルの名前を知っている。スヴァルが乗っ取って名乗っている、ヒアデス・アルデバランという己の名を。名前さえ判明していれば調伏護摩を仕掛けることが出来るのだ。

この世にヒアデス・アルデバランの名を持つ者は二名。そのどちらに調伏が降りかかるのか。可能性は半々でも、本物のヒアデスには半分の可能性に賭けるだけの必要性に迫られている。

スヴァルが既にそのシナリオに気付いていることを悟ったマリスは、説明を省いて単刀直入に嘆願した。だが返って来たのは、硬い表情での拒否。

「したくない。あなたは私のボディガードだ。究極にして唯一の」「ヒアデスの護摩は強力です。摩利支天の除難符くらいでは防げません。隠形術なら匿えるでしょう。ですがヒアデスが捕らえられるまで片時も離れずに術をかけ続けるのは、実際的にも精神的にも無理な話です」

小さなため息は、スヴァルの不本意ながらの同意を表明していた。「ならば、護摩を焚かせなければいいのです。搜索隊発見時にヒアデスが既に護摩修法を始めていたとしても、搜索隊がまた火生三昧に壊滅させられたとしても、自分なら隠形で焰をかわし、封言術でヒアデスの誦呪を止められます」

「摩利支天封言術か……」

六臂像や八臂像の摩利支天像は針と糸を持っている。こうした庶民的な道具は持物として珍しいが、ここにこそ摩利支天の利益が端的に象徴されているのだ。あらゆるものの目を縫い見えなくする隠形、そして口を縫い言葉を封じる封言である。

密教修法においての必要条件是手指による印契、そして真言の誦呪。どちらかを不可能にすれば、修法もまた完成する事がない。

摩利支天の封言術は一見、不動明王の術のように攻撃的でなく、相手にダメージを与えることもない地味そのものな修法だ。だが敵が密教修法を操る者となれば、その全ての修法をことごとく封じる強力な手段となる。隠形と同様、防御を徹底する事で勝機を見出す、摩利支天の加護の真髄とも言える。

「あなたをまた、あの窮鼠の毒牙が届くところへ差し出せと？ 今度も隠形術が間に合うという保証はないのに？」

「それが自分の任務です。ヒアデスが調伏護摩を仕掛けたら、事態は一刻を争います。この屋敷の地下にいるより搜索隊に加わる方が有効です」

「あなたは、肌が曇るだけでははらする男に、危険へ身を晒す許可を求めるのか？」

梶原隊としての作戦の方向転換を提案していたマリスは面食らう。夜を徹して考え、封言術の手順も記憶から完璧に引き出して、対ヒアデスの合理的な戦法に行き着いたつもりだった。スヴァルにここ

まで難色を示されるとは考えていなかったのだ。

黙っているマリスの前で、スヴァルの唇に無理矢理な笑みが浮かんだ。

「リクは大した男だ。瞬時にその決断を下したのだから……マリス、あなたの案は的確だと思う。すぐにテイトと協議しよう。だがもしマリスをヒアデス捜索に派遣するなら、リクを同行させなければならぬ」

マリスが理由を問う。そこでようやくスヴァルの瞳に、いつもの余裕が射し込んだ。

「数多の歩兵の中からリクを選んだのは、年齢や人種だけが理由じゃない。猪植陸という名前だ。マリス、摩利支天の代表的な像容は女神像だね。何に乗っている？」

「三日月や猪です……あ」

「そう、騎猪像だ」

青が絞られた瞳の余裕はいつの間にか、悪戯な光を含んでいる。マリスは啞然とした。仮にもアメリカ陸軍特殊作戦部隊、それも国家機密プロジェクトを担う分隊員が、縁起担ぎのような理由で選抜されていたのだ。

「リク先輩の近接戦闘能力を高く評価しているからだ、っておっしゃいませんか？」

「勿論。だが、あなたなら分かるだろう？ 尊格の名に過ぎない真言が、誦呪によって修法となる。文字と図形が描かれたに過ぎない紙が、勧請することで護符となる。ならば猪の名を冠した猪植陸と摩利支天にちなんだ泉摩利守が、絆によって星を動かす事だって有り得る」

アルデバランという星を、そしてヒアデス、プレアデスという星団を。スヴァルは彼の運星、運命を左右する星回りの一端を、マリスの掌に託している。マリスはそれを放すまいと強く拳を握った。

「いずれにしろ、マリスの目下最優先の任務は決定済みだ。眠ること、以上」

ようやく片付いたりビングから地下室へとマリスを追い立てながら、スヴァルは明るく宣言する。調伏護摩を焚かれる恐怖など、微塵も感じていないかのような屈託無い笑顔だ。マリスは地下へと降りる階段の上で立ち止まり、その笑顔を振り仰いだ。

「何か異変を感じたら、すぐに」

「容赦なく叩き起こすから、安心して眠りなさい」

「午後からすぐに、封言術を確実にする修行を」

べた、とスヴァルの大きな掌がマリスの口を塞いだ。物理的な封言だ。呆れたように首を振るスヴァルの仕草は芝居がかった。いた。

「さつきはすまなかった。自分の身の不安が理由で、あなたの求める許可に渋ったんじゃないんだ。私なら大丈夫だから、眠るんだ」

スヴァルは、ヒアデス捜索隊へのマリスの参加に迷いを見せた。

隠形術を行える者が離れるのを嫌がったの事だと解釈していたマリスは、その言葉に安心もし、ならば何故と新たな疑問も抱く。だがこれ以上、眠れと繰り返させるのも気が引けて、マリスは素直に頷いた。

「分かりました」

「おやすみ、マリス。静かな、優しい夢を」

その祈りが心からのものである事を教えるような、柔らかなキスがマリスの額に降り立った。

ホワイト大佐と顔を合わせるの、フォートブラッグ陸軍基地での任官辞令以来だった。

海軍の定期運行便を利用してまるで抜き打ちのように現れた大佐は、例の無感情にして冷徹さだけが光る瞳でテイトを見下ろしてくる。

「失態続きのようだな、梶原准尉」

「申し訳ありません。ですが、私の部下達は大いに健闘しております」

ぎろりと向けられた侮蔑の視線を、テイトは静かに見返した。イエスマンばかりに囲まれて、大佐はテイトの答えが気に入らないらしい。その拳は苛立たしげに机をノックしている。

カイリの殉死の名誉を穢された事は、テイトを大佐に反目させるに十分な最終材料だった。プレアデス計画が終了し准尉の任を解かれれば、自分は中央情報局の一員に戻る身だ。そう信じるテイトには、大佐を恐れる理由がなかった。

「猪植上等兵、泉二等兵」

「はい」

「ヒアデスの搜索隊に合流しているようだが、勝手な真似は許さん」大佐視察の報を受けて、リクとマリスは搜索の前線から一時離脱してきている。マリスは二日前の参加時より日焼けしたようだ。外見だけでなく内面で育ちつつある強さを、テイトはその瞳に見ていた。

父親への反抗から大和日本を逃げ出し、ただ根無し草のように流されてグアヌ州まで来た彼女は、ここでようやく何かを悟り始めている。護符勧請、隠形術に続き封言術と、封印していた修法を次々にみずから再現し、ヒアデス搜索隊の参加まで申し出たのだ。

自分の信ずるところと役割を見出し、追いかける。これはマリス

が大和日本で喪失したアイデンティティの再構築作業なのだ。ティトは部下の転機を、分からず屋の上司に邪魔させたくなかった。

「私が」

ティトより素早く、しかしゆったりと口を挟んだのはスヴァル。

「無理に頼み込んだのです、大佐。彼らの意思ではありません」

プレアデス計画を担うクローンとして、スヴァルはティト以下梶原分隊隊員達とは命令を受ける立場が異なる。スヴァルがそれを利用して庇ったことを、大佐は承知しているようだった。渋面が晴れる気配など微塵もない。

「君達が加わったところで、どうなるというんだね。梶原分隊には相応の任務を与えよう」

大佐の手によって黒革のブリーフケースから取り出された分厚い封筒が、不機嫌に机へ叩きつけられた。

「次期グア又準州知事、ヒアデス・アルデバランとしてのスヴァルの配偶者選出だ。喪が明け次第、結婚式を行う。この資料の候補者から、知事夫人に最適な人間を決定しろ」

知事邸の修復状況を視察しに、副官を引き連れた大佐は出て行った。アルデバラン別邸の地下室の空気はようやく緩み、やれやれと肩をすくめる。

「皆さん、すみませんねえ。僕は、大佐の神経を、遠隔操作で随分と逆撫でし続けていたみたいで。本土からわざわざご足労願ってしまつとは」

全員の首は黙って横に振られた。

「大佐はヒアデスの呪術力を完全に軽視している。軽視どころか無視ですね。呑気に、スヴァルの花嫁候補を選べとは」

「……候補はあなた達で、適当に決めるといい。私は選り好みする立場にない」

唐突に席を立って、スヴァルがどこか疲れたような顔を見せる。常に優雅な態度を崩さぬ男だけに、意外な表情は大きな違和感をもたらした。

「そうは言ってもスヴァル、君の生涯の伴侶となる女性だよ？」

「私は上にいる。何かあつたら呼んでくれればいい」

引き留める隙を与えず、スヴァルはするりと地下室から消えた。困惑を残していくような去り方は、実にスヴァルらしくない。テイトは戸惑って頭を掻く。こんな時にカイリがいたら、あの花が咲くような笑みで鮮やかなアドバイスを提示してくれたらうに、と俣びながら。

「梶原さん」

ややあつて、沈黙に耐えかねたように、リクがため息交じりに言い出した。

「スヴァルさんの話を聞きに行つてやった方がいいんじゃないですか？」

「話ですか」

何のと問おうとしたが、リクの凄みのある視線に言葉を飲み込む。リクの強い瞳は明らかに、行けと命令していた。

「はい、行つてきます」

やっぱり自分は上官向きではない、と少々嘆くテイトの足は、大佐来訪に合わせて使用人に暇を取らせ静まり返る階上を目指した。

書斎の窓際にあるソファで、スヴァルはぼんやりと外を眺めていた。窓の外は南洋の陽光に草花が輝いているのに、スヴァルの姿は光の輪から切り離されて沈んでいる。開いていたドアを遠慮がちにノックしても、その背中には振り返ろうとしない。心ここにあらずな小さな手招きをされただけだった。

向かいのソファに腰を下ろし、テイトは友人の言葉を待った。

「……微動だにしなかった。あのクール・ビューティーは」

ふっと苦笑の滲んだ口元が呟く。

「え？」

「私の花嫁候補を選出しろと言われても、マリスは眉一つ動かさなかった」

「あつ……スヴァル、君は」

マリスに恋をしていたのか。そう続けられずに唸る。友人の恋心に気付いていなかったことを詫び、励ますために肩を叩きたい。しかし何とも間の悪いことに、政略的結婚の軍令が下ったばかりなのだ。

「スヴァル、何と言ったらいいか……」

「いいんだ。私が一番良く知っているんだからね。他人の人生をコピするクローンには、自由恋愛をする権利などないということを」自嘲でなく、ただ言い含めようとしているようだった。そんなスヴァルに慰めの言葉さえかけられない自分を忌々しく思う。

「テイト。私は名付け親が誰かも知らないが、きつと物事を見通す力を持っていた人間だったろうと思うんだ。そして私を諫めようとしたんだろう。プレアデス星団の和名、Subaruでなく、同じ音を持つSvarと名付けることによって」

インド神話の太陽神、スーリヤ。その名はスル（Sur）、スヴァル（Svar） 天界、神の光輝 が語源とされる。

古代インドのアーリア人が信仰したバラモン教。その聖典ヴェーダにおいて、男性の太陽神スーリヤには暁の女神ウシャスという妻がいた。暁は太陽より先に訪れる。ウシャスに恋焦がれるスーリヤは毎朝、彼女を追って現れ、陽光を世界にもたらすのだ。

ヒンドゥー教の時代になるとウシャスはサラニユーとして伝えられる。サラニユーは夫であるスーリヤの輝きに耐えられなくなり、自分そっくりの侍女を代理に置いて姿を消す。

「そのサラニユーは仏教の時代に摩利支天となった。Svarを語源とする太陽神スーリヤ、彼の元へ代理の女性を残して去るウシャス、すなわち摩利支天……」

偶然の一致にも程があるよ、とスヴァルは弱々しく微笑んだ。

「クローンであるSvarは、偽物の妻を愛するしかないのだとい

う戒めに違いない。ヒアデスの名を騙っても、私の本質はスヴァルなんだ。こういう結婚が成される事は、予想していた」

そこでようやく、スヴァルの視線がタイトへ転じる。蒼を散りばめた黒い瞳がプレアデス星団のようだ、と思った。星は内包する温度が高いほど、表面は寒色を帯びるのだ。暗い闇空に輝く青い星々。冴え冴えと美しいが、手を伸ばしても決してたどり着けぬ彼方の存在。

「だから大丈夫だ。聞いてくれてありがとう、タイト。……人間のようにならなくて、私は幸せだ。君達と共に在る時だけ、私は人間でいられたんだ」

スヴァルを外の世界に出してやりたかった。

他人の名前で、他人の人生を、他人の友人家族と暮らさなければいけない。それでも、いつ用済みにされるかと死刑囚のような気持ちである無機質なプラントに閉じ込められているよりは、遥かに人間的だ。人道的でない出生、人道的でない教育、人道的でない人生のために造られた彼らが、人間として生きる道はそれしかない。

そう思っていたはずだった。だが今になって、割り切れなくなっていた。

プレアデス計画が終了すれば、スヴァルと梶原分隊との接触は禁じられる。梶原分隊といる間だけ人間でいられたのなら、その後のスヴァルはクローンに戻るのだろうか。アメリカ国家の操り人形として孤独と秘密を抱えたまま、敷かれた軌道をなぞり続けて生きるのだろうか。

「スヴァル、マリスさんに」

打ち明けなくていいのか。そう問おうとした時、地下室からの階段を駆け上がってくる足音がした。

「梶原さん、ヒアデス捜索隊員から連絡が入りました。フムジョン

マンスロー山中でヒアデスらしき人物を発見、包囲したたさうです」

コンバットユニフォームにアーマーを装着し、マリスとリクはすでに戦闘態勢を整えている。すぐに準備して合流しようと、ソファから腰を浮かせた。

だがリクに手で制される。

「同行には及びません。我々はこの瞬間をもちましてアメリカ陸軍特殊作戦軍、および梶原分隊の軍籍から離れ、一個人として現地向かいます」

「認識票を返却致します。我々がこの先どんな行動をしようとも、アメリカ軍とも、梶原さんとも一切無関係です」

何を言われているのか理解できなかった。何度も反復して理解に努める間に、二人分のドッグタグをマリスによって押し付けられてしまう。

「大佐の命令に逆らう責任を、テイトに負わせまいとする配慮か。こんな事をすれば、あなたは軍法会議にかけられるだろう。そこまでして行く必要など全くない、捜索隊に任せるんだ」

珍しく気色ばんだスヴァルが二人に詰め寄るに及んで、ようやくテイトは部下達の真意を知る。テイトが大佐に叱責される場面を目にしたばかりのリクとマリスは、自分達の命令違反の責任を自分達で負おうとしているのだ。

「僕には准尉としての名誉も戦績も、何の価値もない。大佐の意向など気にかけない、君達と共に行く」

踏み出しかけたところで、肩をスヴァルに掴まれる。

「テイト！ 君だって重い懲罰を受ける事になる、大佐の命令に従っておくんだ」

「そうですよ、足手まといなだけなんで、大人しくしてて下さい。

行くぞ、マリス」

「待ちなさい！」

「動くな」

H&K Mk23はアメリカ特殊作戦軍の名称、SOC OMをそのまま愛称に持つ特殊作戦軍用拳銃だ。リクはそれを握ってテイトとスヴァルを足止めし、ドアまで下がった。

「もうこれ以上俺に、仲間に向けて発砲させないで下さいよ？俺はカイリさんの仇を討つんだ、誰の邪魔も許さない。マリス、車を回して来い」

「はい」

「行つてはいけない、マリス」

スヴァルはリクの拳銃を無視してマリスを追おうとする。スヴァルと自分と二人がかりならあるいは、取り押さえられるかもしれない。そう思つてリクへと突進したが、相手は近接戦闘のプロだった。何が起きたかも分からぬうちに、床へと転がされていた。

内臓全体をビリビリと痛みとも痺れともつかぬ不快が走り回り、起き上がることもままならない。スヴァルも殴られたか、腹を抱えて両膝を突いてしまっている。

「リク……」

顔を歪めて咳き込みながら、スヴァルが声を絞り出している。

「ならばマリスを守つて欲しい。私の代わりに。彼女を抱き締め、守つてやれる幸運な男に成り代われるなら、私は喜んでその任務を引き受けるのに」

「残念ながらそんな任務は存在しないですよ、スヴァルさん」

言い放つリクの顔は晴れやかと形容しても良かった。吹っ切れた者の表情だ。

カイリをその手で射殺してしまつてから、濃い影を常に付きまとわせていたリク。それまで軍人である事を誇りにし、軍人としての行動に疑いを持たなかったリクが、カイリの死によつて優先順位を変えたのだ。行動原理を国家や軍に与えられるのではなく、内なる信念に求めて。

大佐の命令に背き、リクは今、慕つた女性を手にかけて贖罪のため、敵討ちのために軍を捨てたのだ。テイトはそれをはつきりと感

じた。

「抱き締めたいなら、そうすりゃいい。軍令なんぞより自分の心に
従って、フムジョンマンズロー山まで奪いに来ればいい」

グアヌ州はレジャーアイランドの印象が強いが、その実まだ七割は常緑広葉樹から成るジャングルである。フムジョンマンズロー山麓はココヤシから油をとるコプラ産業のココヤシ園として栄えたものの、一九八〇年代以降にコプラ産業は急速に衰退、あちこちに荒廃したヤシ園が打ち捨てられる結果となった。

ヒアデスが潜伏していたのはそうしたコプラ加工所の廃屋で、周囲の植生はすでにヤシ園の跡地なのかジャングルなのか判別できないほど入り乱れている。

山道を埋めていた雑草は軍用車になぎ倒され、急ごしらえの車道が出来ていた。それをたどって到着したマリスとリクは、二日間で顔なじみとなったヒアデス搜索隊員の姿を認めて車を飛び出した。

「約三十名で包囲している。生かしたまま捕獲したいようだ、ホワイト大佐の到着と指示を待機中だ」

兵士の報告を聞き、リクがくそつと舌打ちを放つ。

「大佐が来るのか、面倒だな」

「火を焚いた形跡はありましたか？」

問いたいのは、ヒアデスがスヴァルに対する調伏護摩を焚いた様子はあったかという事だ。それを阻止するために搜索隊参加を申し出たのだ。固唾を飲んで答えを待つ。

「潜伏が発覚したのは住民による山火事の通報だが、山火事でなく廃屋での焚き火だったようだ。それがどうやら搜索対象人物らしい。今は火の気配はない」

「畜生、遅かったか！」

思わず目をつぶる。マリスはスヴァルへ無事を確認する連絡を入れたくなった。

「行ってはいけない、マリス」

車を取りに走る背中で聞いた、スヴァルの悲痛な声が脳裏に蘇る。

制止を振り切ってここまで来たからには、間に合いませんでしたと頭を垂れて帰るわけにはいかない。

ヒアデスはラムラナ山の密教寺院を襲った際に強奪した不動明王像を本尊として、調伏護摩を焚いたはずだ。大威徳明王護摩で用いられたアルデバラン家の大威徳明王像は、知事邸襲撃時にアメリカ軍が没収したからだ。

不動明王護摩は一日で祈祷が可能。七日間を費やして焚かれる大威徳明王護摩ほどの威力を持たないが、裏密の継承者ともなれば充分に強力だと予想出来た。

「マリス、護摩の呪いを取り消す事はできないのか？」

リクの問いに首を横に振る。賽は投げられてしまったのだ。

「でも、断ち切る方法が一つだけあります。一刻も早く術者、つまりヒアデスを殺す事です」

「はっ、そいつは俺の望み通りの解決法だな」

ホワイト大佐はヒアデスの生け捕りを計画している。軍籍を離脱し、ヒアデスを亡き者にしようとするマリス達は搜索隊と行動を共にできない。そもそも大佐はマリスとリクがこの現場に来ていることを知れば、激昂して帰れと命令するだろう。

先程の兵士には後方待機すると嘘をつく。ヒアデスとの距離を不用意に縮めない事、接近するなら手か口かどちらかの自由を奪う事を忠告してその場を離れた。

「間一髪でしたね、先輩。大佐のお出ましです」

荒れ果てたヤシ園に繁茂する下草へ身を潜めたところで、軍用ジープが山道を駆け上がった。助手席から降り立ったホワイト大佐を双眼鏡越しに確認、前方視界に入らぬよう後退する。ヒアデスの潜む廃屋を頂点にマリスとリク、大佐の車両で長い二等辺三角形を結ぶ配置となった。

「屋内の潜伏者に告ぐ。武装兵力が包囲している。武器を捨てて直ちに投降せよ。五分以内に投降の意思を示さなければ、武力行使する用意がある。繰り返す……」

軍用車に装備されたスピーカーがホワイト大佐の警告を伝えている。平坦さと感情の無さは、投降の機会を与えろというよりは我々に手間をかけさせるなどの威圧に聞こえた。

リクの構えるサブマシンガン、H & amp; K MP5PDWの銃口が廃屋のドアへと狙いを定める。

極限まで切り詰められた銃身を持つこのサブマシンガンはスーツの下にも携行出来るコンパクトさを買われ、強力な護衛用銃として名高い。しかし近接及び屋内戦闘において威力を発揮する機動性、つまり銃身の短さは精度と引き換えにされている。

コプラ産業盛栄期には事務所として使用されたのであろう廃屋の外板は風雨に晒され、白いペンキが剥落していた。錆びきって赤褐色を垂れ流す蝶番がドア板を放さずにいる事に感心するくらいだ。

そこまで約百五十フィート。故アルデバラン五世が準州知事邸を包囲した不動迦楼羅火焰界の半径より長い。だからといって安全圏である保証は無いうえ、すでにスナイパーが狙撃銃を用いるべき距離だ。梶原隊にとって長距離狙撃は想定外であり、ライフルは配備されていなかった。

精度の低いH & amp; K MP5PDWでヒアデスを確実に射殺するには、捜索隊がヒアデスを身柄確保しに接近する前に行動を起こさねばならない。

摩利支天の隠形術が不可視の暗殺者を生み出す事に、マリスとリクは気付いていた。

陽炎のように姿を消し、人の目からも災厄からも逃れて防御を徹底する摩利支天の利益。術者自身は精神集中と印契を要するため防御一辺倒だが、戦闘能力を有する者と組み隠形に参加させる事で攻撃性を両立し、生きたステルス爆撃機となる。

ヒアデスに警告が突き付けられる間にマリスの印契と誦呪は始ま

っていた。

「一分経過。標的の移動なし」

「武器の有無、確認出来ず」

軍用車搭載の赤外線探知機、そして双眼鏡で廃屋内のヒアデスを監視する兵の報告がすかすかに聞こえる。

武器を捨てよ、という警告はマリスに幾度目かの失望と焦燥を呼んだ。ヒアデスの武器は密教呪術であり、忘却や墮落によって朽ちる事はあれど物理的な廃棄を要求出来るものではない。大佐が密教修法を否定し続ける限り、準州知事邸のデルタフォーエース焼死に類する悲劇は繰り返されるに違いなかった。

「二分経過」

「……オンマリシエイソワカ、摩利支天隠形」

修法の完成によって誰の目にも映らぬ、二人一組の暗殺者が誕生する。

一歩前進した瞬間、目的地である廃屋から火柱が噴出した。

火柱は花火が咲くように展開して空を覆い、火炎の網へ姿を変えた。捜索隊からどよめきが起こる。マリスの腕を掴んでいたリクの左手にも力が籠もった。

「何だあれはっ」

「不動明王の繻索けんさくです」

右手に魔を払う剣、左手に悪を縛る繻索を持つのが不動明王の代表的な像容である。繻索とは元来狩猟用の投網であり、漏れなく衆生を救う不動明王の法力を象徴している。

だが今フムジョンマンズロー山腹に出現した投網は縄でなく炎で編まれていた。その火力は降下する繻索に触れたヤシの梢が一瞬にして砂塵化した事実が雄弁に語っている。

「あんなに広い繻索を具現化出来るなんて……」

「総員退却、一時退避！」

ヒアデスが空へ投じた網は搜索隊大将であるホワイト大佐のジープを明確に狙っていた。大佐の飛び乗ったジープはタイヤを軋らせるとも投網の方が早く、周縁部は一気に地表へ刺さり燃え盛る円蓋を成す。大佐や周辺の搜索隊数名を乗せた軍用車三台が内部へ囚われた。

火炎の包囲網の突破を試みた一台のジープが轟音と爆風を残して破片に、あるいは溶解した金属塊になる。続こうとしていた大佐のジープが激しい急ブレーキを踏んだ。

その間にも円蓋は急速な降下と縮小を怠らず、触れた者は喉の裂けるような断末魔を上げ炭と化す。外周から中心へと成長する灰の輪に追いつかれていく搜索隊の姿は、熱線の鳥籠で逃げ惑う鳥に等しかった。罫索へ向けて内外から銃が連射されるが効果は皆無だ。

「あの網をくくれるな？」

「はい」

隠形ならば罫索に触れても無事に通れるか、そう鋭く訊ねるリクの口調は質問でなく確認に近かった。マリスは先輩の信頼に誇りを温められ、しっかりと請合う。

「大佐を救出する！」

マリスの印契を崩さぬように腕を引き、迷わず走り出すリクの判断に驚いた。軍を捨てたはずのリクが、梶原隊を信用せず冷遇するばかりのホワイト大佐の救出を即断したのだ。

死の円周を絞る罫索を駆け抜けながら、マリスはリクの判断が正しいことを悟る。術を解くためヒアデスを殺害しようと距離を詰める前に、罫索は大佐を灼き尽くしただろう。そして指揮官を失った搜索隊は混乱に陥り、ヒアデスの逃亡可能性を広げてしまう。

軍を捨てても、戦闘のプロフェッショナルという意味でリクは軍人なのだ。

もう部屋ほどの空間も残されていない炎の網の中央、ジープの助手席で大佐は落ちてくる円蓋に向け無益な発砲を繰り返していた。

普段は冷徹な大佐も流石に焦燥と熱気に顔を歪ませている。瞳孔が縮んだようなアイスブルーの瞳は死の淵を見ているのだろう。

リクの手が大佐の腕を掴んでシートから引きずり下ろし、マリスの肩へと乱暴に押し付けてくる。次の瞬間に火の鳥籠は点に達し、数名の搜索隊員と二台の軍用車は動かぬ物質にまで焼き落とされた。

「搜索隊にヒアデス射殺の許可を！」

「おまえは梶原隊の」

鷹を連想させる険しい目が一瞬にして繻索と部下の焼失を確認する。管理職に就いていても数々の死線をくぐった特殊部隊上がりだけあって、大佐は無様な狼狽を見せたりはしなかった。

「なぜ私だけが無事に……」

「犠牲を増やすためにおまえを助けたんじゃないぞ、石頭！」

暴言を放ったリクが大佐の手をマリスから遠ざけ、そこで初めて元上官の双眸が驚愕に染まる。隠形の効果から離れた大佐の眼前でマリスとリクの姿はかき消え、なのに手首を掴まれている感覚とリクの声は継続しているはずだ。

「これが隠形……か」

「そうだ。ついでによく聞け、俺達はもう梶原隊員じゃない。俺達の意思でヒアデスを始末する」

直後、炎が横一線に視界を切り裂く。軍用車の残骸から昇る白煙を蹴散らし、飛跡を導火線に残して突っ切ったのは二羽の火の鳥だった。

「先輩、迦楼羅が」

知事邸襲撃の夜、アルデバラン五世が放った結界の線描者。既に迦楼羅は遙か後方まで山を下り二手に分かれると、退却した搜索隊をも内包する巨大な炎の輪を描いた。

マリスは隠形術を一旦解き、新たな印を素早く結び始める。説明

している時間は一秒たりとも許されなかった。

「大佐、デルタフォースを焼き殺した火の海が来る。マリスの隠形の効力は触れている者だけ。結界内の全隊員を救うため封言を試みる」

説明せずとも真意は通じている、それがマリスの奥底を鳴動させ沸き立たせる。

リクがサブマシンガンを抱えて腰を浮かした。

「俺はヒアデスを仕留めに行く。ヤツが術をかけ終わる前に殺せば

」

「摩利支天の行者がいるな？」

不意に割り込んできたスヴァルの声に、マリスは危うく誦呪を乱しそうになる。違う、と理性で波立つ感情を抑え付けた。声は廃屋の中からで、置き去りにしてきたスヴァルでは有り得ない。

「まさかアメリカ軍にいようとは……」

『行ってはいけない、マリス』

ヒアデスの声は耳の奥でスヴァルの叫びと重なる。別人だ、とマリスは自分に言い聞かせて印契を続行した。

幸いにもスヴァルとヒアデスがそれぞれ声に含む温度は違いすぎた。敵しさも優しさも真摯に与えてくるスヴァル、だがヒアデスは陰湿に侵されている。

「一族の積怨、地獄道で思い知れ！ ナウマク サラバタタギヤー
テイビヤク サラバボツケイビヤク……」

結界を張り終えた二羽の迦楼羅が主を守るように廃屋の周囲を旋回し、朗々としたヒアデスの誦呪が燃える翼の上昇気流に乗って響き渡るようだった。

搜索隊員が放った催涙弾は廃屋に達する前に火の鳥の口先で溶解する。迦楼羅が食らう人間の三毒 欲、怒り、愚痴に比べれば銃器など前菜にもならぬと言いたげなあつけなさ。接近を目論む隊員を威嚇し、あるいは襲撃する迦楼羅にリクもまた足止めを余儀なくされていた。

「全搜索隊員に射殺を許可する！」

ホワイト大佐の指示も、弾丸を阻む迦楼羅の前では何の意味も持たない。空中爆発に終わる手榴弾や散発する銃声、搜索隊員の罵倒と怒号が朽ち果てたヤシ園にこだました。

「センダマカロシヤダ ケン ギヤキギヤキ……」

「オンマリシエイソワカ……」

その喧騒にそぐわぬ静かな次元で、二つの真言誦呪が繰り返されていた。廃屋の内と外、不動明王と摩利支天の真言は完成に向けて先を競う。

ヒアデスが仕掛けようとしているのが、知事邸でデルタフォーを焼殺した火生三昧であるのは容易に想像出来た。ヒアデス逃亡を許し、カイリを使った反撃の糸口を与えた猛火の修法。マリスは倒れたカイリを抱き起こした際に血糊に濡れた、その手で結ぶ印契に一層の念を籠める。

プロジェクト・ダブル、プレアデス計画、アメリカ陸軍、父との確執、マリスはそうだった枷から自由になる。スヴァルにも梶原隊にもヒアデスの魔手を触れさせない、そのためには持てる全てを供出する。

マリスの髪が風とは違うものに舞い乱れた。

「マリシエイソワカ、摩利支天封言」

持物である針と糸であらゆる者の目と口を縫う摩利支天、その加護を受けた神兵の封言術が完成した。

「サラバビキンナ」

唐突にヒアデスの誦呪が途絶える。不気味な誦呪よりも一層不気味な静寂が場を支配した。

一拍の後に廃屋のドアが内側から蹴り倒され、ヒアデスが走り出した。汚れた衣服に憤怒の形相、その唇は叫びたくとも叫べぬもどかしさでいびつに歪んでいる。迦楼羅に駆逐された搜索隊員が落としたライフルを拾い一直線に駆けて来る。

マリスは銃口に捕捉されているのを自覚しながらも、印契を結ぶ

指を緩めない。

マリスの心を満たすのは襲い来る殺戮者ではなかった。同じコーヒ―色の髪と顔を持つ、けれども理知的な気品を漂わせる青年。

『尊格の名に過ぎない真言が誦呪によつて修法となる。ならば猪の名を冠した猪植陸と摩利支天にちなんだ泉摩利守が、絆によつて星を動かす事だつて有り得る』

スヴァルは彼の運星、運命を左右する星回りの一端をマリスの掌に託した。マリスは印契を解けば零れ落ちてしまふ運星を決して離すつもりはなかった。

唇だけで宣誓のように呟く。

「生きて下さい」

陸軍から支給されたボディアーマー、その素材であるケプラーは繊維全体で銃弾の衝撃を緩和する。一昔前の防弾プレート挿入型より軽量だが、二、三発の被弾で防弾性能を失う。

印契を掠めた銃弾に右胸を叩かれたマリスが上体を折るのが見えた。

「マリス！ くそっ」

リクは右手に構えたH&K MP5PDWサブマシンガンをヒアデスへと連射する。潜伏していた廃屋から突如飛び出したヒアデスは激怒していた。封言術で呪術攻撃力を奪われ、捨て身でマリスの殺害を企んだのだろう。術者を殺せば術が解ける、同じ理由でヒアデスを倒そうとするリクには瞬時に理解出来た。

「射殺しろ！」

ホワイト大佐が自らも発砲しながら叫んでいる。しかし二羽の迦楼羅が集中砲火の標的たるヒアデスの両脇を固め、主の負傷を許さない。僅かな隙間を縫ってヒアデスの腿に一発が沈んだが、怒りに痛覚さえ消し去られたのかヒアデスの突進は止まらず、手にあるライフルは二発目を放った。

マリスが仰向けに倒れ、遂に指の印が解ける。

「死ね、摩利支天の使い走りめ！」

声と共に腿の痛みも取り戻したか、ヒアデスは転倒気味に膝を突く。それでもライフルの先は執拗にマリスへと差し向けられた。

リクの戦闘本能は標的が足を止めた一瞬を逃さなかった。ヒアデスを護衛する迦楼羅にサブマシンガンを投じ、その一方で左手はホルスターからH&K Mk23を抜く。アメリカ特殊作戦軍SOCOMの別名を持つ特殊部隊の愛挺、そして看護師カイリの命を絶った拳銃だ。

迦楼羅がサブマシンガンに食らいつきヒアデスから身を離す僅か

な瞬間を、リクは鮮烈なコマ送りとして眺めていた。瞳孔は銃口からヒアデスのこめかみまで一直線の弾道を見出す。

カイリの最期のメッセージは『ヒアデスを殺すな』 ヒアデスの意識操作下にあったにしろ、心優しいカイリの胸底には確かにその思いが潜んでいたに違いない。だからこそ術に嵌まった。

だがリクにとってカイリを殺した拳銃は、ヒアデスの血によって洗い流す事ではしか癒されない。他の選択肢を受容するつもりはなかった。戦場では迷った者が真つ先に死ぬ、カイリが命をもって実証させられた真理にリクは従う。

有機体として植物にも生命が存在するならば、ベジタリアンと言えど人間は所詮、命を刈り取って生き長らえる原罪から逃れられない。魂の生存という戦場で、リクは己の信念のために原罪を一つ重ねる。

軍人として急速に成長し、常人離れた集中力と法力で仲間の窮地を救ってきた後輩、マリス。そのボディアーマーは既に二発を受け限界に達している。そこへライフルの照準を定めるヒアデスのこめかみ一点に向け、リクはトリガーを絞った。

「許せカイリ……」

銃砲や弓矢を扱う者ならば、手応えというものの不思議さを体感する筈だ。撃ち出された瞬間に弾丸や矢は手元を離れて独立するのだから、それらが目標物へ到達したかどうか理論上は感知出来ない。だが目標物によって跳ね返された衝撃波を研ぎ澄まされた肌はレーダーのように受信する。飛行を阻んだ物質の密度さえ手に取るように。

リクの中で、カイリの肉を裂いた弾丸の感触がヒアデスの手応えで上塗りされていく。

どんな炎より紅く染まったヒアデスの指は被弾の驚きによってか最期の執念か、ライフルの引き金を引いた。

その銃声がフムジョンマンスロー山に響き渡ると、雁が撃ち落とされるように二羽の迦楼羅は主の骸へと墜落する。だがヒアデスを火

葬にする威力もなく、風に吹かれて消えた。

「マリス、しつかりしろ！ ……ん？」

ヒアデス・アルデバランの死を見届けるのも早々に後輩の元へと駆け戻る。被弾の衝撃で倒れたマリスへ屈み込んでいたのは、隣にいたはずのホワイト大佐でも捜索隊員でもなかった。

「そうは言ってもね、マリス。ボディアーマーとユニフォームを脱いでくれなきゃ、傷を確認しようがないじゃないか」

「どうしてあなたが、嫌です！ げほっ」

「ほら咳き込んでいるし、肋骨や肺に損傷を負っていたらどうする？ 強情もいい加減にするんだ」

マリスと手の攻防を繰り返している長身の青年の横へ、リクは呆れたため息をつきつつ腰を落とした。

「スヴァルサーン、ここはコンバットゾーンです。神聖な戦場で俺の後輩にセクハラすんのはやめて下さい」

「おやおや。勝手に軍を離脱した君達に、先輩後輩なんて上下関係は消滅したと認識していたが」

ヒアデスの三発目はマリスを捉えていなかったが、ライフル弾二発を受けたケプラーのボディアーマーは潰れている。リクは小さく安堵の息を吐いた。間一髪でマリスを救った銃身をそつと撫で、H & amp; K Mk 23をホルスターに収める。

「第一、フムジョンマンスロー山まで奪いに来いと焚き付けたのはリク、他ならぬ君だろう」

あてつけながらもスヴァルは王族の笑顔だ。アルデバラン別宅を出発する際には殴りつけてきた相手だが、口では勝てないのを重々承知なリクは、降参の印に両手を軽く挙げた。

「私がノココと戦闘地域に入るのは、軍法会議覚悟で臨んだ君達の意味を無駄にする行為だと思ってね。テイトと麓で通信を傍受し

ていたんだが、女性兵士負傷と聞いてつい……マリスが大事に至らなくて、摩利支天に感謝しなければ。ああ、勿論リクにも」

取ってつけたような謝辞に含まれる故意は聞き逃さない。

「俺に殴られた事、軽く恨んでませんか？」

スヴァルは眉をひそめ、心外を露わにする。

「まさか。たつぷりと恨んでいるよ」

リクはがくり、と迷彩パンツの膝の間に頭を垂れた。

「グア又準州民に同情しちまうな。スヴァルさんが知事になるなんて」

おかげさまで、と泰然と微笑むスヴァルにリクもつられて笑う。

そこへ急いた足音が走り寄って来て、見れば通信兵を伴ったテイトが手を振っていた。

「海軍に救急ヘリの出動を要請しましたよ！ マリスさん、もう少しの辛抱です」

スヴァル及び梶原隊員は、再び生きて集結した。リクは南国の抜けるような青空を見上げ、そこへカイリの笑顔を重ねた。

自分で歩けると主張するマリスを無視し、スヴァルが衛生班の担架を呼び付ける。膝を突いて外傷を調べていた衛生兵の指先がふとマリスの戦闘服の袖をつまんだ。徽章が無いのを見咎めたようだ。

陸軍特殊部隊の要請で出動した海軍衛生科としては、素性の知れぬ民間人を迂闊に海軍病院へ搬送するわけにいかない。

「衛生兵、向こうの射殺体を検死しろ。……どうした」

ヘリ内へヒアデスの検死を命じたホワイト大佐が衛生兵の警戒を目ざとく嗅ぎつける。混乱に紛れてマリスを治療させたかったリクは舌打ちして草を蹴った。

「徽章とドッグタグを確認出来ません」

「私の部下です」

テイトの主張に大佐の冴えたアイスブルーの瞳がマリスを、そしてリクを射抜く。無表情の裏で、俺達はもう梶原隊員じゃない、俺達の意味でヒアデスを殺すと迫ったリクの言葉を吟味しているのは明らかだった。

「No.」

案の定、薄い唇から出た否定にリクは拳を握る。

「私のボディガードだ」

すかさず申し出たスヴァルの人相を衛生兵はそこで初めて認知したようだった。

「あ、あなたは……アルデバラン氏？ 彼女はS・P・ですか？」

「No.」

困惑して問う衛生兵に答えたのはまたしても大佐だった。抗議するつもりだろう、スヴァルが険しい顔つきで口を開く。

それを制したホワイト大佐の手が短髪からギャリソンキャップを浮かせた。布地に矢尻を象った特殊作戦軍、及び鷲が翼を広げた大佐を示すメタル階級章が光る。

キャップは担架上のマリスの胸へ捧げられた。

「私の命の恩人だ。直ちに治療を与える」

「Yes, Sir!」

弾かれるようにして衛生兵が担架を持ち上げる。同時に大佐のミリタリーブーツの踵が打ち鳴らされた。

「果敢なるアメリカ陸軍兵に敬礼！」

背筋を伸ばした大佐が号令をかける。周囲にいたヒアデス搜索隊員も、ヘリで担架を待ち受ける衛生兵も、テイトも、スヴァルも指先まできっちり揃えた敬礼で胸を張りマリスの担架を見送った。

リクは熱くぼやける視界を強い瞬きで叱咤した。

スヴァルの指がスイッチを入れると、白々とした蛍光灯が無人の地下室を照らし出した。かつて突貫工事で拡張されたアルデバラン家別宅の地下室。日光は届かず壁の断熱材はむき出し、二段ベッドはブーツ・キャンプ並みに質素。スチールの本棚と机には書類やファイルが積み上がり、娯楽の要素はどこにもない。

主達の不在に滞留した空気を、スヴァルの長い溜息が僅かに攪拌する。

フムジョンマンズロー山におけるヒアデス決戦から丸一日が経過していた。マリスは肋骨骨折との診断を受け、さらに血胸などの疑いを除くため海軍病院に検査入院している。テイトとリクはホワイト大佐による聴取で海軍基地内に拘束されたまま戻らない。

無機的な部屋の息詰まる圧迫感は、スヴァルにプラント時代を回顧させる。プラントと似たこの地下に潜っているのが相応の任務だと厳命した大佐に背き、飛び出して行ったマリスとリクを思う。

「おめでとう。あなた達は魂のいるべき場所を見定めた」

当初の梶原隊員達はそれぞれが己の立場に迷いを抱いていた。それ故にテイトは統率を欠き、マリスは修法を行えず、カイリは落命し、リクは罪にさいなまれた。だが最終決戦を前にして彼らの瞳が放った何者にも折られる事を許さぬ強い光は、スヴァルには神聖なまでに映った。

自分は出遅れている、とスヴァルは思う。梶原隊員達は己の行動規範を手に入れ暗闇を抜けた。だがアメリカ軍によって偽造されたスヴァルは、グアヌ州知事ヒアデス・アルデバランとしての規範を遵守するしか生きる術を許されない。飛び出す自由は無い。

「私の魂までもがクローンでないならば」

果敢なるアメリカ陸軍兵に敬礼、大佐はそう称賛したが現実は無情。マリスとリクは自己判断で軍籍離脱したうえにアメリカ軍の

装備を無断使用、戦闘地域に侵入して殺人を犯したことになる。通常ならば実刑は免れない。梶原隊は解散、二度とスヴァールと対面する事無くアメリカ本土に強制送還される可能性は高かった。

「あなた達の魂のそばにいさせて欲しい。そこにしか行き場所が無いからではなく」

スヴァールの声は彼らが確かに呼吸をしていた地下室に低く響く。

君達と共に在る時だけ、私は人間でいられたんだ。

テイトにはそう言った。だが彼らがドツペルゲンガーであるスヴァールの存在を、スヴァールという人格の存在を認知する世界で一握りの人間であるから、最早それが理由ではなかった。

「そこにいたいからだ。ただ友として」

「一切のお咎めは無し。引き換えに一切の戦績も叙勲も無しです」
深夜になってテイトだけがアルデバラン家別宅へ戻り、疲労と安堵の混在した力無い笑顔を見せた。

「国家機密に関わるだけに、梶原隊は公式には存在が秘匿されてますからねえ。本件はたった一枚の薄っぺらい報告書になって、機密ファイルの中へ葬られるでしょう」

軍が多大な人的損害を蒙った点を除けばプレアデス計画は、今も世界の何処かで同時進行している数多のクローン差し替えの一つに過ぎない。公式に存在しない一計画における公式に存在しない一部隊による公式に存在しない一事件は公式に裁く必要は無いというのがホワイト大佐の、及びアメリカ連邦軍の見解らしかった。

「刑罰は免れたものの、マリスさんとリクは大佐に訓戒を頂戴している所です。特にリクは大佐に石頭と暴言を吐いたとか？ ネチネチといびられているようで……功労者だというのに可哀想に。今後の転属希望は聞き入れてもらえるようですが」

「リクは軍役を選んだのか。それがいいと思っていた。逆説的だが、

信条と衝突するからこそ、彼にとって軍は信条を貫くに最もふさわしい場だろうからね」

経験を積み軍人として熟練すれば事態を未然に見抜き、カイリのような被害者を出さずに済む。自分のように悩む軍人を増やさずに済む。起きてしまった戦いを止める強大な力は持たずとも、現場で無益な死と失望の連鎖を断つのに自分は役立つ。だから前線に赴いて実戦を重ね、いずれ正式に特殊部隊に挑戦するというのがリクの結論だった。

テイトを通じてその決意を聞いたスヴァルは敬意と羨望をもって深く頷く。

「彼はもう軍の駒じゃない。軍が彼の手段なんだ」

「ですよねえ」

誇らしげに胸を張るテイトも遠からず、准尉任官前の役職である中央情報局アジア宗教分析官に戻るのだろう。そして彼が愛する、難解な文字や仏像を相手に研究室で紙と本に埋没する生活へ帰って行くのだろう。

「君達が罰せられなくて何よりだ。テイト、君にも再会出来ずに終わってしまうかと心配していたんだ」

別離の時は迫っている。プラント時代からの友人の和やかな青い目を忘れまいと心に刻みながら、スヴァルはテイトと固い握手を交わした。

「おっとこんな時間ですか。スヴァルに会うために戻って来たんじゃないのに」

唐突にテイトが慌てだす。あっさりと放されてしまった手を眺め、スヴァルは大仰に嘆いてみせる。

「テイト、今の君の言葉は私を少なからず傷つけたよ」

「それはすみませんねえ。大佐が本土に戻る前に是が非でも了承を取りたい件がありましたねえ……ああこれですこれ」

雑然と積み上げられた書類の山の配置をテイトは把握しているようだった。躊躇わずに山腹から抜き取られた一枚がスヴァルを硬直

させる。

「君の配偶者候補の推薦報告書です。適当に決めていいんですけどね」
テイトとの握手が切れるように、スヴァルというドツペルゲンガ
ーは梶原隊の手を離れてひとり立ちせねばならない。孤独と秘密を
抱えたまま生涯、ヒアデスを演じ続けなければならぬ。

スヴァルはその第一段階を突き付けられているように思った。魂
はそばにいと誓っても、押し寄せる現実という波の冷酷さはスヴ
アルの心を凍らせる。

「……私は選り好みする立場にない」

ようやくそれだけを絞り出すスヴァルの前でテイトが紙面に書き
込んだ名は、*Maris Izumi*。

有り得ない。不可能に決まっている。大佐が了承する筈がない、
という言葉は反射のようにすなりと口を突いて出た。だが報告書
にサインを添えるテイトは異議など耳に入れる気はないようで、さ
つさと書類をフォルダに挟んでいる。

「マリスさんの転属希望はグア又準州の州兵だそうです」

「……州兵？」

州兵は災害時の救援活動や治安維持のほか連邦軍の予備兵力とさ
れており、基本的に下位の別組織である。アメリカ連邦政府によっ
て州兵が連邦軍に編入される事はあっても、連邦軍から州兵に下る
のは一般的ではない。

「グア又準州兵と言えば主要な任務に知事邸の警護がありますね。
スヴァルの国家機密的政略結婚を知りながら一途な話ではありません
んか」

「そんな筈は……無いよ、テイト。配偶者選出の話聞いてもマリ
スは眉一つ動かさなかった、私はこの目で見ていたんだ」

「君の優れた観察眼もマリスさん相手には曇ることもあるんだねえ」

フォルダを小脇に階上へ向かうテイトを追うが、腕を掴んで引き止めるという選択肢を実行出来ない。

「僕はカイリさんの言葉を思い出しまして。スヴァルが何とか星のお告げだとか言ってマリスさんをデートに誘った時、カイリさんが笑ってたんですよ。マリスは驚きすぎて反応出来ずにいたわ、って」

あなたにプレゼントをさせて欲しい。物着星のお告げだからね。

そう申し込んだ場面をスヴァルは急いで回想する。マリスは眉一つ動かさずに見上げていて、ややあつて結構ですと断った。あの無反応は拒否の前振りではなく驚愕だったのだろうか、だが、とスヴァルの内心で希望と理性がせめぎ合う。

「だがプレアデス計画の作戦終了後は我々の連絡、面会は一切禁止される事になっている。マリスのグア又準州兵転属を大佐が許可するとは思えない」

「だからこそ、マリスさんに命と計画成功を救われたと大佐がしみじみ実感している今の内にねじ込む機会があるんです。変だなあ、こういう悪巧みは君の得意分野じゃなかったかな、スヴァル」

ガレージの車に乗り込み、イグニッションを回しながらテイトが挑んだ下手なウイंकにスヴァルは返す言葉を奪われる。

「僕にとつてのプレアデス計画は、スヴァルを物理的にプラントから自由にする事じゃないんです」

ガレージのシャッターが上がっていく。コンクリートと金属で出来た狭い空間は、南国の夜風が吹き渡り星の瞬く空へ繋がる。

「君を諦観の虜囚にしておかない事なんですよ」

プラントで、プレアデス計画遂行上で、テイトは数々の仏像写真を教材にした。そのどれより慈愛に満ちた眼差しにスヴァルは打たれる。

「ありがとう……だがテイト、君も知っているだろう。クローンは遺伝子異常が発生しやすく短命となる傾向にある。それにもし大佐が了承しても、マリスは親友にさえ明かせない秘密の真っ只中で生

きる事になる。そんな思いをさせたくないんだ」

「じゃあスヴァル、君がマリスさんの親友になればいい事です。僕にとつて君がそうであるように」

ヘッドライトが点き、行く手に白く光り輝く道を作る。スヴァルにはそれが梶原隊が照らす花道のように思えた。

「配偶者選出の命令が出た際、君は神話になぞらえましたねえ。S varを語源とする太陽神スーリヤと、妻である暁の女神ウシヤス、イコール摩利支天。代理の女性を残して去る摩利支天は、配偶者を選出して本土へ帰って行くマリスさんと同じだと。あの神話には続きがあるのを知らないとは言わせません」

バラモン教の時代から牛は聖なる動物とされている。ウシヤスはスーリヤの元を去り、牛となって下界に紛れ暮らしていた。スーリヤは後に牛となってウシヤスに再会する。

「スーリヤが化身となったのは牡牛。アルデバランは牡牛座の一等星。アルデバランの名になる事で、君とマリスさんはこれまた神話を地で行くことになるんですね。いやはや、夢のある話ではありませんか。うーん、二人の結婚式でスピーチ出来ないのが実に惜しいですよ」

気が早すぎる友にスヴァルは笑う。

「……ならば、私も行こう。プラント育ちとて、プロポーズの仕方くらいは知っているからね」

助手席側へ回り、光の道への同行を決めた。

「やれやれ、口下手なテイトに言いくるめられる日が来るとは思わなかった」

グアヌ準州知事、ヒアデス・アルデバランの服喪が明けた。

心臓を患っていた前知事アルデバラン五世が、知事邸出火の夜に急逝してから一年が経つ。焦土と化した前庭には今や芝生の青が敷き詰まり、グリークリバイバル様式の邸宅にはすでに一刷けの煤も残されてはいない。白亜の知事邸は高くなりつつある南洋の太陽の下、毅然として空を支えている。

昨日催された追悼法要の疲れはヒアデスの背を丸めさせ、自室への足取りを緩慢にさせていた。

「冷たい物をお持ちでしょうか？」

振り返れば、小柄で浅黒い肌をした現地チャバロ人女性の使用人が緊張の面持ちで返答を待ち受けている。

「いえ、結構。昼食まで少し休みます」

かしこまりましたの後半を、閉まるドアでやんわり切断した。そこへそばだてられた耳は、使用人同士の密やかな噂話を拾う。

「真面目すぎてとっつきにくいつたら。お勤めして一年経つけど、まだ慣れなくて」

「いいじゃないか、陰気さが不遇な王族の末裔らしくて。あれでも知事になられて少しは社交的になったさ」

「親アメリカ政治じゃ、本土に笑顔を振りまくのも仕事だろうしねえ。おかげでグアヌじゃ空前の景気ときた」

「いずれにしろ、グアヌ州民にとっちゃありがたいお方だよ。さ、掃除だ掃除だ。ホールをすっかりきれいにしまわないと」

掃除用具のぶつかり合う音が始めて、ヒアデスはそつとドアから後退した。バスルームへ向かいながらネクタイを緩め、襟元を楽にする。洗面台に手を突き鏡の中の青年を見上げれば、会心の笑みが出迎えた。

「いかがかな、ヒアデス・アルデバラン。スヴァルが演じるあ

あなたは？」

父を悼む神妙さ、持ち越した疲労、愛想のなさに俯く先程までのヒアデスはもういない。藍を絞った瞳に冴え冴えとした光を湛え、背筋をびんと伸ばして、硬かった口角に穏やかな微笑を載せる。

アメリカ連邦政府にとって都合の悪い各界の要人。政府はそうした要人の子供の遺伝子を盗み、軍の研究所奥深くで何百人ものクローンを育成している。時機が来れば本物とクローンをすり替え、親アメリカ路線へ誘導する。プロジェクト・ダブル。

スヴァルはプロジェクト・ダブルのクローンとして成功を収めている、と自負していた。

アメリカ連邦政府にとってグア又準州は最早、独立運動の火種ではない。環太平洋地域のハワイ州に次ぐ軍事拠点として急成長している。アルデバラン知事は州民と政府間の利害調和において公約以上の成果を実現、高い支持率を維持していた。

同時に、自分以外の準州政府の政治家の人気と権力を巧みに分散させた。また反アメリカ派を少数ながら残した。そうなればアメリカ連邦政府はスヴァルを切れなくなる。

プロジェクト・ダブルの最終段階は、クローンすり替えによる親アメリカ路線定着に留まらない。いずれクローンもろとも証拠隠滅し、計画の存在及び介入を完全に隠蔽する事だとスヴァルは読んでいた。故にスヴァルなしにはグア又準州の平穏が有り得ないという状態こそ、スヴァルの命綱となる。

用心すべきは政敵でなく、スヴァルというクローンを生産したアメリカ連邦そのものだ。強大な相手であれど、魂の友人達が命懸けで通してくれた生の道を、不注意につけ込まれ封鎖されるわけにはいかなかった。

「持ちこたえてみせるよ。究極のボディガード……マリス、あなたがいないくても」

ほぼ一年前。

グア又準州海軍病院の一室は梶原隊聴取のため、陸軍特殊作戦軍の調査団とホワイト大佐によって占拠されていた。テイトの先導で到着したスヴァールは、ホワイト大佐が提出された配偶者推薦書に目を通す隙を与えなかった。

その場を私事に借用する事を詫び、次いでマリスの前で膝を突く。聴取を受けていたマリスは、まるで被告人席のように環視に晒された質素なパイプ椅子の前で直立不動を保持していた。スヴァールの急な来訪も、推薦書へ注がれる大佐のアイズブルーの瞳が一層希薄になったのも、マリスの頭の中は理由を求めて暴れているに違いなかった。

それでも冷静を装っているクール・ビューティーの手。捧げ持てば頬の奥にうつすら朱が咲くのを、スヴァールは満足に浸りながら仰ぎ見る。

「あなたがいなければわたしは、あなたの前にひざまずくこの男が誰なのか……考えずにおかせただろう。そう、パンドラの箱のように」

ヒアデスとして生きねばならない、選り好みする立場にない。そう自らを欺きスヴァールというクローンの死を受け入れねば、スヴァールとしてもヒアデスとしても生きるに耐えられないと思っていた。「だが今は言える。あなたを愛するこの男は、ヒアデスでもスヴァールでもない……一個の自由意志で、それこそがわたしだと。だから答えて欲しい。アメリカ連邦の軍人としてでなく、あなたとしての答えを」

星のようだ、とスヴァールは思った。マリスの瞳は微動だにせず頭上から見詰め返している。

「結婚して頂けませんか？」

「……………」

音を吸う宇宙のごとき無言が続いた。

一時は打ちのめされ、恐れたその静寂は今や脅威ではない。心優しさ故に落命した女性が、親友だと誓ってくれた男を通じて、あれは彼女の驚愕の振舞いだと教授したから。

やがて漆黒の星は、肉眼では捉えられない揺らめきに瞬き始めた。細い指が遠慮がちに温かさを増して握り返す。珊瑚色の唇から零れる消え入りそうに微かな息は、それでいて迷いのない返事を成す。

「はい。喜んで……」

「梶原准尉、この推薦書を却下する」

しかし地雷よりも唐突な宣言が、一瞬にして部屋の空気を凍結した。

「最初に注意した通り、プレアデス計画終了後の関係者同士の接触は一切禁止だ。ミスター・アルデバラン、答えを聞けば満足だろう。知事邸へお戻り願おう。今後、配偶者の決定は特殊作戦軍本部で行う」

「ありがとう、マリス」

仮にもアメリカ連邦陸軍特殊作戦軍の中枢を担うホワイト大佐に、スヴァルは一瞥もくれなかった。大佐の事務的な通達を完全に黙殺し、マリスへと微笑む。たちまちマリスの下瞼には痛みが湧き出し、抱えきれなくなったまつ毛の間から転がり落ちてきた。

こうなることは予想していた。ねじ込むチャンスはあるとテイトは希望を繋いでいたが、スヴァルは結婚どころか、マリスのグアヌ準州兵転属さえ却下されるだろうと分かっていた。

ただマリスの答えを聞きたかった。

「ですが、大佐」

焦燥に声を上ずらせるテイトが、突き返されようとしている推薦書と大佐の顔を交互に見比べている。

「接触の禁止理由が機密漏洩防止ならば逆に、配偶者が関係者なのは不利ではな

「無駄だ。仮にそうであったとしても、私は禁を解く権限を持たない。警護兵に連行されたくなければ退室願おう、ミスター・アルデ

「バランス。ここは一般人の立ち入る場所ではない」

「テイトが返却されるのを拒否した推薦書は、大佐の指で幾枚にも引き裂かれていく。まるでそれがスヴァールとマリスの絆かのように念入りに。」

「大佐は机の上から紙屑を払いのけて、機械が読み上げる判決文のごとき単調さで告げた。」

「連邦大統領の推薦でも取り付けて出直したまえ、出来るものならばな」

回想に浸っていたスヴァールを電子音が現実へ引き戻す。電話に呼ばれていた。

「複雑な暗号化が施された軍事衛星携帯電話を、スヴァールは通信先限定でその使用を許されている。かけてきたのはホワイト大佐の補佐官で、グアヌ州施政についての特殊作戦軍との連絡役だ。」

「通常の、およそ確認に過ぎなくなった定時連絡を早々に済ませる。補佐官はスヴァールが頼みもしないうちに、既に定例となった転送を実行してくれた。」

呼び出し音が鳴る間に腕時計を確かめる。フォートブラッグ陸軍基地及びホワイトハウスのあるアメリカ連邦東部時間帯との時差は十五時間、向こうは日付が変わって小一時間経つ。

「Helloと潜めた応答に、スヴァールは通信先が職務中なのを悟った。」

「すまない。あなたのボスはもうベッドに入られたかと」

「入っております。ファーストレディでないご婦人と」

「またなのか、と呆れる。」

「あなたがS・P.になつてからというものの、彼の愛人宅通いは度を過ぎていて。あなたの隠形術に気が大きくなって、またパラッチの面前を突っ切ってみせたりしてるんじゃないだろうね？」

「……あと一年の辛抱ですから」

明言を避けた答えは、究極のボディガード兼不可視シールドを手に入れたアメリカ連邦大統領の浮かれっぷりを示唆していた。大統領の執務中に限らず一日中、世界中を連れ回されるマリスへと、スヴァルはねぎらいのキスを電波に乗せる。

スヴァルもマリスも、あの時ポーズを退けた大佐の真意を汲み取っていた。大佐は、大統領の推薦を受ければ超法規的措置で結婚の許可が下りる可能性を教えたのだ。

マリスは二年間のS・P・勤務と交換に、スヴァルの配偶者としての推薦を得る契約を大統領に取り付けてきた。マリスが单身ホワイトハウスの大統領執務室に侵入してみせたと大佐の補佐官経由で聞いた時、スヴァルは電話の奥に大佐の愉快そうな笑い声を聞いた。それから約一年、週に一度の通話だけがスヴァルとマリスに辛うじて許された全てだ。大統領がどれだけ放映されようと、四六時中側に控えている筈のマリスの姿は決して映らない。

「先週、首脳会議で大和日本へ同行した折、僅かですが父と会う時間を頂きました。御礼を言えました……父の教えが今、大切な人を守るために必要不可欠になっていると」

呪殺の修法、摩利支天神鞭法を巡って対立した父娘。和解の知らせにスヴァルは心からの安堵と祝福を送る。

「しかし大切な人というのがアメリカ連邦大統領だと知ったら父上は、あなたのように驚愕に硬直したりするのかな」

「……その……それは、大統領の事では」

恥じらいにうるたえるその返事を期待していたと、知られては拗ねられてしまう。軍部の、そして大統領の暗部の只中に身を投じながらもマリスの星は輝きを濁らせない。それを針一本ほども曇らせたいはなかつた。

スヴァルは幸福にたゆたいながら瞼の裏にマリスを描く。

「わたしも愛しているよ」

暁の陽光を手繰り寄せる代わりに、星々は姿をそっと消されて行

く。それでも存在を胸に留め置くだけで、光輝は永続する。例えその在りかを知る者が、暁天の星のごとく僅かな数であるうとも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0995v/>

六連星の王座

2011年7月22日14時27分発行